

学位請求論文

第二言語習得の観点から見た

日本語の形容詞的形式

—トルコ語の形容詞的分詞との対照—

平成 30 年 12 月

氏名 クラ エスラ

学生番号 75428104

岡山大学大学院

社会文化科学研究科

目次

第1章 序論	1
1.1. トルコ語の概要と研究の背景	1
1.1.1. トルコ語の概要	1
1.1.2. 研究の背景	1
1.2. 研究の対象・目的	2
1.2.1. 研究の対象	2
1.2.2. 研究の目的	4
1.3. 研究の方法	5
1.4. 研究の位置づけ	6
1.5. 本論文の構成	8
第2章 トルコ語と日本語のテンス形式と分詞／名詞修飾形式	10
2.1. トルコ語のテンス形式と分詞形式	10
2.1.1. テンス形式	10
2.1.1.1. 現在形または現在進行形	11
2.1.1.2. 中立形	11
2.1.1.3. 過去形	13
2.1.1.4. 完了形	13
2.1.1.5. 未来形	14
2.1.2. 分詞形式	15
2.1.2.1. -(y)En 接辞	15
2.1.2.2. -(E)r, -mEz 接辞	16
2.1.2.3. -DIK 接辞	17
2.1.2.4. -mİş 接辞	18
2.1.2.5. -Ik 接辞	19
2.1.2.6. -(I)İl 接辞	19
2.1.2.7. -EcEK 接辞	20
2.1.2.8. -EsI 接辞	21
2.2. 日本語のテンス形式と名詞修飾形式	21
2.2.1. テンス形式	21
2.2.1.1. 過去形	22
2.2.1.1.1. タ	22

2.2.1.1.2. テイタ	23
2.2.1.2. 非過去形	23
2.2.1.2.1. ル	23
2.2.1.2.2. テイル	24
2.2.2. 名詞修飾形式	25
2.2.2.1. ル	25
2.2.2.2. タ	27
2.2.2.3. テイル	28
2.2.2.4. テイタ	29
2.2.2.5. テアル	30
第3章 トルコ語の形容詞的分詞とタ・テイルの形容詞的用法	31
3.1. 序	31
3.2. 形容詞的分詞の分類とトルコ語の形容詞的分詞	31
3.2.1. 形容詞的分詞の -Ik	33
3.2.2. 形容詞的分詞の -mİş	37
3.2.3. 形容詞的分詞の -(I)İ	41
3.2.4. 動詞と名詞による意味的特徴	45
3.2.5. 形容詞的分詞の対応関係	52
3.3. タ・テイルの形容詞的用法	57
3.3.1. タの形容詞的用法	58
3.3.2. テイルの形容詞的用法	61
3.3.3. 動詞と名詞による意味的特徴	65
3.3.4. 形容詞的なタとテイルの対応関係	70
3.4. -Ik・-mİş とタ・テイルの対照	72
3.4.1. 類似点	73
3.4.2. 相違点	75
3.5. まとめ	76
第4章 質問紙調査によるタ・テイルの使用状況と -Ik と -mİş との対応関係	80
4.1. 序	80
4.2. 質問紙調査とは	80
4.3. 調査の背景と目的	83
4.4. 調査方法と作成	85

4.4.1. 調査方法	85
4.4.2. 調査項目の作成	85
4.4.2.1. 調査対象者及び実施期間	90
4.4.2.2. 文法と回答の判定	91
4.4.3. 予備調査	91
4.4.3.1. 調査の目的及び調査対象者	91
4.4.3.2. 予備調査の結果からの問題点と改善点	91
4.5. 調査の結果及び考察	97
4.5.1. 調査の結果	97
4.5.1.1. 語彙的形狀動詞の場合	97
4.5.1.2. 構造的形狀動詞の場合	105
4.5.1.3. トルコ語の形容詞的分詞との対応について	109
4.5.2. 考察	116
4.5.2.1. タ・テイルの使用状況	116
4.5.2.2. タ・テイルと -Ik と -mİş との対応関係	118
4.6. まとめ	118
第5章 結論	122
5.1. 序	122
5.2. 対照研究的側面について	123
5.3. 応用研究的側面について	126
5.4. 本研究の言語教育への貢献	128
5.5. 本研究の言語の普遍性・多様性への貢献	131
5.6. 今後の課題	132
略号一覧	133
参考文献	134
参考教科書	137
謝辞	138
付属資料 1	140
付属資料 2	149

第1章 序論

1.1. トルコ語の概要と研究の背景

1.1.1. トルコ語の概要

トルコ語は、トルコ共和国で話されている言語である。話者数がもっとも多いのはトルコ共和国であるが、ブルガリア、キプロス、ギリシャ、マケドニア、またドイツをはじめ、フランス、スイス、ベルギー、オランダなど西ヨーロッパのトルコ系移民社会でもトルコ語が話されている（トルコ共和国の国土の大部分を占めるアジア側とヨーロッパ側を含めて約 7050 万人）。チュルク諸語¹の中で最大の話者数を持っており、チュルク諸語の中では南西グループに属している。

基本語順は主語-目的語-動詞という SOV 型である。語幹に名詞化接辞・動詞化接辞などのような派生接辞や、テンス・ムードなどを表す接辞あるいは人称接辞のような屈折接辞が付加できる膠着型の言語であり、構文を構成する面で特に屈折接辞が重要な役割を果たしている。このような点では、日本語とトルコ語は極めてよく似ており、構造的ないし形態的に数多くの類似点が見られる。

1.1.2. 研究の背景

日本語とトルコ語は構造的・形態的には数多くの類似点があり、それぞれの言語の話者がお互いの言語を習得するのは比較的容易であると考えられる。しかし、レベルが上がるにつれて、両言語間の相違点が習得を困難にしていることに加えて、それらの類似点も混同の原因になってしまう。そのため、両言語の混同されやすい項目を対照した上で、それらの類似点と相違点を明らかにする必要がある。本研究では、学習者にとって混同されやすい項目の一つであると考えられる形容詞的な形式を研究の対象とするが、これまでの研究では、それぞれの言語における形容詞的形式に関する研究が多くなされている（トルコ語の形容詞的分詞の研究：Lewis 1967, Gencan 1979, Kornfilt 1997, Nakipoğlu 1998-2000, Korkmaz 2014, Güreer 2014, Hirik 2016; 日本語の形容詞的形式の研究：寺村 1984、森田 1988、Abe 1993、金水 1994、Ogihara 2004、蔡 2013）ものの、両言語の形容詞的形式の対応関係についての対照研究は見当たらない。

¹ チュルク諸語とは、中央アジアを中心にシベリアから東ヨーロッパに至る広範な地域で話される、トルコ語と系統を同じくする諸言語のことである。主なものには、トルコ語のほか、ウイグル語（中国西部）、ウズベク語、カザフ語、キルギス語、トルクメン語（以上中央アジア）、アゼルバイジャン語（コーカサス）などがある。

また、日本語教育では、テイルの習得や用法別の習得難易度を検討した研究が多くなされており、その多くでは、誤用の原因として母語の影響が指摘されている（菅谷 2003、Sugaya & Shirai 2007、陳 2009、阿部・李 2015）。しかし、日本語と数多くの類似点や相違点が見られるトルコ語を母語とする学習者を対象とした研究はなされていないのが現状である。

更に、トルコ人日本語学習者に初級段階で日本語を教えるために使用される日本語の教材の『みんなの日本語 I - II』では、連体修飾のテイルの形容詞的用法と主節のテイルの形容詞的用法は導入されるのに対し、タの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 I』においても『みんなの日本語初級 II』においても取り扱われていない。そして、常にテイルで使用され、それ自体が形容詞的な意味を表すとされる動詞（金田一 1950 の第四種の動詞、寺村 1984 の分類の C グループの動詞、金水 1994 の語彙的形狀動詞）は使われず、結果の状態を焦点化する、連体修飾節においてタもテイルも可能な動詞（金水 1994 の構造的形狀動詞）のみ使用されている。このような導入方法はタとテイルの形容詞的用法を学習する際に、動詞の種類によって使用を区別すべきであるということを意識させていないことに加えて、早期段階でのテイルのみの導入は日本語が上達しても、テイルの用法の定着化を起こす恐れがある。そのため、日本語とトルコ語の対照研究を言語教育に上手く応用できれば、それぞれの言語の母語話者に効果的な教育を行うことができると考えられる。

1.2. 研究の対象・目的

1.2.1. 研究の対象

本論文では、日本語のタとテイルの形容詞的用法とトルコ語の形容詞的分詞の *-Ik* と *-miş* を研究の対象とする。形容詞的分詞に関する研究は英語 (Chomsky 1955-1957, Freidin 1975, Wasow 1977, Levin & Rappaport 1986) をはじめ、ドイツ語 (Kratzer 1994-2000)、ギリシャ語 (Anagnostopoulou 2003)、トルコ語 (Gürer 2014) などの多くの言語において行われている。英語ではそれは「形容詞的受身」と呼ばれることがあり、「動詞的受身」（動詞的な特徴を表す述語用法の受身）と区別されている。動詞的受身と形容詞的受身という 2 種類の受身を初めて体系的に分けたのは Wasow (1977) であり、受身が動詞的であるか、形容詞的であるかが次の基準で判定できると述べている (p. 338-339)。

基準①：形容詞的受身は、形容詞のように名詞の前に現れ、名詞を修飾する。

(A broken/filled/painted box sat on the table.)

基準②：形容詞的受身は、“act, become, look, remain, seem, sound” などの動詞と共に起る。(John acted/became/looked/seemed elated.)

Gürer (2014) は、トルコ語の形容詞的分詞を上記の基準によって判定し、2.1.2 節で紹介する分詞のうち、-Ik, -mİş と -(I)II による分詞を形容詞的分詞としている。そして、Kratzer (1994-2000) の分詞分類を使用し、統語的・意味的な観点から -Ik を単なる状態を表す語彙的分詞とし、-mİş を結果による永続の状態を表す結果状態分詞とし、そして -(I)II を一時的な状態を表す目標状態分詞と分類している。本論文の第 3 章では、トルコ語の形容詞的分詞を紹介する際、-Ik, -mİş と -(I)II の全ての用法と機能を紹介し、考察を行うが、目標状態分詞とされる -(I)II は目的の解釈というムード的な意味を持っており、単なる状態や結果の状態の意味を表す -Ik と -mİş と意味的な面でも形態的な面でも対応する場合が非常に少ないため、また目的の意味を持っていることで本論文の対象であるタとテイルよりテアルに対応すると考えられるため、本研究の対象としない。

日本語では、トルコ語と同様に、動詞が動詞らしさを失い、主体の状態・性質を表す形容詞のような性格を帯びるタとテイルという 2 つの形式が存在する。タとテイルのこのような用法を「単純状態態」（金田一 1955）や「形容詞的用法」（寺村 1984）と呼ぶことがある。寺村 (1984) によると、形容詞的用法とは、主体のありようを時間軸に沿った変化、展開として見て、その一局面を捉えて述べるものではなく、主体のある様子を他者と比較して、特徴づけているものであるとする (p. 139)。

連体修飾節における形容詞的なタとテイルは結果の状態を焦点化するか（構造的形状動詞（壊れる、破れる等））、それを焦点化せず動詞自体がほぼ形容詞的用法専用のものであるか（語彙的形狀動詞（優れる、変な形をする等））によって見分けられる。語彙的形狀動詞の場合には、主節のテイルは連体修飾化すると、タに交替され、構造的形狀動詞の場合には連体修飾節においてタもテイルも可能である（金水 1994）。それに対してトルコ語では、日本語の形容詞的なタとテイルに対応する形容詞的分詞の -Ik と -mİş の使用は動詞の自他と語彙的アスペクト、そして統語構造における vP や VoiceP の有無による動作性を持つかどうかによって分けられ、構造的（統語的）位置による制限が見られない。

- (1) a. Cam kır-ik → Kır-ik/ kır-il-miş cam
 ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス
 ‘ガラスが割れている → 割れている／割れたガラス’
- b. Cam kır-il-miş → Kır-ik/ kır-il-miş cam
 ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス
 ‘ガラスが割れている → 割れている／割れたガラス’

両言語における形容詞的形式が持つこのような特徴は、これまでの研究において対照されておらず、両言語の形式の対応関係が究明されていないため、また、1.1.2 節で述べたトルコ人日本語学習者を対象としたタとテイルの習得に関する研究が見当たらず、現状として日本語教育の教材に見られる学習項目に問題があるため、日本語とトルコ語の形容詞的形式を本論文の研究対象とし、トルコ人日本語学習者を対象に調査を行い、両言語の形式の使用状況と、それらの対応関係を明らかにする。

1.2.2. 研究の目的

本研究は対照的な観点と応用的な観点という 2 つの観点に基づきながら、以下の 5 つの点を目的とする。

対照的な観点から：

1) トルコ語と日本語の形容詞的形式の究明

それぞれのトルコ語の形容詞的分詞の形態的・統語的特徴や連体修飾節を形成する際に見られる制限について概観したのちに、それらの分詞が接続する動詞と被修飾名詞の意味的特徴について考察を行い、それぞれの分詞の対応関係を明示する。そして、トルコ語の形容詞的分詞に対応する日本語のタとテイルの形容詞的用法の形態的・意味的な特徴と動詞を形容詞化する際の成立条件について概観し、両形式の動詞による対応関係と構造的位置による対応関係について記述する。

2) トルコ語と日本語の形容詞的形式の対照研究

目的 1 で明示した両言語の形容詞的形式の特徴に基づき、両言語の形式の対照を行い、類似点と相違点を明確にする。

応用言語学的な観点から：

3) 形態的・統語的な影響の有無

トルコ人日本語学習者の母語に存在しない構造的位置による形容詞的形式の交替現象がタとテイルの習得に影響をもたらすかどうかを探る。

4) 教育の導入手法の影響の有無

タとテイルの使用状況を究明し、正答数の多い形式と少ない形式を明らかにした上で、早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化が形容詞的形式の使用に影響を及ぼすかどうかを探る。

5) 両言語の形式の対応関係

日本語の形容詞的形式とトルコ語の形容詞的分詞がどのように対応づけられるかを明らかにし、両言語の形式の類似点と相違点とその対応に影響するかどうかを究明する。

1.3. 研究の方法

日本語とトルコ語の形容詞的な形式の形態的、統語的及び意味的な特徴を明らかにし、両言語の対照を行うために、それらの形式に関する先行研究の指摘を見たうえで言語テストを用いる。それらの言語テストには、①出来事中心の様態副詞や期間を表す副詞との両立という補足語／付加語との関係を探る形態的な観点からのテストと、②状態性／動作性と後戻り（一時的か恒常的か）の可能性という意味的な観点からのテストがある。また、先行研究の指摘に従い、形容詞的形式の動詞の種類との関係と構造的位置による形式の交替に関する種々の観点から考察を行う。これらを通して、日本語の形容詞的なタとテイルがトルコ語の形容詞的分詞と同様の振る舞いをしているかどうか、どのような点が類似し、相違しているかを明らかにする。

更に、本研究では、日本語のタとテイルの形容詞的用法の使用状況を明らかにし、両言語間に見られる類似点と相違点のうち、どのような要因が習得に影響を及ぼすか、あるいは類似点と相違点以外の要因（早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化）が見られるかどうかを検討する。また、日本語の形容詞的形式とトルコ語の形容詞的分詞がどのように対応づけられているかを明らかにし、両言語の形式の類似点と相違点はその対応に影響しているかどうかを究明する。このような応用的な観点から、トルコ語を母語とする日本語学習者（117名）を対象に、質問紙調査（アンケート調査）を実施した。調査は大きく2つの部分から成っている。1つは、構造的位置による使用状況とそれ以外の要因（早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化）による使用状況を検討する文法テスト（問題グループⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）であり、もう1つは、両言語の形式の対応関係を検討する自由翻訳テスト（土-日訳・日-土訳）（問題グループⅤ）である。

本調査は客観テストの形式で作成されており、問題グループⅠ、Ⅱ、Ⅲは再認形式である4つの選択肢からの多肢選択法を使用したものである。そして、問題グループⅣは再生形式である変換法を使ったものである。また、自由翻訳テストの問題グループⅤは再生形式である日本語ないし母語に翻訳させる翻訳法を使ったものである。問題グループⅠとⅡは母語に存在しない構造的位置による形式の交替が形容詞的なタとテイルの使用に影響をもたらすかどうかを探ることを目的としている（1.2.2節の目的3）。そのため、問題グループⅠは主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題から成っている。それに対して、問題グループⅡは連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題を含んでいる。問題グループⅢはタとテイルの使用状況を究明し、正答数の多い形式と少ない形式を明らかにした上で、早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化が形容詞的形式の使用に影響を及ぼすかどうかを探ることを目的としてい

る (1.2.2 節の目的 4)。そのため、構造的位置による要因を除き、主節の形を挙げず、連体形のタを問う問題から成っている。次に、問題グループIVにおいては「壊れる」、「着る」、「禿げる」などのようなタもテイルも可能な構造的形状動詞が使われ、動詞の辞書形を挙げて、それを適当な形式に変えさせるという変換法が使用されている。このような動詞はタもテイルも可能であるため、グループ I、II と III と違って、答えが一つ以上でも良いという指示が与えられた。また、語彙的形狀動詞の問題の形式と同様に、構造的形狀動詞の設問も本調査の目的に沿って形成されている (1.2.2 節の目的 3 と 4)。自由翻訳テストである問題グループVでは、両言語の形式の対応関係を探るため、連体修飾節においてタでしか現れない語彙的形狀動詞が使われず、構造的形狀動詞のみが使用されている。データの分析には、カイニ乗 (χ^2) 検定を用いた統計分析を行う。

1.4. 研究の位置づけ

トルコ語の伝統文法では、分詞形式は動詞から形容詞と名詞を派生する用法や受動的・能動的な意味を表すという意味的な特徴が述べられてきた (Lewis 1967, Gencan 1979, Kornfilt 1997, Göksel & Kerslake 2005², Korkmaz 2014)。また、分詞は過去分詞、現在分詞と未来分詞というそれらが表す時間によって分類され、それらの分詞形式が接続する動詞や被修飾名詞との関係や副詞との両立、成立条件などの形態的な特徴、または統語的な特徴には触れられていない。一方、言語学的な観点から行われた分詞に関する研究は、英語の *adjectival passives* ‘形容詞的受身’ や *adjectival participles* ‘形容詞的分詞’ という用語を借用し、伝統文法では「動詞派生形容詞」や「動詞派生名詞」と慣習的に呼ばれているものをトルコ語で言及するときには *sıfatlık edilgen* ‘形容詞的受身’ (Gürer et al. 2012) と言い変えており、英語で言及するときには *adjectival passives/adjectival participles* (Nakipoğlu 2000³, Kurtoğlu 2006, Gürer 2014) としている。これらの研究では、-Ik、-mİş と -(I)II は形容詞的受身／形容詞的分詞とされ⁴、非対格動詞と共起できるが、非能格動詞とは共起できないという動詞の種類との関係や補足語・句との両立という形態的な特徴、また統語的な特徴、そして一時的・恒常的という意味的な特徴に関して指摘されている。しかし、それらの分詞が接続する動詞と被修飾名詞によって分詞にどのような意味の変

² Göksel & Kerslake (2005) は、-Ik、-mİş と -(I)II を動詞派生名詞や動詞派生形容詞接辞として取り扱い、派生的な用法のみについて述べているが、それらが表す意味に関しては言及していない。

³ Nakipoğlu (2000) では、-mİş のみに関して考察されている。

⁴ Gürer (2014) のみは形容詞的分詞に -(I)II を入れ加えている。

化が見られるか、また分詞や名詞による動詞のアスペク的な意味の変化についての考察はまだされていない。

また、日本語のタとテイルの形容詞的用法に関しては、どのような動詞に付加でき、どのような意味を表しているのか、そしてタとテイルの連体修飾節に見られる交替現象に関する考察が多く先行研究に見られる（金田一 1955、寺村 1984、森田 1988、Abe 1993、金水 1994、Ogihara 2004、金 2007、田川 2010、蔡 2013）。これらの研究のうち、Abe (1993)、金水 (1994)、Ogihara (2004) と田川 (2010) は形容詞的なタ節には動作主句、経験者句、期間／期限と場所を表す表現、そして様態副詞が生起できないことを指摘しているが、形容詞的なテイルに関しては、そのような指摘は言語テストを通して明示されておらず、テイルが形容詞的解釈のみを表していると述べられている。

次に、上記に述べたように、これまでの研究ではそれぞれの言語における形容詞的形式に関する研究が多くなされているものの、両言語の形容詞的形式の対応関係についての対照研究は見当たらない。日本語とトルコ語は構造的・形態的には数多くの類似点を共有しており、それぞれの言語の話者がお互いの言語を習得するのは比較的容易であると考えられる。しかし、レベルが上がるにつれて、両言語間の相違点が習得を困難にしていることに加えて、それらの類似点も混同の原因になってしまう。そのため、両言語の混同されやすい項目を対照した上で、それらの類似点と相違点を明らかにする必要がある。

更に、上記に述べた日本語の形容詞的形式に関する研究では、トルコ語の形容詞的分詞に使用された言語テストにおける形容詞的形式が一時的な状態を表しているか、それとも恒常的な状態を表しているかを判定する *hala* ‘まだ’ という時間副詞との両立についてのテストが使用されておらず、タとテイルが *-Ik* と *-mİş* と同様の振る舞いをしているのかは未解明である。

1.1.2 節でも記述したように、日本語教育の現場では、テイルの習得や用法別の習得難易度を検討した研究が多くなされており、その多くでは、誤用の原因として母語の影響が指摘されている（菅谷 2003、Sugaya & Shirai 2007、陳 2009、阿部・李 2015）。また、タとテイルの使用状況を検討する研究（その多くはタを除いている）では、活動動詞、到達動詞、達成動詞などのような動詞の種類別のテンス・アスペクトの使用状況を検討するものが多く、テイルは活動動詞と結び付きやすく、タは達成・到達動詞と結び付きやすいという結果が得られている（Shirai 1995, Shirai&Kuroko 1998, 三村 1999, 菅谷 2002, 塩川 2007, 簡・中村 2010）。そして、それらの研究はタとテイルの主節における使用のみを考察するものであり、主節と連体修飾節の両位置における使用を論じたのは、塩川 (2007) しか見当たらない。塩川 (2007) は、主節においてテイル、連体修飾節においてタとテイルのいずれも容認できるもの（本論文で述べている金水 (1994) の構造的形状動詞

に相当する) を用い、連体修飾節におけるタとテイルの交替現象について学習者の選択傾向を分析することで本研究に類似した分析を行っているが、動詞の種類との結び付きの観点から論じており、形容詞的なタとテイルの構造的位置の違いによる影響や両位置における正答・誤答に関する考察は行っていない。

第二言語習得の観点から見た日本語の形容詞的形式に関する研究は見当たらず、形容詞的形式の習得状況は用法別の習得難易度を検討する研究において論じられている(許 1997-2000, 菅谷 2004)。しかも、それらの研究はタを除き、テイルの使用のみを検討したものである。

更に、従来のテイルの習得研究には、テルグ語、ベンガル語、ロシア語、ドイツ語、ブルガリア語、中国語、英語、フランス語などのような様々な言語を母語とする日本語学習者を対象としているものが多い。しかし、日本語と数多くの類似点と相違点が見られるトルコ語を母語とする学習者を対象とした研究はなされていないのが現状である。

トルコ人日本語学習者の場合、初級段階で日本語を教えるために使用される日本語の教材の『みんなの日本語初級 I・II』では、連体修飾のテイルの形容詞的用法と主節のテイルの形容詞的用法は導入されるのに対し、タの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 I』においても『みんなの日本語初級 II』においても取り扱われていないという導入手法の問題がある。そして、いつもテイルで使用され、それ自体が形容詞的な意味を表すとされる動詞(金田一 1950 の第四種の動詞、寺村 1984 の分類の C グループの動詞、金水 1994 の語彙的形狀動詞)は使われず、結果の状態を焦点化する、連体修飾節においてタもテイルも可能な動詞(金水 1994 の構造的形狀動詞)のみ使用されている。このような導入手法はタとテイルの形容詞的用法を学習する際に、動詞の種類によって使用を区別すべきであるということ意識させていないことに加えて、早期段階でのテイルのみの導入は日本語が上達しても、テイルの用法の定着化を起こす恐れがある。

上記を鑑みて、本研究は、トルコ語と日本語の形容詞的形式についての未解明な点を解明する上で、統一的な説明を試みる。またそれらの言語現象を教育に応用することを通して、記述的及び応用言語学的に有意義な知見を得られる対照研究になると考えられる。

1.5. 本論文の構成

本論文は全 5 章から構成されている。本章では、トルコ語の概要と研究の背景、研究の対象と目的、そして研究の方法と位置づけを述べた。第 2 章では、トルコ語と日本語のテンス形式と分詞形式に関して説明する。第 3 章では、本研究の対象であるトルコ語の形容詞的分詞と日本語のタとテイルの形容詞的用法の形態的、統語的、そして意味的な特徴についてそれぞれ詳細に記述したのちに、特に、形態的及び意味的な観点からト

トルコ語と日本語の形容詞的形式を対照し、類似点と相違点を明らかにする。第 4 章では、応用言語学的な観点から、トルコ人日本語学習者を対象とした質問紙調査を通して、日本語のタとテイルの使用状況を明らかにし、トルコ語の形容詞的分詞との対応関係を検討する上で、第 3 章で記述した言語間の類似点と相違点のうち、どのような要因が習得に影響をもたらすかについて考察を行う。そして、第 5 章では、本論文のまとめと今後の課題を述べる。

第2章 トルコ語と日本語のテンス形式と分詞／名詞修飾形式

2.1. トルコ語のテンス形式と分詞形式

2.1.1. テンス形式

工藤 (2014) によると、テンスとは、「発話行為時」を基準として、「事象成立時」の時間的位置づけを表し分ける形態論的カテゴリーである (工藤 2014:186)。

また、Göksel&Kerslake (2005) は、テンスの定義を以下のようにしている。

原文：“Tense expresses the temporal location of the situation being talked about, indicating whether this is before, at, or after a particular reference point (usually, but not always, the moment of speech) (p.283).”

逐語訳：「テンスとは、発話された事象の特定の基準時やその前後という時間的位置づけを表す（その特定の基準時は、いつもではないが、ほとんどの場合は発話時のことを指す）(Göksel&Kerslake, 2005:283)。」

トルコ語のテンス体系について、Göksel&Kerslake (2005) は、以下のように述べている。

原文：“In Turkish the primary tense differentiation is between past and non-past. The suffixes involved in the expression of present and future tense (*-(I)yor*, *-mAktA* and *-(y)AcAK*) are markers of relative tense. This means that the expression of absolute present and future tense is dependent on the *absence* of any other tense marker, such as the past copula *-(y)DI*, which would indicate a reference point other than the moment of speech (p.284).”

逐語訳：「トルコ語では、テンスの主要な相違は過去と非過去の間にある。現在時制と未来時制の表現を伴う接尾辞 (*-(I)yor*、*-mAktA* と *-(y)AcAK*) は相対テンスのマーカである。これは、絶対テンスの現在時制と未来時制の表現が、発話時以外の基準時を表す過去のコピュラの *-(y)DI* のような他のテンスマーカがないことによって決まることを意味する (Göksel&Kerslake, 2005:284)。」

トルコ語のテンスマーカは、以下のように主に5つに分けられる。

1. 現在形または現在進行形
2. 中立形
3. 過去形

4. 完了形
5. 未来形

以下では、具体例をあげながら、それぞれのテンスマーカ―について概説する。

2.1.1.1. 現在形または現在進行形

動詞語幹に **-(I)yor** という接尾辞を付けると、動詞の現在形（主語は3人称）になる（林 2013:129）。

- (1) Anne-m yemek yap-**iyor**.
 お母さん-POSS.1SG 料理 作る-PROG
 ‘お母さんは料理を作っているところだ。’

Korkmaz (2014) は現在形または現在進行形として **-(I)yor** の他に **-mAdA** と **-mAktA** も挙げており、**-mAdA** より **-mAktA** のほうが多く使用されていると述べている。

- (2) Uğraş-**mada**-yız... Bak, ne kadar çılgın-ız, anla!
 頑張る-PROG-1PL ほら どのくらい 夢中-1PL 分かる（命令形）
 ‘（私たちは）今頑張っているところだ。ほら、（私たちは）どんなに夢中である
 か分かってくれよ！’
(Korkmaz 2014:557)

- (3) Yanıl-**makta**-sın Çudaroğlu!...
 間違う-PROG-2SG チュダロール（名字）
 ‘（あなたは）間違っているよ、チュダロール！’
(Korkmaz 2014:558)

上記の現在形または現在進行形の意味について林 (2013) は、すでに始まっていてまだ終わっていない動作や出来事を表すと述べている。

2.1.1.2. 中立形

中立形、あるいはアオリストとも呼ばれる動詞の形式は、トルコ語で **-(A/I)r** という接尾辞で表される。動詞の語幹の最後が母音の場合 **-r** を付け (4a)、動詞の語幹の最後が子音で、単音節の（母音が一つしかない）語幹の場合 **-Ar** を付け (4b)、そして動詞の語幹の最後が子音であるが、動詞語幹が単音節ではない場合は **-Ir** を付ける (4c)（林 2013:134）。

- (4) a. de-r ‘言う’
 b. yap-ar ‘作る/する’
 c. anlat-ır ‘説明する’ (林 2013:134)

しかし、例外もある。語幹の最後が r, l, n であり、かつ、単音節のいくつかの動詞語幹には、(4b)のように -Ar は付かず、その代わりに -Ir が付く (林 2013:135)。

- (5) a. var-ır ‘着く’
 b. al-ır ‘取る’
 c. san-ır ‘(〜と) 思う’ (同上)

中立形の否定形は以下の例 (6) のように動詞語幹に -mEz を付けることによって作られる。

- (6) Git-mez. ‘行かない’

また、トルコ語の中立形の意味について林 (2013) は、「実際の個別状況と関係しない真理、習慣、属性、規則を述べる場合、単なる可能性に言及する場合、そして、話し手の個人的見解や意志であることを示す場合に使われる (p.137)」と述べ、以下の例を挙げている。

- (7) Dağ dağ-a kavuş-maz, insan insan-a kavuş-ır. (諺)
 山 山-DAT 巡り会う-AOR.NEG 人 人-DAT 巡り会う-AOR
 ‘山は山に巡り会えないが、人は (いつの日か) 人に巡り会う。’ (林 2013:137)

- (8) Serpil her gün beş kilometre koş-ar. (習慣)
 セルピル 毎日 五 キロメートル 走る-AOR
 ‘セルピルは毎日5キロ走る。’ (同上)

- (9) Mustafa bilgisayar-dan iyi anla-r. (属性)
 ムスタファ コンピュータ-ABL よく 理解する-AOR
 ‘ムスタファはコンピュータをよく理解する (コンピュータに詳しい)。’ (同上)

- (10) Türkiye-de vali, İçişleri Bakanlığı tarafından ata-n-ır. (規則)
トルコ-LOC 県知事 内務省 によって 任命する-PASS-AOR
‘トルコでは県知事は内務省によって任命される。’ (同上)

- (11) Ekonomi bir gün düzel-ir. (可能性、見解)
経済 ある 日 改善する-AOR
‘経済はいつか改善する。’ (同上)

2.1.1.3. 過去形

過去形は、すでに終了した動作や行為を表す。トルコ語では、動詞語幹に -DI という接尾辞を付けると、動詞の過去形になる (林 2013:117)。

- (12) Bura-ya gel-di. ‘(彼/彼女は) ここへ来た。’ (林 2013:118)
ここ-DAT 来る-PST

- (13) Ev-den çık-tı. ‘(彼/彼女は) 家から出た。’ (同上)
家-ABL 出る-PST

トルコ語の過去形は、日本語の過去形とは異なり、状態、感情、感覚の変化を表す動詞などの過去形は、過去にそのような変化が起こり、その状態が今でも続いているという含意を持つことができる (林 2013:120)。

- (14) Yağmur-dan ıslan-dı.
雨-ABL 濡れる-PST
‘(彼/彼女は) 雨のせいで濡れている (濡れた)。’ (林 2013:120)

- (15) Çok susa-dı.
とても 喉が乾く-PST
‘(彼/彼女は) とても喉が乾いている (喉が乾いた)。’ (同上)

2.1.1.4. 完了形

動詞語幹に -miş という接尾辞を付けると、以下のように、動詞の完了形 (主語は3人称) になる (林 2013:121)。

- (16) Gel-miş. ‘(彼/彼女は) 来た。’ (林 2013:121)

林 (2013) は、完了形は、すでに終わった動作や出来事を表すという点で過去形と共通しているが、それ以外の意味は大きく異なると述べ、両方の形式の意味の相違を以下の例を挙げながら説明している。

(17) a. Ozan yemek ye-di.

オザン 食事 食べる-PST

‘オザンは食事を食べた。’

b. Ozan yemek ye-miş.

オザン 食事 食べる-PFT.EV

‘オザンは食事を食べたようだ／食べたらしい／食べたそうだ。’

(林 2013:122)

上記の例 (17a) (過去形) は、話し手自身がオザンの食事するところを見ていたかもしれないし、見ていなくて後から知ったかもしれないが、要するに、「オザンが食事をした (今はもうしていない)」という過去の出来事だけを伝えている。一方、例 (17b) は、話し手はオザンが食べ終わった後で「オザンが食事をした」ことに気づいたことを明確に伝えようとしている。「後で」というのがどのくらい後かは、場合によって様々である。今 (話している時) 初めて気づいた、ということもあるだろうし、ずっと以前 (ただし、オザンが食べ終わった後) にもう気づいていた、ということもある。また、どうして気づいたかという点について言えば、①話し手が、テーブルの上の空の皿を見た、②オザン自身から聞いた、③オザン以外の誰かから聞いた、④食事をし終えたばかりのオザンと出くわしたなど、また様々である (林 2013:122-123)。

過去形と完了形のもう一つの大きな違いは、表現された出来事に対する話し手の態度に現れる。話し手が後から気づいたということは、典型的には話し手がその出来事に立ち会っていないということに他ならない。つまり、話し手はその出来事に参与していない、間接的に知った、ということになる (林 2013:123)。

2.1.1.5. 未来形

トルコ語の未来形は、動詞語幹に -EcEK を付けることによって作られる。未来形の -EcEK の意味について林 (2013) は、まだ始まっていない、未来の動作や出来事を表し、話し手は更にそれらが未来に起こると考えるに足る何らかの根拠を知っていると述べ、以下のように例示している。

- (18) Gel-ecek. ‘(彼/彼女は) 来るはずだ。’ (林 2013:128)
来る-FUT

上記の例 (18) の場合、話し手は、①「彼/彼女」が来ると昨日言っていたのを聞いた、②「彼/彼女」は毎日ここに来るから今日も来るだろうと思っている、③「彼/彼女」は天気の良い日には必ずここに来るので、今日は天気がいいからきっと来るに違いないと思っている、などの推測をした上で、「Gelecek」‘来るはずだ’と言う (林 2013:128)。

2.1.2. 分詞形式

分詞は、非定形動詞の一種であり、形容詞のように名詞を修飾する動詞の形式である。分詞は形容詞の機能も動詞の機能も持っている。その動詞の機能で、動作や時間も持つ。分詞が時間の意味合いを持つことは、それらを定形動詞に近づける (Korkmaz 2014:784)。

これまでの多くの先行研究では、トルコ語の分詞はそれらの時間的な意味合いによって分類されているが、以下ではそのような分類をせず、分詞接辞をそれぞれ具体的に説明する。

これまでの先行研究によって主に 8 つの分詞接辞が挙げられている。

1. -(y)En 接辞
2. -(E)r, -mEz 接辞
3. -DIK 接辞
4. -mİş 接辞
5. -Ik 接辞
6. -(I)II 接辞
7. -EcEK 接辞
8. -EsI 接辞

2.1.2.1. -(y)En 接辞

林 (2013) は、分詞を所属人称接尾辞が付くことのできるものと、できないものの、2種類に分けており、-(y)En を所属人称接尾辞が付かない分詞としている。分詞の -(y)En は、普通、分詞の動詞としての意味に従えばその主語と解釈される名詞を修飾する (林 2013:191)。

- (19) Gel-en adam ‘来た男の人’ (林 2013:191)
来る-PRT 男の人

上記の例 (19) では、「gelen」 ‘来た’ という分詞が「adam」 ‘男の人’ を修飾している。動作主は「adam」 ‘男の人’ であり、「来た」の主語に相当する。

分詞を時間的な意味合いによって分類した先行研究は、-(y)En を現在分詞として扱っているが、過去と進行の意味も表すことが知られている。

(20) Çalış-an öğrenci-yi herkes sev-er. (現在)

勉強する-PRT 学生-ACC みんな 好き-AOR

‘勉強する学生がみんな好きだ。’

(21) Otobüs-ten in-en kadın-a araba çarp-tı. (過去)

バス-ABL 降りる-PRT 女の人-DAT 車 ぶつかる-PST

‘バスを降りた女の人に車がぶつかった。’

(22) Mışıl mışıl uyu-yan bebek ağla-yarak uyan-dı. (進行)

すやすや 寝る-PRT 赤ちゃん 泣く-GER 目を覚ます-PST

‘すやすや寝ていた赤ちゃんが泣きながら目を覚ました。’

2.1.2.2. -(E)r, -mEz 接辞

分詞の -(E)r は、上記に挙げた -(y)En のように現在分詞として扱われるが、意味的には -(y)En と比べると、連続性を表す現在分詞である (Korkmaz 2014:815)。

(23) Kapan-ır-ken diz-im-e çarp-ar korku-su-yla büyük,

閉まる-AOR-GER 膝-POSS.1SG-DAT ぶつかる-PRT 懸念-POSS.3SG-と 大きい

yaylı kapı-yı ihtiyat-la aç-ıyor-um.

バネの入った ドア-ACC 注意-と 開ける-PROG-1SG

‘(私は) 閉まる時に私の膝にぶつかるという懸念から、大きくて、バネの入ったドアを注意して開けている。’

(Korkmaz 2014:815)

同様に、-(E)r の否定形である -mEz も付加された動詞の動作に連続性の意味を与える (Korkmaz 2014:820)。

- (24) Dayan-ıl-maz bir sıcak var bugün.
我慢する-PASS-PRT 1 暑さ ある 今日
‘今日は我慢できない暑さがある。’

2.1.2.3. -DIK 接辞

2.1.2.1 節で示したように、林 (2013) は、分詞を所属人称接尾辞が付くことのできるものと、できないものの、2 種類に分けており、-(y)En を所属人称接尾辞が付かない分詞であると記述している。林 (2013) は、そのもう一つのタイプである所属人称接尾辞が付く分詞として、-DIK を挙げている。

- (25) oku-duğ-um kitap ‘(私が) 読んだ本’ (林 2013:192)
読む-PRT-POSS.1SG 本

被修飾語は、当然であるが、動詞としての分詞の主語ではなく、分詞の主語以外に相当する (林 2013:193)。上記の例 (25) では、被修飾語は「私は本を読んだ」という場合の「本」、いわゆる目的語に相当する。

2.1.2. 節でも述べたように、時間的な意味合いによる分類によって、-DIK は過去分詞として捉えられているが、現在と進行の意味も表す。

- (26) Git-tiğ-in parti nasıl-dı? (過去)
行く-PRT-POSS.2SG パーティー どう-PST
‘(あなたが) 行ったパーティーはどうだったの?’

- (27) Bu dünya-da en şaşır-dığ-ım şey kadın-lar-dır. (現在)
この 世界-LOC 一番 びっくりする-PRT-POSS.1SG もの 女性-PL-GM⁵
‘この世で一番驚くものは女性だ。’

- (28) Bu seyret-tiğ-iniz görüntü-ler 1990 yıl-ı-na ait. (進行)
この 見る-PRT-POSS.2PL 画像-PL 1990 年-POSS.3SG-DAT 所属
‘(あなたたちが) 見ているこれらの画像は1990年のものだ。’

⁵ 述語形式に現れるマーカー「-DIr」は、断定のモダリティを表しているものであり、更に出来事の客観的な捉え方を表すため、本論では Göksel&Kerslake (2005) に使われる「Generalizing Modality」の名称の省略形「GM」をグロスに付けることにする。

2.1.2.4. -miş 接辞

トルコ語の -miş の機能は次の通りである：(i) 述語用法では動詞や名詞に付加し、「エヴィデンシャルな（コピュラ） マーカー」や「完了マーカー」として機能する (cf. 29)。(ii) 自動詞から名詞を派生する (Göksel&Kerslake 2005) (cf. 30)。(iii) 動詞から形容詞を派生する (Korkmaz 2014) (cf. 31)。

- (29) a. Koş-muş. ‘（彼／彼女は） 走ったようだ／走ったそうだ／走ったらしい。’
走る-PFT.EV
b. Başla-mış-tı-k. ‘（私たちは） もう始めていた。’
始める-PFT-PST.COP-1PL
- (30) a. er-miş ‘聖人’
達する-NMZ
b. geç-miş ‘過去’
過ぎる-NMZ
- (31) a. O-nun oku-muş bir adam ol-duğ-u belli. (名詞修飾用法)
彼-GEN 教育を受ける-PRT 一つ 男の人 なる-PRT-POSS.3SG 明らか
‘彼が教育を受けた男であることは明らかだ。’
b. O adam oku-muş. (述語用法)
あの 男の人 教育を受ける-PRT
‘あの男は教育を受けた。’

述語用法の -miş は (29a) のように動詞語幹 + -miş の構造で使われ、他の TAM マーカーが付加されない場合、エヴィデンシャルティ (evidentiality) とパーフェクティヴィティ (perfectivity) の両方を表し、(29b) のように他の TAM マーカーが付加される場合は、パーフェクティヴィティのみを表す (Göksel&Kerslake 2005)。それに対して Korkmaz (2014) は、分詞用法では述語形式のエヴィデンシャルティの意味が喪失し、動作が完了しているという意味のみが含意されると記述している。そして、分詞の -miş で作られた名詞句の被修飾語はその動詞の主語に相当する。更に、Gürer (2014) は -miş を「結果状態分詞」とし、-miş は自動詞に接続する場合、非対格動詞のみと共起できるという制限がある (Nakipoğlu 2000, Kurtoğlu 2006, Acartürk&Zeyrek 2010, Gürer et al. 2012)。本研究の対象である -miş の形態的・統語的及び意味的な機能に関しては、第 3 章にて詳細に説明する。

2.1.2.5. -Ik 接辞

トルコ語の -Ik の機能は次の通りである：(i) 動詞から名詞を派生する (cf. 32a)。 (ii) 動詞から形容詞を派生する (Göksel&Kerslake 2005:53) (cf. 32b-c)。

- (32) a. kon-uk ‘お客さん’ kay-ık ‘小舟’
 着陸する-NMZ 滑る-NMZ
- b. Kır-ık bardak-lar-ı çöp-e at-tı-m. (名詞修飾用法)
 割る-PRT グラス-PL-ACC ゴミ-DAT 捨てる-PST-1SG
 ‘(私は) 割れたグラスをゴミに捨てた。’
- c. Bardak-lar kır-ık. (述語用法)
 グラス-PL 割る-PRT
 ‘グラスは割れている。’

-Ik は、一般的に受身の意味をもつ形容詞を派生する (Lewis 1967, Kornfilt 1997, Banguoğlu 2011)。特にこの接辞で派生された形容詞は「完了」の意味をもつ (Korkmaz 2014)。また、Gürer (2014) は -Ik を「語彙的分詞」としており、-miş と同様に、-Ik にも自動詞に接続する場合、非対格動詞のみと共起できるという制限がある (Nakipoğlu 2000, Kurtoğlu 2006, Acartürk&Zeyrek 2010, Gürer et al. 2012)。本研究の対象である -Ik の形態的・統語的及び意味的な機能に関しては、第 3 章にて詳細に説明する。

2.1.2.6. -(I)II 接辞

トルコ語の -(I)II は形容詞や形容詞句を派生する機能をもつ (Göksel&Kerslake 2005)。

- (33) a. Taş-a sar-ılı bir kağıt var-dı. (名詞修飾用法)
 石-DAT 包む-PRT 一つ 紙 ある-PST.COP
 ‘石に包まれている／包まれた紙があった。’
- b. Kağıt taş-a sar-ılı-ydı. (述語用法)
 紙 石-DAT 包む-PRT-PST.COP
 ‘紙は石に包まれていた。’

Gürer (2014) はこの分詞を「目標状態分詞」として取り扱っており、状態を表す形容詞を派生すると言える。-(I)II に関しては、その -(I)I は受身形であり、-(I)II は -(I)I-I として結合した形式であることが指摘されている (as-ıl-ı = as-ıl-mış ‘貼られている／貼られた／貼ってある’) (Banguoğlu 2011, Korkmaz 2014)。しかし、Kornfilt (1997) は -(I)I ではなく、-n を取る動詞の「kapa-」 ‘閉める’ を挙げ、このような動詞には -(I)II が付加でき、

「kapa-lı」という形容詞が派生されることによって、これまでの伝統文法では結合形式として扱われた -(I)I-I を -(I)II という新しい形式として捉えることを提案している。確かに、「kapa-n-」‘閉められる／閉まる’という動詞の形成は現代トルコ語において文法的であるが、指摘されている通り -(I)I-I の -(I)I が受身形であれば、「kapa-l-」という受身形を取った動詞の形成が可能であったが、それは非文法的である。そのため、-(I)II の -(I)I は受身形ではなく、-(I)II を単独な分詞接辞として取らえるべきであると言える。-(I)II の形態的・統語的及び意味的な機能の詳細に関しては、第3章にて説明する。

2.1.2.7. -EcEK 接辞

述語形式の未来時制接辞である -EcEK は、分詞形式としても使用され、述語形式の場合と同様に未来を表す。そのため、先行研究では「未来分詞」として扱われている。

被修飾語が主語か主語以外か（関係節内に主語があるかないか）については、未来分詞の -EcEK はどちらにも使える。被修飾語が主語以外の場合、-EcEK の後ろには (-DIK の場合と同じく) 所属人称接尾辞が付加される (林 2013:196)。

- (34) Bu iş-e bak-acak görevli
 この 仕事-DAT 見る-PRT 担当者
 ‘この仕事を見る (担当する) ことになっている担当者’ (林 2013:196)

- (35) Sen-in tren-e bin-eceğ-in istasyon
 あなた-GEN 電車-DAT 乗る-PRT-POSS.2SG 駅
 ‘あなたが電車に乗ることになっている駅’ (同上)

上記の例 (34) では、被修飾語の「görevli」‘担当者’が「仕事を担当する」という動作の動作主、いわゆる主語であるため、-EcEK の後ろに所属人称接尾辞が付いていないが、例 (35) では、被修飾語の「istasyon」‘駅’が「相手の乗る所」を指し、主語以外のものを指しているため、所属人称接尾辞が付いている。

なお、被修飾語が関係節の主語と解釈できない場合でも、所属人称接尾辞の付かない未来分詞の -EcEK が使えることがある (林 2013:197)。

- (36) yap-acak iş ‘すべき (することができる) 仕事’ (林 2013:197)
 する-PRT 仕事

ただし、上記の被修飾語の「iş」‘仕事’は、特定の仕事を表すことはなく、漠然とした対象 (まだどのような仕事になるか未定) でなければならない。そのため、以下の

ような文で使うのが普通である (林 2013:197)。

(37) Bugün yap-acak iş-im var mı?

今日 する-PRT 仕事-POSS.1SG ある Q

‘今日私のすべき (できる) 仕事はあるの?’

(林 2013:197)

2.1.2.8. -EsI 接辞

古アナトリアトルコ語において頻繁に使われていた分詞の -EsI は、現代トルコ語ではその使用が制限されてきたにも関わらず (Korkmaz 2014:837)、現代トルコ語の文法書には、上記に記述した分詞接辞とともに取り扱われている。トルコ語の分詞接辞は、それが表す時間的な意味合いによって分類されることがあり、-EsI も -EcEK のように「未来分詞」として捉えられる (Lewis 1967, Salman 2003, Bayraktar 2004, Benzer 2008, Karaağaç 2012, Ergin 2013, Korkmaz 2014)。古トルコ-トルコ語で未来を表す分詞接辞であったこの分詞接辞は、現代トルコ語においては、ほとんどの場合に呪いの意味を表す慣用的な分詞として使用される。

(38) Göz-ü çık-ası adam

目-POSS.3SG 外れる-PRT 男の人

‘その目が外れてほしい男の人’

(39) Her gün dinle-n-esi bir şarkı

毎日 聞く-PASS-PRT 一つ 歌

‘毎日聞かれる (ほどいい) 歌’

上記の例 (38) は、話し手の相手に対する呪いを表す文であり、例 (39) は話し手の、歌に対する感嘆やその歌について好みを表す。ここで、この二つの間の形態論的な相違に注意されたい。例の (38) 場合に、-EsI は直接的に動詞語幹に付くのに対し、例 (39) の場合は、「動詞語幹+受身形+ -EsI」の構造が求められる。それは、-EsI が話し手の、相手に対する願望や感嘆を表す機能をもつからであると考えられる。

2.2. 日本語のテンス形式と名詞修飾形式

2.2.1. テンス形式

発話時を基準とする時間は、論理的あるいは意味的には、過去、現在、未来に分かれるが、現代日本語は、非過去形と過去形の二つに対立している (高橋 2005:83)。動詞はアスペクトの観点から完成相と継続相に分化しており、完成相の場合は「する」と

「した」に、継続相の場合は「している」と「していた」に変化する（高橋 2003:106）。

表 1 アスペクトの観点からの日本語のテンスの分化

テンス \ アスペクト	完成相	継続相
非過去形	する	している
過去形	した	していた

表1のように、日本語において、過去はタとテイタで表され、非過去はルとテイルで示される。以下では、日本語のテンス形式をそれらの過去形と非過去形に分けて概説する。

2.2.1.1. 過去形

2.2.1.1.1. タ

完成相の過去形であるタの基本的なテンス的意味は、過去に運動が完成したことを表すことである。過去には、遠い過去もあり、近い過去もあるが、日本語の過去形はそのようなことを区別せず、発話時より前に丸ごと完成した運動を表す（高橋 2003:118）。

(40) 父はこのあいだの伊豆地震で死にました。 (国立国語研究所 1985:181)

過去形の表す運動の時間位置が問題になるのは、発話時と接する場合、あるいは発話時に食い込む場合である。なぜなら、その場合、その運動が過去のものであるか、現在のものであるかが問題になるからである（高橋 2003:118-119）。

(41) そうだ、君はあたまのいいことをいいました。 (国立国語研究所 1985:184)

高橋 (2003) は、上記の場合を、出来事性に焦点を当てると過去形になり、その動作の質的な面に焦点を当てると、非過去形になると説明している。

また、完成相の過去形のタは過去のアクチュアルな運動を表すが、その運動の結果が発話時において存在していることがあり、それは鈴木 (1979) の説明に従えば、「ペルフェクト的な過去」と呼ばれる。ペルフェクト的な過去は、①「発話の直前の変化」、②「現在に結果が残っている過去の変化」、そして③「現在において過去の変化の結果が現れていること」と3つに分けられ、それぞれの場合の例として以下の例が挙げられている。

- (42) a. 目あいた、あいた。ああ、大丈夫。血の気をおびてきた。 (①)
 b. おばあちゃん、おらげにきてからふとったね。 (②)
 c. 十日まえまで発電機が故障しとって、(中略) 今は、もうなおった。 (③)
 (国立国語研究所 1985:191-192)

2.2.1.1.2. テイタ

継続相の過去形であるテイタは、過去の特定の時間が、持続過程をなす運動や結果の局面の中にあることを表す(高橋 2003:125)。テイタで示される動作の基準時間が瞬間である場合があり、それは短い時間を示す時間の状況語がある場合、状況的な条件句や条件節がある場合には、はっきりわかる(国立国語研究所 1985:265)。

- (43) a. 午前七時、私はNHKのスタジオで待機していた。
 b. 眼をあいたときには、あかるい光が棒のように、雨戸のすきますきまにつた
っていた。(国立国語研究所 1985:265)

基準時間が時点でなく、幅のある時間帯であることも多く、その時間を示す状況語でそのことがわかる(国立国語研究所 1985:267)。

- (44) 新座敷のほうの庭から、丁字形にいりこんでいる中庭にのぞんだ主人の寝間を、
 お島はある朝、いつもするようにそうじしていた。(国立国語研究所 1985:267)

2.2.1.2. 非過去形

2.2.1.2.1. ル

完成相非過去形のルの基本的なテンス的意味は、未来において動作が成立することである(国立国語研究所 1985:145)。

- (45) 父は病気でこられませんが母と姉とはいきます。(国立国語研究所 1985:145)

未来の運動の中には、発話時の直後に成立するものがある。日本語には、普通の未来を示す語形の他に直後未来を示す語形があるわけではない。しかし、直後未来であるために、主語がなく、一語で文になる場合がある(高橋 2003:114)。

- (46) a. [お産のばめん] 小林「いたい、いたい」アリ「でる、でる」
 b. 徹男、いきぐるしくなって立ち上がる。徹男「かえる!」
 c. なにをもたもたしているか! つぎは火炎ビンをやる!

(国立国語研究所 1985:154-155)

また、完成相の動詞は運動を丸ごと差し出すために、発話時という瞬間に収まりきらないということが、完成相の非過去形が現在のアクチュアルな運動を表さない理由である。しかし、次のような特殊な場合には、アクチュアルな現在の運動を表すことができる(高橋 2003:115)。

(A) 瞬間的な運動であって、その始発から終了までの全過程が話し始めから話し終わりまでの間に収まる場合(完成相の基本的なアスペクトの意味が生きている。)

- (47) a. 伊三郎軍配をかえします。(成立時を予測できる瞬間的な動作の成立)
 b. (手品で)これをここに、こういれます。(自分の瞬間的な動作と同時の発言)
 c. そんなことはできない。わたしはことわる。(行為の実現となる発言)

(国立国語研究所 1985:158-159-160)

(B) 完成相形式であっても、完成相の基本的な意味を実現せず、進行過程の中にある姿を表す場合

- (48) ちょっときてごらん。およめさんがいくよ。(国立国語研究所 1985:161)

(C) アスペクト的な意味の側面で継続相との分化が進んでいないものの場合

- (49) この問題は依然として残存する。(国立国語研究所 1985:163)

2.2.1.2.2. テイル

完成相は基本的なテンスの意味において、非過去形が未来を表し、過去形が過去を表す。それに対して、継続相は、過去形は過去を表すが、非過去形は、現在を表すのが基本である。継続相が現在を表すのは、現在という瞬間で持続過程を分割することができるからである(国立国語研究所 1985:240)。

- (50) 上空の風、ライトからレフトへつよくふいています。(国立国語研究所 1985:245)

- (51) 彼女は、大学につとめています。(国立国語研究所 1985:242)

高橋 (2003) は、継続相非過去形は、未来の事を表すことができるが、この場合には「～から～まで」で修飾して、持続の両端を示すことができる (例 52) が、この両端を示す修飾の仕方は発話時をまたぐことができない (例 53) と述べている。

(52) あすは、あさの九時ごろから晩の八時ごろまで工場でしごとをしています。

(高橋 2003:125)

(53) a. 展覧会は先週からひらかれている。 (○)

b. 展覧会は先週までひらかれている。 (○)

c. 展覧会は先週から来週までひらかれている。 (×) (同上)

高橋 (2003) によると、始発と終了の時間が示されると、完成相と同様、丸ごとの姿で差し出すことになるので、現在となじまない。

2.2.2. 名詞修飾形式

日本語においては、トルコ語と同様に、連体修飾節を構成する成分は名詞に先行する。名詞に先行するこれらの成分には、動詞、形容詞と名詞があり、日本語の名詞修飾形式は以下のように整理されている。

表 2 日本語の名詞修飾形式

①動詞	A. ル形 (非タ形) B. タ形 C. テイル形 D. その他の形式
②形容詞	A. イ形 (非タ形) B. タ形 C. その他の形式
③名詞	A. 「XのY」 B. 「XなY」 C. 「XとしたY」 D. 「XしたY」 E. 「XたるY」 F. 「X (と) しているY」 G. 「XなるY」 H. その他の形式

(加藤 2003:19)

連体修飾節を成す成分は上記のように動詞、形容詞及び名詞であるが、本論文はタとテイルの形容詞的用法を対象とするため、以下では、①動詞に接続する形式について説明を行う。

2.2.2.1. ル

砂川 (1986) は連体修飾節におけるルを「現在形」と呼んでおり、その使用については、以下のことを挙げている。

a. 修飾節の表す事柄が主文の表す時と同時なら、修飾節の述語は現在形を使う。この

場合、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.76)。

(54) 事務所にいる山田さんという人にこの書類を渡してください。 (砂川 1986:76)

b. 修飾節の表す出来事が主文の表す時点でまだ実現していない (がいずれ実現する) ものであるような時は、修飾節の述語は現在形を使う。この場合、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.78)。

(55) 面接を受ける方はこの部屋でお待ちください。 (砂川 1986:78)

c. 名詞を修飾する節が習慣や繰り返される出来事を表す時は、主文の述語がどの時を表していても、修飾節の述語には現在形が使われるのが普通である (p.79)。

(56) 毎朝散歩する道で、偶然友だちに出会いました。 (砂川 1986:79)

d. 名詞を修飾する節が人やものの属性を表す時、修飾節の述語に現在形が使われることがある (p.79)。

(57) 肉を食べる動物は鋭い牙を持っています。 (同上)

e. 名詞を修飾する節が人の役割やものの用途を表す時も、修飾節の述語に現在形が使われる (p.79)。

(58) 道ばたで道路工事をする人たちが休んでいました。 (同上)

f. 「関係」や「存在」を表す動詞は、名詞を修飾する時に現在形になるのが普通である (p.81)。

(59) 彼の話に該当する人物は、どこにも見当たらなかった。 (砂川 1986:81)

g. 「きらめいている」「さえずっている」のような動きの続いている状態や繰り返し続いている出来事を表す文、あるいは「遠ざかっていく」「増えてくる」のような移動や変化の進行を表す文は、名詞を修飾する時にそのままの形で使われることも多いが、文学作品などでは「スル」の形になることも多い。ただし、このような使い方は、文学的な書き言葉の中に限られており、日常の話し言葉の中で使われることはない (p.83)。

(60) 夜空にきらめく星を眺めていました。 (砂川 1986:83)

h. 名詞が「作業」「くせ」「決意」などの場合、修飾節の動詞は「スル」の形を使う。修飾節の中に主語が現れないことが多い (p.85)。

(61) 爪を噛む癖はやめたほうがよい。 (砂川 1986:85)

i. 名詞が「音」「姿」「光景」などのように、感覚で捉えられた対象を表すようなものであって、その名詞を修飾する節が「音」や「光景」などの内容を述べるようなものである時は、修飾節の動詞は「スル」か「シテイル」の形になるのが普通である (p.86)。

(62) 彼は真っ黒になって働く母の姿を見て、胸があつくなった。 (砂川 1986:86)

2.2.2.2. タ

砂川 (1986) は連体修飾節におけるタを「過去形」と呼んでおり、その使用については、以下のように説明している。

a. 修飾節の表す事柄が主文の表す時より以前なら、修飾節の述語は過去形を使う。この場合、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.76)。

(63) 山の上にあった古い家は、ホテルを建てるために取り壊された。 (砂川 1986:76)

b. 修飾節の表す出来事が主文の表す時点ですでに実現しているものであるような時は、修飾節の述語は過去形を使う。この場合も主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.78)。

(64) この仕事で稼いだ金は、ヨットを買うために使いたいと思っています。

(砂川 1986:76)

c. 2.2.2.1 節で述べたように、名詞を修飾する節が習慣や繰り返される出来事を表す時は、主文の述語がどの時制を表していても、修飾節の述語には現在形が使われるのが普通である。ただし、主文が過去を表す場合は、修飾節の述語に過去形が使われることがある。特に、「若い頃」「以前」のような過去を表す言葉が使われている時は、常に過去形を使わなければならない (例 65)。また、習慣や繰り返される出来事が主文の表す

時より以前のものである場合は、常に過去形を使う（例 66）（p.79）。

(65) 若い頃彼が通った喫茶店は、コーヒーが美味しいので有名でした。（砂川 1986:79）

(66) 夏になると毎年泊まったホテルが山火事で焼けてしまいました。（同上）

d. 「込み入る」「堂々とする」のような形容詞的動詞は、名詞を修飾する時は過去形になるのが普通である（p.81）。

(67) 彼らは隣の部屋で何やら込み入った話をしています。（砂川 1986:81）

e. 2.2.2.1 節で述べたように、「関係」や「存在」を表す動詞は、名詞を修飾する時に現在形になるのが普通であるが、過去形に変えても意味の変わらないものもある（p.81）。

(68) 彼の小説は史実に基づく／基づいたものが多い。（同上）

f. 「シテイル」や「シテアル」の形で、何かの出来事の結果として存在する状態を述べる文は、名詞を修飾する時、そのままの形でも使われるが、「シタ」の形になることも多い（p.82）。

(69) 戸棚に薬を入れたびんがあります。（砂川 1986:82）

g. 名詞が「経験」「記憶」「覚え」など、以前起った事柄に関連するもので、修飾節がその内容を述べるものである場合、修飾節の動詞は「シタ」の形になる（p.86）。

(70) 私は外国語を習った経験が全くありません。（砂川 1986:86）

2.2.2.3. テイル

砂川（1986）は、連体修飾節におけるテイルの使用については、以下のように述べている。

a. 修飾節の表す事柄が主文の表す時と同時なら、修飾節の述語は「シテイル」を使う。この場合、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い（p.77）。

(71) 太っている人は成人病に気を付けなければなりません。（砂川 1986:77）

b. 2.2.2.2 節で記述したように、「シテイル」や「シテアル」の形で、何かの出来事の結果として存在する状態を述べる文は、名詞を修飾する時、そのままの形でも使われるが、「シタ」の形になることも多い。そのまま使われる時は、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.82)。

(72) びんに薬が入っています → 薬が入った／入っているびん (砂川 1986:82)

c. 2.2.2.1 節でも述べたように、「きらめいている」「さえずっている」のような動きの続いている状態や繰り返し続いている出来事を表す文、あるいは「遠ざかっていく」「増えてくる」のような移動や変化の進行を表す文は、名詞を修飾する時にそのままの形で使われることも多いが、文学作品などでは「スル」の形になることも多い (p.83)。

(73) 小鳥がさえずっています → さえずる／さえずっている小鳥 (砂川 1986:83)

d. 2.2.2.1 節で記述したように、名詞が「音」「姿」「光景」などのように、感覚で捉えられた対象を表すようなものであって、その名詞を修飾する節が「音」や「光景」などの内容を述べるようなものである時は、修飾節の動詞は「スル」か「シテイル」の形になるのが普通である (p.86)。

(74) 子どもたちが楽しげに遊んでいる写真が貼ってあった。 (砂川 1986:86)

2.2.2.4. テイタ

砂川 (1986) では、連体修飾節におけるテイルの使用について、以下のように述べられている。

a. 修飾節の表す事柄が主文の表す時より以前なら、修飾節の述語は「シテイタ」を使う。この場合は、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.77)。

(75) 子どもたちが楽しみにしていた遠足なのに、この雨では中止になりそうだ。
(砂川 1986:77)

b. 修飾節の表す事柄が主文の表す時と同時であり、主文の述語が過去を表す場合は、修飾節の述語が「シテイタ」になることがある。特に、「子供の頃」「当時」のような過去を表す言葉が使われている時はその傾向が強い (p.77)。

(76) 子供の頃住んでいた家は、山の中腹にあって海が見渡せました。 (砂川 1986:77)

2.2.2.5. テアル

砂川 (1986) では、連体修飾節におけるテアルの使用については、以下のように説明されている。

a. 修飾節の表す事柄が主文の表す時と同時なら、修飾節の述語は「シテイル」も使われるが、「シテアル」も使われる。この場合、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.77)。

(77) 教科書に書いてある文章を暗記しました。 (砂川 1986:77)

b. 修飾節の表す事柄が主文の表す時より以前なら、修飾節の述語は「シテイタ」を使うこともあれば、「シテアッタ」を使うこともある。この場合は、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.77)。

(78) 引き出しの中に入れてあったお金がなくなっている。 (砂川 1986:77)

c. 2.2.2.2 節で記述したように、「シテイル」や「シテアル」の形で、何かの出来事の結果として存在する状態を述べる文は、名詞を修飾する時、そのままの形でも使われるが、「シタ」の形になることも多い。そのまま使われる時は、主文の述語は過去・現在・未来のどの時を表していても良い (p.82)。

(79) びんに薬が入れてあります → 薬を入れた／を・が入れてあるびん (砂川 1986:82)

テアルの意味に関しては、ある状態が誰かが何かに対して働きかけたことの結果、そうなったものであるような場合、その状態を表すにはテアルが使われると説明されている。これは働きかけの結果の状態を表すのであるが、その働きかけが何かのための準備であるような時、準備が終わった後の状態を述べる文になる。現在の状態を表す時はテアルとなり、過去の状態を表す時はテアッタとなる (砂川 1986:41)。

第3章 トルコ語の形容詞的分詞とタ・テイルの形容詞的用法

3.1. 序

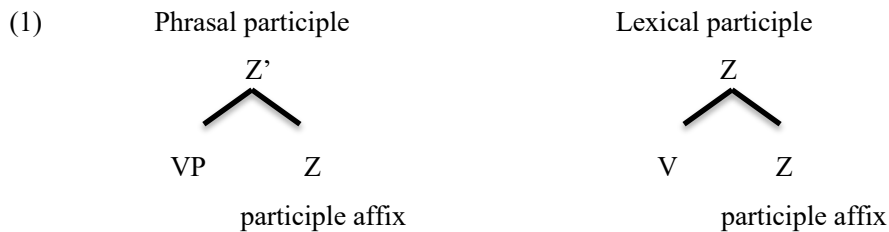
本章では、トルコ語の形容詞的分詞と日本語の対応形式であるタとテイルについて詳細な説明を行い、両言語の形容詞的分詞形式の対照を行う。3.2節では、それぞれのトルコ語の形容詞的分詞の形態的・統語的特徴や連体修飾節を形成する際に見られる制限について概観したのちに、それらの分詞接辞が接続する動詞と被修飾名詞による意味的特徴について考察を行い、それぞれの分詞接辞の対応関係を明示する。3.3節では、トルコ語の形容詞的分詞に対応する日本語のタとテイルの形容詞的用法の形態的・意味的な特徴と動詞を形容詞化する際の成立条件について概観し、両形式の動詞による対応関係と構造的な位置による対応関係について記述する。3.4節では、上記の特徴に基づき、両言語の形式の対照を行い、類似点と相違点を明確にする。

3.2. 形容詞的分詞の分類とトルコ語の形容詞的分詞

これまでの研究では、形容詞的分詞はそれらの統語的・意味的な機能によって分類されてきた。Kratzer (1994) はその統語的な機能によってドイツ語の分詞を「語彙的分詞」(lexical participle) と「句的分詞」(phrasal participle) と大きく2つに分類している。それを以下のように説明し、その統語構造を指示している。

“A participle is lexical if the participle affix is base generated as sister of V, a lexical category. It is phrasal if the participle affix is base generated as sister of a phrasal category, a VP for example.” (p.5)

逐語訳：「ある分詞接辞が語彙的カテゴリーである V の sister の基底として生成されていれば、その分詞接辞は語彙的である。ある分詞接辞が VP のような句のカテゴリーの sister の基底として生成されていれば、それは句的分詞である。」(p.5)



(Kratzer 1994:5)

Kratzer (2000) は句の分詞を更に2つに分け、Parsons (1990) の用語の「結果状態分詞」(resultant state) と「目標状態分詞」(target state) を使用している。Parsons (1990) はそれらの2つの分詞を以下のように区別している。

結果状態分詞

“For every event *e* that culminates, there is a corresponding state that holds forever after. This is “the state of *e*’s having culminated,” which I call the “Resultant state of *e*” or “*e*’s R-state.” If Mary eats lunch, then there is a state that holds forever after: The state of Mary’s having eaten lunch.” (p.234)

逐語訳：「最後を修飾する各出来事（*e*）には永続に続く対応状態がある。それは「*e*の結果の状態」あるいは「*e*のR-状態」と呼ぶ「*e*の最後を修飾する状態」である。メアリーがランチを食べると、永続する状態である：メアリーがランチを食べてしまっているという状態である。」(p.234)

目標状態分詞

“It is important not to identify the Resultant-state of an event with its “target” state. If I throw a ball onto the roof, the target state of this event is the ball’s being on the roof, a state that may or may not last for a long time. What I am calling the Resultant-state is different; it is the state of my having thrown the ball onto the roof, and it is a state that cannot cease holding at some later time.” (p.235)

逐語訳：「出来事の結果の状態をその目標状態と見分けないことが重要である。屋根の上にボールを投げたら、この出来事の目標状態とは、ボールが屋根の上にあるということであり、この状態は長時間続くかもしれないし、そうでないかもしれない。ここで結果状態と呼んでいるものは異なっており、それは屋根の上にボールを投げてしまった状態であり、後の時点では持続がキャンセルできない状態を指す。」(p.235)

Parsons (1990) の説明によると、結果状態分詞は永続に続く状態、いわゆる後戻りできない／結果継続のある状態を表すのに対し、目標状態分詞は一時的な後戻りできる／結果継続のない状態を表す。

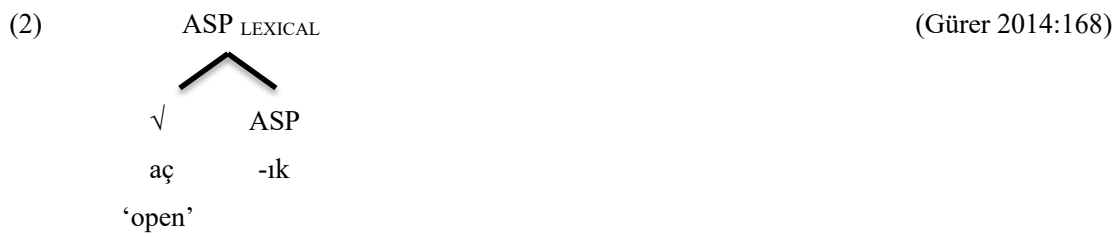
先行研究の多くが言語の分詞を「語彙的」、「結果状態」、「目標状態」に分けて分類している (Kratzer 1994-2000 (ドイツ語の分詞の研究), Anagnostopoulou 2003 (ギリ

シャ語の分詞の研究) , Embick 2004⁶ (英語の分詞の研究)) のと同様に、トルコ語の形容詞的分詞も上記の分類によって分けられている。第 2 章では、トルコ語の主な 8 つの分詞接辞を紹介したが、そのうち **-Ik**、**-mİş** と **-(I)II** で形成されるものは形容詞的分詞とされている (Gürer 2014)。

以下では、それらの形容詞的分詞についてそれぞれ詳細に説明する。

3.2.1. 形容詞的分詞の **-Ik**

Kratzer (1994-2000) の分詞分類を使用した Gürer (2014) は形容詞的分詞の **-Ik** を語彙的分詞とし、単なる状態を表すと指摘している。**-Ik** の統語構造は以下のように示される。



語彙的分詞は語根に直接に付くため、出来事中心の様態副詞の付加が不可能になり (例 3) 、単純な形容詞と同様な働きをする (例 4) (Gürer 2014)。

- (3) a. *kağıt-lar özensizce kes-ik-ti.
 紙-PL 雑に 切る-PRT-PST.COP
 英語訳：‘The papers were cut sloppily.’
 日本語訳：‘紙は雑に切ってあった。’
- a’. *özensizce kes-ik kağıt-lar
 雑に 切る-PRT 紙-PL
 英語訳：‘Sloppily cut papers’
 日本語訳：‘雑に切っている／切れた紙’
- b. *musluk başı dikkatlice bük-ük-tü.
 蛇口 注意深く 曲げる-PRT-PST.COP
 英語訳：‘The faucet knob was carefully bent.’
 日本語訳：‘蛇口は注意深く曲げてあった。’

⁶ Embick (2004) は分詞を「語彙的」、「結果状態」そして「出来事の受身」(eventive passives) に分けて分類している。

- b'. *dikkatlice bük-ük musluk başı
 注意深く 曲げる-PRT 蛇口
 英語訳：‘Carefully bent faucet knob’
 日本語訳：‘注意深く曲げてある蛇口’ (Gürer 2014:173)

- (4) a. *saç-ı özensizce pis-ti.
 髪-POSS.3SG 雑に 汚い-PST.COP
 英語訳：‘Her hair was sloppily dirty.’
 日本語訳：‘(彼女の) 髪の毛はだらしなく汚れていた。’
- a'. *özensizce pis saç
 雑に 汚い 髪
 英語訳：‘Sloppily dirty hair’
 日本語訳：‘だらしなく汚れている髪の毛’ (Gürer 2014:173-174)

例 (3) で示した出来事中心の様態副詞が **-Ik** と共起できないことは、出来事中心の様態副詞の事象投射を表し、**-Ik** が語彙的分詞であることを証明しているとされる。

上記の分詞分類を使用し、英語の分詞を分類している Embick (2004) は、単なる状態を表す語彙的分詞は「make」、「build」のような創造動詞や「become」のような状態変化動詞に付加できると指摘している。Gürer (2014) は Embick (2004) のその指摘はトルコ語の分詞接辞の **-Ik** にも当てはまると言及している。

- (5) a. Bu bahçe kapı-sı aç-ık yap-ıl-mış.
 この 庭 ドア-POSS.3SG 開ける-PRT 作る-PASS-EV (発見)
 英語訳：‘This garden door is made open.’
 日本語訳：‘この庭のドアは開いている形で作られている。’
- b. Bu cetvel eğ-ik ol-muş.
 この 物差し 曲げる-PRT なる-EV (発見)
 英語訳：‘This ruler became bent.’
 日本語訳：‘この物差しは曲がった状態になっている。’ (Gürer 2014:175)

-Ik の動詞との関係に関しては、多くの先行研究は **-Ik** には自動詞に接続する場合、非対格動詞と共起できるが、非能格動詞とは共起できないという制限があると述べている (Nakipoğlu 1998, Kurtoğlu 2006, Acartürk&Zeyrek 2010, Gürer et al. 2012, Gürer 2014, Hirik 2016)。

- (6) a. bat-ik gemi
沈む-PRT 船
英語訳：‘the sunk ship’
日本語訳：‘沈んだ船’
- b. *çalış-ik adam
働く-PRT 男の人
英語訳：‘the worked man’
日本語訳：‘働いた男の人’

(Acartürk&Zeyrek 2010:114)⁷

上記でも見られるように、-Ik は非対格動詞に付くことができるが、全ての非対格動詞と共起できるわけではなく、動詞の語彙的アスペクトによる制限をもつ。非対格動詞に付加できるが、非能格動詞には付加できないことは動詞の限界性 (telicity) と関係していると述べられているが (Nakipoğlu 2000)、限界性をもつことは非対格動詞の決定要因であるため (van Valin 1990, Dowty 1991)、-Ik が付加できない非対格動詞との不両立はその指摘のみでは説明できない。Vendler (1957) の動詞分類を使用した Gürer (2014) は動詞の他のアスペクト的な意味について記述し、-Ik が接続できる動詞がどのようなアスペクト的な意味をもつかに関して考察を行っている。Vendler (1957) の動作相 (aktionsart) による 4 分類は以下のようなものである (Smith 1991)。

- | | |
|---------------------|---------------|
| (7) State (状態) | 「持続的、静的、非限界的」 |
| Activity (活動) | 「持続的、動的、非限界的」 |
| Accomplishment (達成) | 「持続的、動的、限界的」 |
| Achievement (到達) | 「非持続的、動的、限界的」 |

Gürer (2014) によると、-Ik が付加できる動詞は限界的、動的、そして持続的でなければならない。上記の分類では、それは達成動詞であり、-Ik は他の種類の動詞とは両立しない。

⁷ Acartürk&Zeyrek (2010) はこの例を Nakipoğlu (1998) より引用している。Nakipoğlu (1998) は未公開の博士論文であり、手に入れることができなかつたため、Acartürk&Zeyrek (2010) より引用した (Nakipoğlu, Mine (1998) Split intransitivity and the syntax-semantics interface in Turkish. University of Minnesota dissertation.)。

- (8) a. *koş-uk çocuk (活動動詞)
 走る-PRT 子供
 英語訳：‘the child who has run’
 日本語訳：‘走った子供’
- b. *bil-ik çocuk (状態動詞)
 知る-PRT 子供
 英語訳：‘the child who knows’
 日本語訳：‘知っている子供’
- c. *var-ik yolcu (到達動詞)
 到着する-PRT 旅客
 英語訳：‘the passenger who has reached’
 日本語訳：‘到着している旅客’
- d. yık-ık ev (達成動詞)
 倒す-PRT 家
 英語訳：‘the demolished house’
 日本語訳：‘倒れた／倒れている家’

(Gürer 2014:180)

意味用法の観点から見ると、-Ik はある動作が完了して、その結果の存在による対象の状態・属性を表す (Korkmaz 2014)。多くの研究者によって一般的には受身の意味をもつ形容詞を派生すると指摘されている (Lewis 1967, Gencan 1979, Kornfilt 1997, Banguoğlu 2011, Korkmaz 2014)。Gencan (1979) は -Ik が表す受動的な意味と他動的な意味は動詞の自他によって左右されることを指摘し、-Ik を「他動詞からの派生」と「自動詞からの派生」として2つに分類している。

表1 -Ik が付く動詞の種類と派生した形容詞の意味 (Gencan 1979)

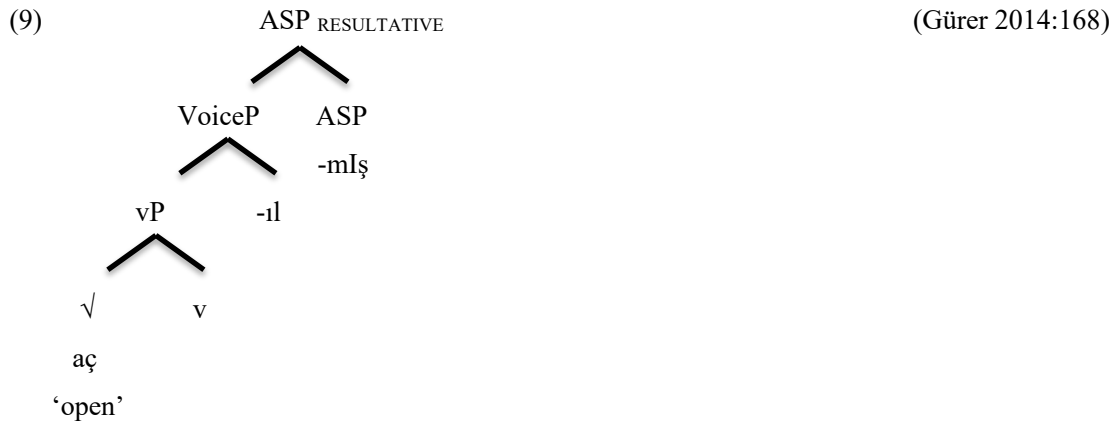
動詞語幹 + -Ik	-Ik が付いて派生された形容詞の意味	例
他動詞 + -Ik	受動的 (passive)	kır-ık (割る + -Ik) ‘割れた／割れている’
自動詞 + -Ik	能動的 (active)	yan-ık (焦げる + -Ik) ‘焦げた／焦げている’

Gencan (1979) は他動詞 + -Ik の形容詞が受動的な意味を表すことの根拠として、他動詞 + -Ik を -mİş と置き換えると、他動詞 + 受身形接辞の -İl/-n + -mİş の構造になるとする

が (kır-ik → kır-il-miş : -mişについては次節で説明する)、自動詞+ -Ik を -miş と置き換えた場合にはそのような受身形接辞の付加が見られない (yan-ik → yan-miş) としている。

3.2.2. 形容詞的分詞の -miş

形容詞的分詞の -miş は句の分詞の中で結果状態分詞とされている (Slobin and Aksu 1982, Gürer 2014)。-miş の統語構造は以下のように示される。



結果状態分詞は語根の上に出来事層 (eventive layer) をもつため、出来事中心である。従って、出来事中心の様態副詞の付加が可能である (Gürer 2014)。

- (10) a. kağıt-lar özensizce kes-il-miş-ti.
 紙-PL 雑に 切る-PASS-PRT-PST.COP
 英語訳: 'The papers were sloppily cut.'
 日本語訳: '紙は雑に切っていた。'
- a'. özensizce kes-il-miş kağıt-lar
 雑に 切る-PASS-PRT 紙-PL
 英語訳: 'Sloppily cut papers'
 日本語訳: '雑に切っている紙'
- b. musluk başı dikkatlice bük-ül-müş-tü.
 蛇口 注意深く 曲げる-PASS-PRT-PST.COP
 英語訳: 'The faucet knob was carefully bent.'
 日本語訳: '蛇口は注意深く曲げられていた。'
- b'. dikkatlice bük-ül-müş musluk başı
 注意深く 曲げる-PASS-PRT 蛇口
 英語訳: 'Carefully bent faucet knob'
 日本語訳: '注意深く曲げられている蛇口'
- (Gürer 2014:173)

英語の分詞を分類している Embick (2004) は、語彙的分詞は「make」、「build」のような創造動詞や「become」のような状態変化動詞に付加できると指摘し、それは 3.2.1 節で見られるようにトルコ語の場合も当てはまる。Embick (2004) はそれらのような動詞は句の分詞とは共起できないと述べ、Gürer (2014) は Embick (2004) のその指摘はトルコ語の分詞接辞の *-miş* にも当てはまると言及している。

- (11) a. *Bu bahçe kapı-sı aç-ıl-mış yap-ıl-mış.
この庭 ドア-POSS.3SG 開ける-PASS-PRT 作る-PASS-EV (発見)

英語訳：‘This garden door is made opened.’

日本語訳：‘この庭のドアは開いている形で作られている。’

- b. *Bu cetvel eğ-il-miş ol-muş.
この物差し 曲げる-PRT なる-EV (発見)

英語訳：‘This ruler became bent.’

日本語訳：‘この物差しは曲がった状態になっている。’

(Gürer 2014:175)

-Ik と同様に、*-miş* も非対格動詞と共起できるが、非能格動詞とは共起できないという制限がある (Nakipoğlu 1998-2000, Kurtoğlu 2006, Acartürk&Zeyrek 2010, Gürer et al. 2012, Gürer 2014, Hirik 2016) (例 12)。しかし、*-miş* は他動詞に付加できず、動詞が他動詞であれば「他動詞+受身形接辞の *-Il/-n + -miş*」の構造になり、受身形接辞を取る点で *-Ik* とは異なる (Slobin and Aksu 1982, Acartürk&Zeyrek 2010) (例 13)。

- (12) a. bat-mış gemi
沈む-PRT 船

英語訳：‘the sunk ship’

日本語訳：‘沈んだ船’

- b. *koş-muş adam
走る-PRT 男の人

英語訳：‘the man who has run’

日本語訳：‘走った男の人’

- (13) a. kır-ık cam ‘割れた／割れているガラス’
割る-PRT ガラス

- b. *kır-mış cam ‘割ったガラス’
割る-PRT ガラス

- b'. kır-il-miş cam ‘割れた／割れているガラス’
割る-PASS-PRT ガラス

Gürer (2014)によると、-miş が付加できる動詞は -Ik と同じく限界的、動的、そして持続的でなければならない。Vendler (1957) の分類では、それは達成動詞であり、-miş は他の動詞の種類とは両立しない。

- (14) a. *koş-muş atlet (活動動詞)

走る-PRT アスリート

英語訳：‘the athlete who has run’

日本語訳：‘走ったアスリート’

- b. *bil-miş öğrenci (状態動詞)

知る-PRT 学生

英語訳：‘a student who knows’

日本語訳：‘知った学生’

- c. *var-miş yolcu (到達動詞)

到着する-PRT 旅客

英語訳：‘a passenger who has arrived’

日本語訳：‘到着した旅客’

- d. inşa ed-il-miş ev (達成動詞)

建てる-PASS-PRT 家

英語訳：‘the house which is built’

日本語訳：‘建てられた家’

(Gürer 2014:180-181)⁸

しかし、限界性を表す表現の付加によって -miş と共起できない活動動詞と状態動詞は -miş と共起できるようになる。(14c) のような到達動詞は限界的であるが、非持続的／瞬間的であるため、-miş とは共起できないが、その瞬間的な含意が限界性のあるプロセスに移行するような表現を付加すると、-miş と共起できるようになり、文法的になる (Slobin and Aksu 1982, Nakipoğlu 2000, Gürer 2014)。

- (14') a. maraton koş-muş atlet (活動動詞)

マラソン 走る-PRT アスリート

英語訳：‘the athlete who has run a marathon’

日本語訳：‘マラソンを走ったアスリート’

⁸ Gürer (2014) は例 (14a) を Nakipoğlu (1998) より引用し、修正をしている。

- b. **cevab-ı bil-miş öğrenci** (状態動詞)
 答え-ACC 知る-PRT 学生
 英語訳: ‘the student who has known the answer’
 日本語訳: ‘答えがわかった学生’
- c. **terminal-e var-mış yolcu** (到達動詞)
 ターミナル-DAT 到着する-PRT 旅客
 英語訳: ‘the passenger who has reached the station’
 日本語訳: ‘ターミナルへ到着した旅客’ (Gürer 2014:181)⁹

非対格動詞も上記の動詞と同じ働きをする。ある非対格動詞は非限界的であれば、**-miş** と共起できないが、限界性を表す表現の付加によって **-miş** と共起できるようになり、文法的になる。

- (15) a. **?büyü-müş çiçek**
 大きくなる-PRT 花
 英語訳: ‘grown flower’
 日本語訳: ‘大きくなった花’
- b. **iki hafta iç-i-nde büyü-müş çiçek**
 2 週間 以内-POSS.3SG-LOC 大きくなる-PRT 花
 英語訳: ‘flower that grew up in two weeks’
 日本語訳: ‘2週間で大きくなった花’ (Gürer 2014:182)

更に、形容詞的分詞の中で、形容詞派生動詞には分詞接辞の **-miş** のみが付加できるという制限がある。トルコ語には形容詞から動詞を派生する **-laş** と **-(A)r** という派生接辞が存在し、それらの接辞により派生した動詞は **-miş** を取る (Göksel and Kerslake 2005)。

- (16) a. **sarı** ‘黄色’
 黄色
- b. **sar-ar** ‘黄ばむ’
 黄色-VRBL
- c. **sar-ar-mış yaprak-lar** ‘黄ばんだ／黄ばんでいる葉’
 黄色-VRBL-PRT 葉-PL (Gürer 2014:182)

⁹ 例 (14’a) は Nakipoğlu (2000) より引用したものである。

- (17) a. güzel ‘奇麗／美しい’
 奇麗
- b. güzel-leş ‘奇麗になる／美しくなる’
 奇麗-VRBL
- c. güzel-leş- miş kız-lar ‘奇麗になった／なっている女の子’
 奇麗-VRBL-PRT 女の子-PL (Gürer 2014:182-183)

意味用法の観点から見ると、述語用法の *-miş* は動詞語幹+*-miş* の構造で使われ、他の TAM マーカーが付加されない場合、エヴィデンシャルティー (evidentiality) とパーフェクティヴィティー (perfectivity) の両方を表す (Göksel & Kerslake 2005) が、名詞修飾用法では述語形式のエヴィデンシャルティーの意味が喪失し、動作が完了した結果、対象の表す状態 (結果の状態) という意味のみを表す (Korkmaz 2014, Hirik 2016)。

3.2.3. 形容詞的分詞の -(I)II

形容詞的分詞の -(I)II は句的分詞の中で目標状態分詞とされている (Gürer 2014)。-(I)II の統語構造は以下のように示される。



上記の統語構造にも見られるように、目標状態分詞の -(I)II は語根の上に出来事層をもち、*-miş* と同じく句的分詞とされているが、-(I)II はヴォイス投射がない点で *-miş* とは異なる。目標状態分詞は語根の上に出来事層をもつため、出来事中心である。従って、出来事中心の様態副詞の付加が可能であり、この点は *-miş* と同様である (Gürer 2014)。

- (19) a. saç-ı özensizce yap-ılı-ydı.
 髪-POSS.3SG 雑に する-PRT-PST.COP
 英語訳：‘Her hair was sloppily done.’
 日本語訳：‘(彼女の) 髪の毛はだらしなくセットされていた。’

- a'. özensizce yap-ılı saç
 雑に する-PRT 髪
 英語訳：‘Sloppily done hair’
 日本語訳：‘だらしなくセットされている髪の毛’
- b. metal koruyucu-lar sıkıca kapa-lı-ydı.
 金属 保護するもの-PL しっかり 閉める-PRT-PST.COP
 英語訳：‘The metal savers were tightly closed.’
 日本語訳：‘金具はしっかり閉めてあった。’
- b'. sıkıca kapa-lı metal koruyucu-lar
 しっかり 閉める-PRT 金属 保護するもの-PL
 英語訳：‘Tightly closed metal savers’
 日本語訳：‘しっかり閉めてある金具’ (Gürer 2014:173)

3.2.2 節で述べたように、Embick (2004) は「make」、「build」のような創造動詞や「become」のような状態変化動詞は句の分詞とは共起できないと述べ、Gürer (2014) は Embick (2004) のその指摘は分詞接辞の -miş と同様に -(I)II にも当てはまると言及している。

- (20) a. *Bu site-ler diz-ili ol-muş.
 この ビル-PL 並べる-PRT なる-EV (発見)
 英語訳：‘These buildings became ordered.’
 日本語訳：‘これらのビルは並んだ形になっている。’
- b. *Bu kitabe-ler yaz-ılı yap-ıl-mış.
 この 碑文-PL 書く-PRT する-PASS-EV (発見)
 英語訳：‘These inscriptions are made written.’
 日本語訳：‘これらの碑文は書かれた状態になっている。’ (Gürer 2014:175)

動詞との関係に関しては、-Ik と -miş に対して、-(I)II は非対格／非能格動詞のどちらにもほとんど付けることができず、ほとんどの場合に他動詞に付加される。しかし、全ての他動詞に付加できるわけではない。

- (21) a. kapa-lı kapı ‘閉まっているドア’ (他動詞)
 閉める-PRT ドア
- b. *aç-ılı kapı ‘開いているドア’ (他動詞)
 開ける-PRT ドア

- c. *bat-ılı gemi ‘沈んでいる船’ (非対格動詞)
沈む-PRT 船
- d. *çalış-ılı adam ‘働いている男の人’ (非能格動詞)
働く-PRT 男の人

上記の非文法的な例 (21c) は -Ik と -mİş であれば文法的であり、例 (21b) は -Ik であれば文法的であり、さらに「aç-」(開ける)を「aç-ıl-」(開けられる)のように他動詞を自動詞にすると、-mİş も接続できる。従って、-(I)II はほとんどの場合に自動詞には付加できず¹⁰、他動詞の場合には -Ik が付くことができない動詞であれば、その動詞に付加できると思われる。しかし、それも以下のような例外が見られる。(22a) は「腕が何らかの原因で曲がって、今も曲がった状態にある」という意味を表し、(22b) は「蛇口をある目的で曲げて、今も曲がった状態である蛇口の性質を表す」という異なった解釈を与える。

- (22) a. bük-ük kol ‘(不自然に)曲がった腕’
曲げる-PRT 腕
- b. bük-ülü musluk başı ‘曲がった蛇口’
曲げる-PRT 蛇口 (Gürer 2014:179)

-(I)II で派生された形容詞の意味について考察を行う Gencan (1979) はその意味が動詞の自他の関係によって左右されると述べている。-(I)II はほとんどの場合に他動詞に付加され、自動詞に接続されるのは珍しいが、以下にも表示されるように、場合によって自動詞にも付加でき、意味の差異が見られる。

¹⁰ -(I)II が付加できる自動詞は Gencan (1979) に挙げられた例の「az-」‘絶望する／増長する’、「kork-」‘怖がる’と「kok-」‘臭う’しか見つからなかった。

表2 -(I)II が付いた動詞の種類と派生した形容詞の意味 (Gencan 1979)

動詞語幹+ -(I)II	-(I)II が付いて派生され た形容詞の意味	例
他動詞+ -(I)II	受動的 (passive) ¹¹	dik-ili (植える+ -(I)II) ‘植えた／植えている’
自動詞+ -(I)II	能動的 (active) ¹²	az-ılı (絶望する／増長する+ -(I)II) ‘絶望した／絶望している／増長した／ 増長している’

Vendler (1957) の動詞分類を使用した Gürer (2014) の言語テストによると、-(I)II は -Ik や -mİş と同様に、「持続的」、「動的」、そして「限界的」である達成動詞のみと両立している。

(23) a. *koş-ulu çocuk (活動動詞)

走る-PRT 子供

英語訳：‘the child who has run’

日本語訳：‘走った子供’

b. *bil-ili çocuk (状態動詞)

知る-PRT 子供

英語訳：‘the child who knows’

日本語訳：‘知っている子供’

c. *var-ılı yolcu (到達動詞)

到着する-PRT 旅客

英語訳：‘the passenger who has reached’

日本語訳：‘到着している旅客’

d. kapa-lı ev (達成動詞)

閉める-PRT 家

英語訳：‘closed house’

日本語訳：‘閉まった／閉まっている家’

(Gürer 2014:180)

¹¹ Gencan (1979) は他動詞+ -(I)II の形容詞が受動的な意味を表すことの根拠として、他動詞+ -(I)II を -mİş と置き換えると、他動詞+受身形の接辞 -Il/-n + -mİş の構造になることを挙げている (例：dik-ili → dik-il-miş)。

¹² 自動詞+ -(I)II で形成された形容詞は、その動作の動作主あるいは経験者 (experiencer) としても解釈される (例：az-ılı (絶望した) = az-an (絶望した人))。

3.2.4. 動詞と名詞による意味的特徴

Kratzer (1994-2000) の分詞分類は分詞の統語的・意味的な機能に基づいたものであるが、分詞接辞とそれが接続した動詞の統語的かつ意味的な関わりについても検証のための様々なテストが行われてきた。例えば、Embick (2004) は以下の英語の例を挙げ、副詞の使用が意味に影響を与えると述べている¹³。

- (24) a. the recently open door
b. the recently opened door (Embick 2004:357)

Embick (2004) によると、例 (24a) は①「ドアが少し前に開いていたが、(多分) もう開いていない」¹⁴ という意味のみを表すのに対し、動詞に *-ed* が付いた形を含む例 (24b) は (24a) と同様の意味、つまり①「ドアが少し前に開いていたが、(多分) もう開いていない」という意味と、②「ドアが開いたのが少し前であって、まだ開いている状態にある」¹⁵ という意味の2つの含意を持つとする。それらは具体的に以下のように示される。

意味①：過去の近い時点においてある状態にあったが、今はもうその状態にはない。

＝結果継続がない（一時的、後戻りができる）状態

意味②：過去の近い時点においてある動作が起こって、まだその状態にある。

＝結果継続がある（永続的、後戻りができない）状態

Kratzer (1994-2000) の分類に従って、Gürer (2014) は分詞接辞の *-Ik* を語彙的分詞とし、単なる状態を表すと指摘している。そして、分詞接辞の *-mİş* を結果状態分詞とし、結果による永遠の状態を表すとしている。さらに *-(I)II* を目標状態分詞とし、一時的な状態を表すと述べている。Embick (2004) の指摘した例 (24) をトルコ語に適用し、同様の意味の差異が見られると主張している¹⁶。

¹³ “An adverbial is possible with a stative, but a resultative with the same adverbial has an additional meaning.” (Embick, 2004:357)

¹⁴ “The door was open at a recent point in the past and (probably) is no longer open.” (Embick, 2004:357)

¹⁵ “The door is in the opened state, the opening having taken place recently.” (Embick, 2004:357)

¹⁶ 英語訳は Gürer (2014) からの引用で、例 (25) の下線は筆者による。

- (25) a. kapı geçenlerde aç-ık-tı, şimdi değil.
 ドア 少し前に 開ける-PRT-PST.COP 今 NEG
 英語訳：‘The door was open recently, not now.’
 日本語訳：‘ドアが少し前に開いていたが、今は開いていない。’
- b. kapı geçenlerde aç-ıl-mış-tı, şimdi değil.
 ドア 少し前に 開ける-PASS-PRT-PST 今 NEG
 英語訳：‘The door was opened recently, not now.’
 日本語訳：‘ドアが少し前に開けられた。（開けるという動作が）今ではない。’
 (Gürer 2014:174)

確かに (25a) では「ドアが少し前に開いていた状態」という解釈が可能で、(25b) からは「ドアの開けられた動作が少し前であった」という解釈ができる。しかし、Gürer (2014) が指摘した意味②の「まだ開いている状態にある」ということは (25b) から解釈できず、(25a) は必ずしも①の「結果継続がない」という意味のみを表すと言い切れない。また、そのことは -Ik と -miş が付加された全ての分詞構文に当てはまるわけではない。例えば、(26b) のような反例がある。

- (26) a. Ana giriş kapısı geçenlerde aç-ık-tı, şimdi aç-ık değil.
 正門 少し前に 開ける-PRT-PST.COP 今 開ける-PRT NEG
 ‘正門は少し前に開いていたが、今は開いていない。’
- b. Ana giriş kapısı geçenlerde aç-ık-tı, hala aç-ık-mış.
 正門 少し前に 開ける-PRT-PST.COP まだ 開ける-PRT-EV (伝聞)
 ‘正門は少し前に開いていて、まだ開いているようだ。’

(26a) は「結果継続がない」ことを表し、それは Gürer (2014) の主張の通りであるが、「結果継続がある」ことを含意しないとされた -Ik は (26b) に見られるように文法的であるため、Gürer (2014) の主張のみでは説明できない。これらのことを踏まえて、本節では以下の点を明らかにする。

- i. 副詞と共に使われる語彙的分詞の -Ik は「結果継続がない」ことしか表さないとされるが (Gürer 2014)、(26) のように「結果継続を表す」場合と「結果継続を表さない」場合の他に、どのような例が見られるかを検討し、どのような要因が影響をもたらすのかについて考察を行う。
- ii. 副詞と共に使われる結果状態分詞の -miş には「結果継続を表す」場合と「結果継続を表さない」場合の両方がある (Gürer 2014) という主張について、全ての分

詞構文に当てはまるかどうかを検討し、どのような要因が影響を及ぼすかについて考察を行う。

- iii. -(I)II について指摘された「一時的な状態、いわゆる後戻りできる状態を表す」という意味は、動詞と名詞から独立して解釈されるかどうかを明らかにする。

まず、-Ik に関する考察を行う。-Ik は「結果継続がある場合」と「結果継続がない場合」の両方とも含意する場合 (cf. 26) もあるが、同じ副詞 (geçenlerde ‘少し前に’) と共起する際には非文法的になる。

- (27) a. *Tencere-deki yemek geçenlerde boz-ık-tu, şimdi boz-uk değil.
鍋-LOC 料理 少し前に 腐らす-PRT-PST.COP 今 腐らす-PRT NEG
‘鍋にある料理は少し前に腐っていたが、今は腐っていない。’
- b. *Tencere-deki yemek geçenlerde boz-ık-tu, bugün çöp-e
鍋-LOC 料理 少し前に 腐らす-PRT-PST.COP 今日 ゴミ-DAT
at-ti-m.
捨てる-PST-1SG
‘鍋にあった料理が少し前に腐っていて、今日ゴミに捨てた。’

(27a) は意味①の「結果継続がない」という意味を表すための作例であり、「腐っていたが、もう腐っていない」と言えないため、非文法的である。(27b) は意味②の「結果継続がある」という意味を表すための作例であり、「腐っていて、今日ゴミに捨てた」と言っても、文の前半部分の「少し前に腐っていた」のところでは「少し前に」と「腐っていた」は意味的に共起しないため、この例も非文法的である。これは、-Ik が付加された動詞の表す事象が生起した後に、何らかの原因で元の状態に戻ることができる可能性がないことと密接に関わっていると思われる。つまり、あるものが何らかの原因で腐って、もう腐っている状態にある時に、どうにかして元の状態（腐る前の状態）に戻せるとは考えられない。同様の属性をもつ別の動詞として、以下のような例が挙げられる。

- (28) a. *Ağac-ın dal-ı geçenlerde kır-ık-tı, artık kır-ık değil.
木-GEN 枝-POSS.3SG 少し前に 折る-PRT-PST もう 折る-PRT NEG
‘木の枝が少し前に折れていたが、もう折れていない。’
- b. *Ağac-ın dal-ı geçenlerde kır-ık-tı, bak-ti-m, hala
木-GEN 枝-POSS.3SG 少し前に 折る-PRT-PST 見る-PST-1SG まだ
kayna-ma-mış.
くつつく-NEG-EV (発見)

‘木の枝が少し前に折れていて、確認したら、まだくっついていないよう
だ。’

しかし、動詞と分詞接辞が同じで、名詞のみが変わると、述語動詞のアスペクト的な
意味と同時に文全体の意味も変わり、副詞との共起も可能になる。

(27') a. Şu kumanda geçenlerde boz-uk-tu, şimdi boz-uk değil.

その リモコン 少し前に 壊す-PRT-PST.COP 今 壊す-PRT NEG

‘そのリモコンは少し前に壊れていたが、今は壊れていない。’

b. Şu kumanda geçenlerde boz-uk-tu, bak-tı-m, hala

そのリモコン 少し前に 壊す-PRT-PST.COP 見る-PST-1SG まだ

tamir ed-il-me-miş.

修理する-PASS-NEG-EV (発見)

‘そのリモコンは少し前に壊れていて、確認したらまだ修理されていない
ようだ。’

(28') a. Baş parmağ-ı geçenlerde kır-ık-tı, artık iyileş-ti.

親指-POSS.3SG 少し前に 折る-PRT-PST もう 治る-PST

‘(彼/彼女の) 親指が少し前に折れていたが、もう治った。’

b. Baş parmağ-ı geçenlerde kır-ık-tı, sor-du-m, hala iyileş-me-miş.

親指-POSS.3SG 少し前に 折る-PRT-PST 聞く-PST-1SG まだ 治る-NEG-EV (伝聞)

‘(彼/彼女の) 親指が少し前に折れていて、聞いたらまだ治っていない
そうだ。’

次に、-miş の動詞と名詞との関連性について言うと、先行研究 (Gürer 2014) は -miş は
「結果継続を表す」場合と「結果継続を表さない」場合の両方があると指摘するが (cf.
25b)、-miş には「結果継続を表す」のみの場合が見られる。

(29) a. *O ekmek geçenlerde yan-mış-tı, şimdi yan-ık değil.

その パン 少し前に 焦げる-PRT-PST.COP 今 焦げる-PRT NEG

‘そのパンは少し前に焦げたが、今は焦げていない。’

b. O ekmek geçenlerde yan-mış-tı, bu sabah kuş-lar-a ver-di-m.

その パン 少し前に 焦げる-PRT-PST.COP 今朝 鳥-PL-DAT やる-PST-1SG

‘そのパンは少し前に焦げたので、今朝、鳥にやった。’

(29a) は「少し前に焦げたが、今は焦げていない」と言えないため、非文法的であると考えられるが、(29b) は「少し前に焦げたので、今朝、鳥にやった」と言えるため、「結果継続がある」という意味のみを表すことがわかる。上述した *-Ik* の場合と同様に、*-miş* に「結果継続を表す」のみの場合が見られることの要因として、付加された動詞の表す事象が引き起こされた後に、何らかの原因で元の状態に戻ることができる可能性がないことが挙げられる。

つまり、*-Ik* の例で挙げられた「料理が腐る」と「枝が折れる」のように、「パンが焦げる」という事象の場合も後戻りが不可能であるのだ。

しかし、*-Ik* と同様に *-miş* の場合にも動詞と分詞接辞は同じままで、名詞のみが変わると、述語動詞のアスペク的な意味と同時に文全体の意味も変わり、Gürer (2014) の「*-miş* には「結果継続を表す」場合と「結果継続を表さない」場合の両方がある」という指摘が適切になる。

- (29') a. O tava geçenlerde yan-mış-tı, dün temizle-di-m.
 あの フライパン 少し前に 焦げる-PRT-PST.COP 昨日 落とす-PST-1SG
 ‘そのフライパンは少し前に焦げ付いたので、昨日（焦げを）落とす。’
- b. O tava geçenlerde yan-mış-tı, dün çöp-e at-tı-m.
 あの フライパン 少し前に 焦げる-PRT-PST.COP 昨日 ゴミ-DAT 捨てる-PST-1SG
 ‘そのフライパンは少し前に焦げ付いたので、昨日ゴミに捨てた。’

先行研究の Gürer (2014) は「結果継続がある」ことと「結果継続がない」ことが分詞接辞によって左右されると指摘しているが、上記の考察からもわかるように、*-Ik* と *-miş* の影響は見られず、結果継続の有無は動詞と名詞の関係性を捉える上で、それがもつアスペク的な意味と大きく関わっていると言える¹⁷。

最後に、-(I)II の動詞と名詞との関連性について考察を行う。Kratzer (2000) は句の分詞を「目標状態分詞」と「結果状態分詞」として 2 つに分け、それらを副詞の *still* (まだ) の検証テストによって区別している。Parsons (1990) が指摘した「結果状態は永遠の状態、即ち後戻りできない状態を表すのに対し、目標状態は「一時的といった後戻りできる状

¹⁷名詞による影響については、名詞が出来事の影響を完全に受けるか、それともそれを表面的に受けるかという、動詞の表す出来事の影響の及ぶ範囲が手掛かりになるであろうと考えている。例えば (29) と (29') で「パン」と「フライパン」のいずれの場合も「完全に焦げた」と仮定する。前者の場合、「焦げる」という出来事の影響がパンの中までに及んで、当然食べることが出来ない。しかし後者の場合は、使用はできないまでも影響はその素材の中まで及ばず、擦ると焦げを落とすことができる。

態を表す」ということから、副詞の「まだ」と共起できるものを「目標状態」とし、共起できないものを「結果状態」と主張している。同じ検証テストを Anagnostopoulou (2003) はギリシャ語の分詞の分類に利用しており、Gürer (2014) はトルコ語の分詞の分類に利用している。その例は次のようである。

- (30) a. Saç-ı hala yap-ılı.
 髪の毛-POSS.3SG まだ する-PRT
 英語訳：‘Her hair is still done.’
 日本語訳：‘彼女は髪型をまだセットしている。’
- b. *Saç-ı hala yap-ılmış.
 髪の毛-POSS.3SG まだ する-PASS-PRT
 英語訳：‘Her hair is still done.’
 日本語訳：‘彼女は髪型をまだセットしている。’ (Gürer 2014:176)¹⁸

Gürer (2014) は、ドイツ語とギリシャ語で見られるこの区別がトルコ語にも見られると述べ、-(I)II 構文は *hala* (まだ) と共起できるため、後戻りできる状態を表すと主張している。しかし、-(I)II は恒常的な性質状態を表す場合もあり、その場合には *hala* (まだ) とは共起できない。

- (31) a. O ülke-nin etraf-ı deniz-ler-le çevr-ılı.
 あの 国-GEN 周り-POSS.3SG 海-PL-と 囲む-PRT
 ‘その国は海に囲まれている。’
- b. *O ülke-nin etraf-ı hala deniz-ler-le çevr-ılı.
 あの 国-GEN 周り-POSS.3SG まだ 海-PL-と 囲む-PRT
 ‘その国はまだ海に囲まれている。’
- (32) a. Önemli cümle-ler-in alt-ı çiz-ili.
 大事な 文-PL-GEN 下-POSS.3SG 線を引く-PRT
 ‘大事な文の下には線が引いてある。’
- b. *Önemli cümle-ler-in alt-ı hala çiz-ili.
 大事な 文-PL-GEN 下-POSS.3SG まだ 線を引く-PRT
 ‘大事な文の下には線がまだ引いてある。’

(31a) の「その国は海に囲まれている」はその国の恒常的な性質状態を表し、「囲まれている」に相当するところは -(I)II を含んでいる。この場合は (31b) のように *hala* (まだ)

¹⁸ 英語訳は Gürer (2014) からの引用で、例 (30) の下線は筆者による。

を使うと不自然になる。同じく (32a) の「大事な文の下には線が引いてある」は日本語で言い換えると「下線文」という文の恒常的な性質状態を表すが、このような場合にも「文の下には線がまだ引いてある」と言えないので、-(I)II と「まだ」は共起できないと言える。

上記のことを踏まえて、-Ik、-mIş と -(I)II の動詞と名詞との意味的な関連性について以下のようにまとめることができる。

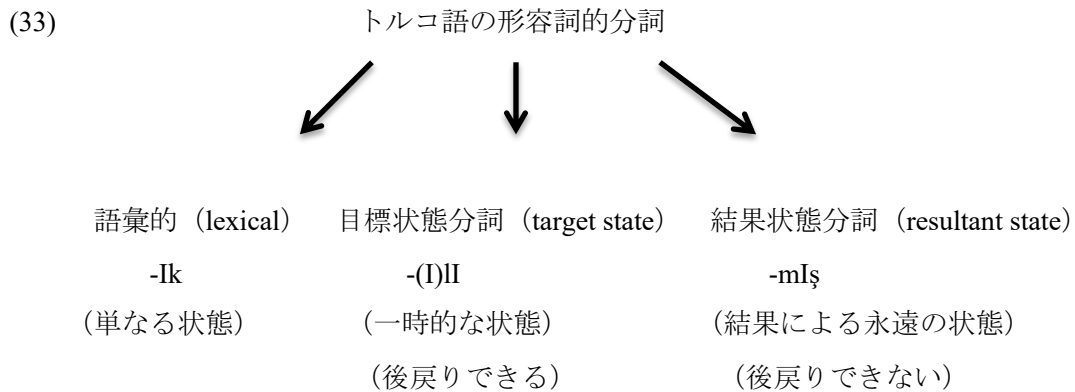
- 先行研究では -Ik は意味①（過去の近い時点においてある状態にあったが、今はもうその状態にはない）のみを含意するとされるが、-Ik は意味①と②（過去の近い時点においてある動作が起こって、まだその状態にある）の両方とも含意する場合 (cf. 26) と、同じ副詞 (geçenlerde ‘少し前に’) と共起する際にはいずれも非文法的になる場合 (cf. 27-28) がある。これは、動詞の「後戻りの不可」という意味的特徴に左右されるからであると考えられる。
- 動詞と分詞接辞は同じままで、名詞のみが変わると、述語動詞のアスペク的な意味と同時に文全体の意味も変わり、副詞との共起や「結果継続がある」意味と「結果継続がない」意味の両方とも可能になる (cf. 27'-28'-29')。これは動詞や分詞接辞だけではなく、名詞も文全体の意味に影響をもたらすことを表している。
- 先行研究 (Gürer 2014) は -mIş には「結果継続を表す」場合と「結果継続を表さない」場合の両方があると指摘しているが、-mIş には「結果継続を表す」のみの場合 (cf. 29) がある。「結果継続がない場合」の「もうその状態にはない」という意味は動詞の「後戻り可」ということに関わり、「結果継続を表さない」ことの原因は動詞の「後戻り不可」という側面にあると考えられる。つまり、-Ik と同様に、-mIş 構文の意味も動詞が後戻りできるかどうか、という意味特徴によって左右される。
- 先行研究では -(I)II は「一時的な後戻りできる状態を表す」とされ、副詞の hala (まだ) と共起できると指摘されているが、本節では hala (まだ) と共起できない例が見られることを指摘した (cf. 31-32)。これは、「後戻りできる状態を表す」という意味は分詞接辞のみが含意するものではなく、その分詞接辞が付いた動詞が恒常的な性質状態を表すかどうかにもよるということである。恒常的な性質状態もまた、「後戻り不可」という意味特徴によって左右されるということを表す。

このように、「後戻りできる状態」や「後戻りできない状態」といった区別は分詞接辞の意味や性質のみによって左右されるわけではなく、動詞・分詞接辞・名詞の意味と性質とも大きく関連している。

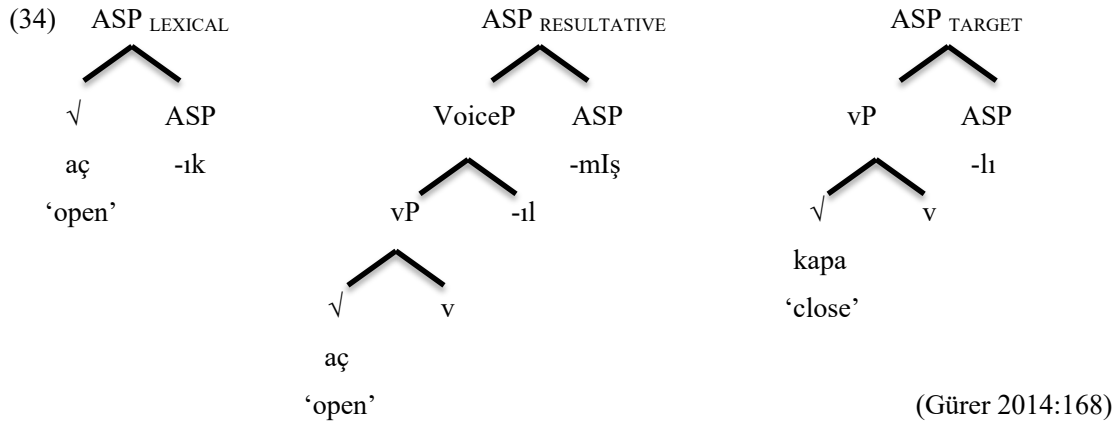
3.2.5. 形容詞的分詞の対応関係

上記では、それぞれの分詞接辞の統語的・形態的な特徴と動詞と接続する際の制限や動詞と名詞との意味的な関連性について述べた。本節では、それらの3つの分詞接辞の統語的・形態的そして意味的な特徴に再び触れ、トルコ語における形容詞的分詞の間にはどのような対応関係が見られるかについて考察を行う。

Kratzer (1994-2000) による Gürer (2014) のトルコ語の形容詞的分詞の分類は以下のよう
にまとめられる。



また、それらの3つの分詞接辞の統語構造は以下のようにまとめられ、それぞれの分詞が異なる構造を持っていることが明らかにされている ($\sqrt{\text{=root}}$)。



句の分詞である結果状態分詞の -miş と -(I)II は出来事層の vP を含んでいるため、出来事中心の様態副詞と共起でき、単なる状態を表さず前の出来事に言及するため、「build」、「make」などのような創造動詞や「become」のような状態変化動詞とは両立できない。それに対して、語彙的分詞の -Ik は vP を含まず、語根に直接に付くため、出来事中心の様態副詞と共起できず、単なる状態を表すため、創造動詞や状態変化動詞とは両立できる。従って、そのような副詞や動詞の要素になる場合には、-miş と -(I)II の両

方とも使用でき、接続する動詞が **-mİş** より制限されている **-(I)II** が接続できる動詞（ほとんどは他動詞）であれば、その動詞に受身形を付けた状態では **-(I)II** と **-mİş** はパラフレーズできる関係にある。

出来事中心の様態副詞と両立の場合：

- (35) a. **özensizce çiz-ili kaş**
 雑に 描く-PRT 眉毛
 ‘雑に描かれている眉毛’
- b. **özensizce çiz-il-miş kaş**
 雑に 描く-PASS-PRT 眉毛
 ‘雑に描かれている／描かれた眉毛’

創造動詞や状態変化動詞と非両立の場合：

- (36) a. ***Saç-lar-ı ör-ülü ol-muş.**
 髪-PL-POSS.3SG 編む-PRT なる-EV (発見)
 ‘(彼女は) 髪の毛を三つ編みにしている形／状態になっている。’
- b. ***Saç-lar-ı ör-ül-müş ol-muş.**
 髪-PL-POSS.3SG 編む-PASS-PRT なる-EV (発見)
 ‘(彼女は) 髪の毛を三つ編みにしている形／状態になっている。’

意味的な観点から見ると、**-Ik** と **-(I)II** は副詞の「hala」‘まだ’の付加によって一時的な、後戻りできる動作を表すのに対し、**-mİş** はコンテキストによって一時的な状態も表すことがあるが (cf. 25b)、副詞の「hala」‘まだ’と共起できないため、後戻りできない状態を表すとされる (cf. 30b)。従って、意味的な面では **-Ik** と **-(I)II** はお互いに対応しやうい。

但し、**-Ik** と **-(I)II** は両方とも同じ動詞に接続できる場合があっても (cf. 22)、ほとんどの場合には両形式が接続する動詞が制限され、上記のように多くの場合にお互いに対応するにも関わらず、分詞接辞によって決まった動詞でなければ、接続が不可能である (cf. 21a-21b)。それに対して、**-mİş** は受身形である全ての動詞に付加できる、形態的に自由な分詞接辞である。このような制限をもつ **-Ik** と **-(I)II** が接続できるいくつかの動詞を以下に示す。

表3 -Ikが接続できる動詞の例

-Ikが接続できる動詞			
他動詞		自動詞	
動詞語幹	例	動詞語幹	例
aç- ‘開ける’	aç-ık kapı ‘開いたドア’	kızar- ‘赤らむ’	kızar-ık göz ‘赤らんだ目’
boğ- ‘絞殺する’	boğ-uk ses ‘嘎れた声’	yan- ‘焦げる’	yan-ık ekmek ‘焦げたパン’
eğ- ‘撓める’	eğ-ık ağaç ‘撓んだ木’	don- ‘凍る’	don-uk et ‘凍った肉’
yık- ‘倒す’	yık-ık ev ‘倒れた家’	art- ‘残る’	art-ık yemek ‘食べ残し’
yar- ‘裂く’	yar-ık dudak ‘裂けた口’	bat- ‘沈む’	bat-ık gemi ‘沈んだ船’
kır- ‘割る’	kır-ık cam ‘割れたガラス’	sol- ‘枯れる’	sol-uk yüz ‘青白い顔’
kes- ‘切る’	kes-ık parmak ‘切れた指’	kop- ‘外れる’	kop-uk düğme ‘外れたボタン’
yırt- ‘破る’	yırt-ık elbise ‘破れたドレス’	değiş- ‘変わる’	değiş-ık isimler ‘変わった名前’
del- ‘穴を空ける’	del-ık şişe ‘穴の空いたボトル’	birleş- ‘複合する’	birleş-ık fiil ‘複合動詞’
boz- ‘壊す’	boz-uk kumanda ‘壊れたリモコン’	buruş- ‘しわが寄る’	buruş-uk kağıt ‘しわの寄った紙’
sök- ‘解く’	sök-ük kazak ‘解けたセーター’	karış- ‘混ざる’	karış-ık pizza ‘ミックスピザ’
çiz- ‘（線を）引く、描く’	çiz-ık masa ‘傷のついたテーブル’	dolaş- ‘乱れる’	dolaş-ık saç ‘乱れ髪’
kıs- ‘下げる’	kıs-ık ses ‘低い音’	uyuş- ‘痺れる’	uyuş-uk vücut ‘痺れた体’
ayır- ‘外す、分ける’	ayr-ık diş ‘すきっ歯’	çök- ‘崩壊する’	çök-ük bina ‘崩壊したビル’

表 4 -(I)II が接続できる動詞の例

-(I)II が接続できる動詞			
他動詞		自動詞	
動詞語幹	例	動詞語幹	例
bas- ‘押す、出版する’	bas-ılı kaynak ‘出版資料’	az- ‘絶望する’	az-ılı katil ‘絶望した人殺し’
dik- ‘植える’	dik-ili ağaç ‘植わった木’	kok- ‘香る’	kok-ulu sabun ‘香る石けん’
ör- ‘編む’	ör-ülü saç ‘三つ編みされた髪’	kork- ‘怖がる’	kork-ulu anlar ‘怖い時’
sar- ‘包む、巻く’	kağıda sar-ılı şeker ‘紙に包まれた飴’		
tak- ‘付ける’	şarja tak-ılı telefon ‘充電中の携帯電話’		
tıka- ‘穴を埋める、詰める’	tıka-lı damar ‘詰まった血管’		
yaz- ‘書く’	yaz-ılı kağıt ‘書かれた紙’		
as- ‘貼る、かける’	duvara as-ılı resim ‘壁にかかった絵’		
kapa- ‘閉める’	kapa-lı kapı ‘閉まったドア’		
diz- ‘並べる’	diz-ili çiçekler ‘並んだ花’		
göm- ‘埋める’	göm-ülü diş ‘埋伏歯’		
çevir- ‘囲む’	çitle çevr-ili bahçe ‘垣根で囲まれた庭’		
yığ- ‘重ねる’	bulaşık yığ-ılı lavabo ‘洗い物がいっぱい の流し台’		
ek- ‘植える’	ek-ili tarla ‘耕田’		

表 3 の動詞の「çiz-」 ‘(線を) 引く、描く’ と「ayır-」 ‘外す、分ける’ は -(I)II とも共起できるが、-(I)II の付加によって動詞が表すアスペクト的な意味が異なる。例えば、以下の例で明確に表される。

- (37) a. çiz-ik masa ‘傷のついたテーブル’
描く-PRT テーブル
- b. alt-ı çiz-ili cümle ‘下線文’
下-POSS.3SG 描く-PRT 文
- c. ayr-ık diş ‘すきっ歯’
外す-PRT 歯
- d. engelli-ler-e ayr-ılı koltuk ‘障害者専用座席’
障害者-PL-DAT とっておく-PRT 座席

例 (37a) と (37c) は -Ik を含む例であり、対象／被修飾名詞の単なる状態や性質を表す。それに対して、(37b) と (37d) は -(I)II を含む例であり、被修飾名詞の状態や性質を表すと同時に「～のための～」という目的の解釈を与えている。具体的には、(37b) は「ある文の下には線が引いている」という文の状態・性質を表すと共に、「下線を引いてある文」という解釈を与えている。同様に、(37d) は「この座席は障害者に確保されている」という座席の状態・性質を表すと共に、「障害者のための座席」という目的の解釈を与えている。即ち、単なる状態・性質を表すか、対象のその時の状態と共に、何らかの目的でその状態にあることを記述するかどうかによって使用する分詞接辞が異なる。このような場合には、どの分詞接辞を使用すべきかの判断が難しいと思われるが、同じ動詞が -Ik も -(I)II も取ることができる場合は少ない。表 4 でも、-(I)II が -Ik と置き換えられる動詞は「bas-」‘出版する’、「sar-」‘包む’、「tak-」‘付ける’と「as-」‘貼る／かける’の 4 つしかない。また、これらの動詞も上記の場合と同様に、-Ik に置き換えられると、動詞のアスペク的な意味と共に動詞の意味が完全に変わることや単純な名詞としてしか使えないという品詞の転換が見られることがある。具体例を以下に例示する。

- (38) a. bas-ılı kaynak ‘出版資料’
出版する-PRT 資料
- b. bas-ık tavan ‘低い天井’
押す-PRT 天井
- c. kağıd-a sar-ılı şeker ‘紙に包まれた飴’
紙-DAT 包む-PRT 飴
- d. sar-ık-lı adam ‘ターバン（イマームが被る帽子）を被った男の人’
巻く-PRT-PROP 男の人
- e. şarj-a tak-ılı telefon ‘充電中の携帯電話’
充電-DAT 付ける-PRT 電話

- f. sayı-lar-a tak-ık insan ‘数字を重視した人’
 数字-PL-DAT 気にする-PRT 人
- g. duvar-a as-ılı resim ‘壁に掛かった絵’
 壁-DAT 掛ける-PRT 絵
- h. as-ık surat-ılı kadın ‘膨れっ面をした女の人’
 膨れる-PRT 顔-PROP 女の人

例 (38a-b) で見られるように、「bas-」‘押す／出版する’という動詞は -(I)II の付加によって「出版する」という意味を表し、-Ik を付加するとその意味が「押す」という動作の結果である「低い」という状態の意味を表すようになる。(38c-d) の「sar-」‘包む／巻く’は -(I)II が付加されると、形容詞的な用法をもっているが、-Ik と置き換えられると、それは名詞としてしか使えない。(38e-f) の「tak-」‘付ける’は -(I)II の付加によって「あるものをどこかに付する・くっつける」という意味になるが、-Ik の付加では「気にする／重視する」という意味に変化し、それは俗語としてしか使用できない。最後に、(38g-h) の「as-」‘貼る／掛ける’という動詞の場合は、-(I)II の付加によって「あるものがどこかに貼っている／掛かっている」という動詞の基本的な意味を表すが、-Ik を付加すると「膨れっ面」という意味に変化する。

このような分詞接辞の付加による意味の変化は大抵 -Ik と -(I)II の間に見られる現象であり、-mİş の場合は動詞の基本的な意味が解釈され、アスペクト的には動作が完了したこと、或は結果による動作の状態が解釈される。

3.3. タ・テイルの形容詞的用法

トルコ語のように、日本語においても接続する動詞が動詞らしさを失い、主体の状態・性質を表す形容詞のような性格を帯びるようになるタとテイルという 2 つの形式が存在する。タとテイルのこのような用法を「形容詞的用法」と呼ぶ(寺村 1984)。寺村 (1984) によると、形容詞的用法とは、主体のありようを時間軸に沿った変化、展開として見て、その一局面を捉えて述べるものではなく、主体のある様子を他者と比較して、特徴づけているものである (p. 139)。例えば、次のような形容詞的なテイルは当人の過去の比較ではなく、他の人との比較を表す。

- (39) a. あの人はずいぶん太っているね。
 b. 彼女は痩せているが、健康そうだ。 (寺村 1984:138)

このような形容詞的用法の解釈の成立には、動詞の種類が影響し、タとテイルの形容詞的用法と動詞の種類との関係については、蔡 (2013) は形容詞的用法が他動性の低い非

対格動詞に現れやすいが、他動性の高い他動詞・非能格動詞には現れにくいと述べている。

以下では、このような主体の状態・性質を表す形容詞のような性格を表す形容詞的なタとテイルの他の用法との弁別と機能について概観し、それぞれの形式の判定基準について記述する。

3.3.1. タの形容詞的用法

連体修飾のタには、述語用法と共通する「過去」あるいは「已然・完了」と呼ばれる用法の他に、述語用法にはない「形容詞的」用法が存在する（金水 1994）。その形容詞的用法には「過去」の意味も、「已然・完了」の意味も感じられない（寺村 1984）。

- (40) a. 彼女が去年のパーティーで着た着物を覚えていますか？（過去）
 b. 彼女は一度着た着物は二度と着ない。（已然・完了）
 c. 立派な着物を着た女性が近付いてきた。（形容詞的）

（金水 1994:29）

3.3 節でも述べたように、寺村 (1984) は形容詞的用法の特徴として、「主体のある様子を他者と比較して、特徴づけている」という点を挙げ、形容詞的用法は主体の状態を表すとしている。その状態には「単なる状態」と動詞の意味を動作から結果の状態へ変化させる、いわゆる「結果の状態」がある（Jacobsen 1982, 森田 1988, Abe 1993, 金水 1994, Ogihara 2004）。

金水 (1994) はタの連体修飾において形状動詞¹⁹を動詞の語彙概念構造から、結果の状態を表すか、単なる状態を表すかによって分類している。その分類は以下のように表される。

表 5 金水 (1994) による形状動詞の分類

	分類	意味	例
形状動詞	構造的	「タ」, 「テイル」, 「テアル」を付加し, 結果の状態を焦点化することによって派生されるもの	壊れたおもちゃ
	語彙的	結果の状態を焦点化することによって派生されない, 動詞自体がほぼ形容詞的用法専用のもの	ばかげた事件

¹⁹ 金水 (1994) は形容詞的な意味を持っていて、連体修飾ではタ、主節ではテイルまたはテアルで現れる述語を、タ、テイル、テアルを含めた形で「形状動詞」と呼んでいる。

金水 (1994) の構造的形状動詞という概念は Abe (1993) の時制的なタと形容詞的なタの弁別に基づいている。Abe (1993) は以下の例を挙げ、タが形容詞的か、動詞的／時制的かという点では両義的であると述べている。

(41) ゆでた卵 (Abe 1993:133)

動詞的／時制的な解釈では、タは時制（過去）を表し、「ゆでる」という動作は「卵」という対象に対して文中の無標の動作主によって行われたことを表す。上記の例 (41) は動作主、時間や場所を表す表現、そして様態副詞や節の付加で動詞的／時制的解釈をもつ (Abe 1993) ²⁰。

²⁰ Abe (1993) は動作の様態を表す副詞や節が構造的形状動詞とともに使用されると、動詞的・時制的な意味しか表さないと述べているが、金水 (1994) は様態副詞には形状動詞と一緒に使われると、形容詞的な意味を表し得るものもあると指摘している。金水 (1994) によると、様態副詞には ①動作主中心であることや動作の様態を描写するもの、②対象の変化の様態を描写するもの、③対象の結果の状態を描写するものがあり、①と②は形容詞的解釈を許しにくく、③は許しやすい。例えば、まず①と②の例を挙げる。

(1) a. いやいや帽子をかぶった男 (①)
b. ぼろぼろと崩れた塀 (②) (金水 1994:50-51)

上記の例 (1) は動作主中心であることや動作の様態を描写する副詞のため、形容詞的解釈が阻止されるという。しかし、例 (1b) の副詞の「ぼろぼろと」を「ぼろぼろに」にすると、③対象の結果の状態を描写するようになり、形容詞的解釈が容認される。

(2) ぼろぼろに崩れた塀 (③) (金水 1994:51)

繰り返し型の擬音語・擬態語は「～と」の形を取ると「変化」を、「～に」の形を取ると「結果」を表す傾向があるからであると説明されている。形容詞的解釈を阻止しない、結果を表す副詞として以下のような例も挙げられている。

(3) a. 小さく切った大根 (③)
b. 包帯を何重にも巻いた腕 (③) (同上)

- (42) a. 太郎がゆでた卵
 b. 昨日ゆでた卵
 c. 自分の部屋でゆでた卵
 d. 大急ぎでゆでた卵
 e. テレビを見ながらゆでた卵

それに対して、形容詞的な解釈では、「ゆでる」という動作は動作主や時間と場所の意味を含んでおらず、タは「卵」という対象の状態・属性を表す。金水 (1994) はこのような形容詞的な解釈を与えるタとその接続する動詞を全体で構造的形状動詞としている。

形容詞的なタが上記のような副詞による成立条件をもつことに関して考察を行っている田川 (2010) は Abe (1993) の指摘と同じく、状態を表す形容詞的なタは期間／期限を表すような表現が共起しないと述べている (例 43)。

- (43) a. *明日から／一日中濡れたタオル
 b. *今も／まだ／ずっと濡れたタオル (田川 2010:194)

更に、田川 (2010) は Abe (1993)、金水 (1994)、そして Ogihara (2004) の指摘である形容詞的用法のタ節に動作主外項が生起できないことに加えて、「経験者」のような外項も生起できないと言及し、以下の例を挙げている。

- (44) a. *その女性がプログラミングの能力に優れた (こと)
 b. プログラミングの能力に優れた女性
 c. *その女性が優れたプログラミングの能力
 d. 優れたプログラミングの能力 (田川 2010:195)

しかし、動作の様態を描写する様態副詞と共起した場合で、例 (4) のように形容詞的解釈が阻止されない例もあり、それは動詞を修飾する副詞が結果の状態に強く関与していればいるほど、形容詞的解釈が容易になると説明されている。

- (4) a. じっくり煮込んだシチュー
 b. さっと炒めたにんにく (同上)

一方、上記で挙げた構造的形状動詞ではない形状動詞は語彙的形状動詞とされ、このグループに入る形状動詞は元々出来事の意味を持たないものと、元の動詞は出来事を表す動詞的用法も持つが、形容詞的用法の方は結果の状態を焦点化することによって直接派生されたのではないものに分けられる。語彙的形状動詞の動詞分類は次のようである。

(45) a. 典型的第4種動詞（金田一 1950 による）

1. 漢語＋スル：冷暖房を完備した施設
2. 様態副詞（擬態語・擬声語を含む）＋スル：生き生きとした会話
3. 身体部分または形状を表す名詞＋ヲ＋スル：青い目をした人形

b. 第5種動詞²¹：異なった種類の問題、関連した事件

c. 結果の状態の固定とずれ²²：鳥に似た味、もつれた人間関係

d. 連体詞的形状動詞²³：あきれた事件、困った子どもたち

e. 副詞的・後置詞的形状動詞²⁴：外務省を通じた折衝、ルールに従った競争

（金水 1994:55-60）

本節では、タの形容詞的用法の形態的・統語的そして意味的な特徴を概説し、タが形容詞的になりうる成立条件と成り得ない条件、そしてタがどのような動詞に接続すると、形容詞的な意味をもつかということに触れた。次節では、ほぼ同様の観点から、テイルの形容詞的用法について記述する。

3.3.2. テイルの形容詞的用法

金田一 (1955) は状態相のテイルには已然態・進行態・将然態という動作・作用が起こるあるいは終わるなどに対してそれぞれ関係を持っている代表的な用法の他、そのような動作・作用の起こりに全く無関係であり、ある状態にあることを表すという形容詞的な意味をもつもう一つの基本的なものがあると述べ、それを「単純状態態」と呼んでいる。

(46) この道は曲っている。

（金田一 1955:45）

²¹ 存在動詞と第4種動詞の他に、存在や関係などの状态的意味しか持たず、テイルを付ける用法と付けない用法の両方をもった動詞群（金水 1994:56）。

²² 基本的には動詞的用法があり、形容詞的用法は構造的に派生されると考えられる動詞（金水 1994:57）。

²³ 連体修飾用法だけあって、主節用法を欠く動詞（金水 1994:59）。

²⁴ 名詞に接続して後置詞的に用いられる動詞（金水 1994:60）。

金田一 (1955) によると、例 (46) は道が「非・真直」という状態にあることを、「曲る」という語と「テイル」という語の二つの語に分けて表しているという。

金田一 (1955) は形容詞的なテイルの特徴として以下の点を挙げている (pp.46-47)。

- i. 動作・作用を表す動詞には単純状態態がない。単純状態態を持っているのは状態を表す動詞、形容詞、及び「—だ」の形である。
- ii. 状態を表す一部の動詞、形容詞、「—だ」の形は、それだけで単純状態態を表す。状態を表す動詞の一部はテイル又はタをつけて初めて単純状態態を表す（猿に似た顔＝猿に似ている顔）。金田一 (1950) のいわゆる第四種の動詞がこれである。なお、既然態・進行態・将然態に過去態と非過去態とがあつたが、それと同様に、単純状態態にも、過去態と非過去態がある。「ある」「白い」「似ている」などは、非過去態の単純状態態であり、「あつた」「白かつた」「似ていた」などは、過去態の単純状態態である。
- iii. 精神作用を表す動詞の中には、タを付けて、単純状態態を表すものが少数ある。「困る」「驚く」「あきれれる」などがそれで、「これには困つたよ」「困つた連中だな」などのように使う。

また、寺村 (1984) は、金田一 (1950) がテイルの付加によって「単なる状態」や「ある状態、性質を帯びていること」が表されるのが第四種の動詞であるとし、瞬間動詞と第四種の弁別が難しい場合が多いことに注目していることを述べた上で、どのような動詞ならそのテイルが常に形容詞的に理解され、どのような動詞なら決してこの種の使い方はできないか、またどのような種類の動詞が、「継続・進行」あるいは「結果の状態」としても使われ、形容詞的にも使われるのかを記述すべきであると指摘している。テイルの「継続・進行」の用法と、「完了の結果の状態」の用法を一括して「アスペクト的な用法」と呼び、アスペクト的なテイルと形容詞的なテイルを判定するテストを行っている。テイルのこれらの二つの用法の認定方法の一つとして、（未来・未然の）基本形の用法と、（過去・既然の）過去形の用法の両方が考えられるかどうかということ挙げ、考えられない場合は形容詞的用法であると認定している。もう一つは、連体修飾でタの形になるのが普通で、そのタには既然（完了）の意味も、過去の意味も感じられないかどうかである。そのテストに通るものは形容詞的動詞のテイルと考えられると指摘している。以下はそのテストの例である。

- (47) a. その老婦人はいつも犬を連れている。
 b. *明日彼女は犬を連れる (はずだ)。
 c. *昨日彼女は犬を連れた。
 d. 犬を連れている老婦人
 e. 犬を連れた老婦人 (*いつも犬を連れた老婦人)
 (→ a. は形容詞的) (寺村 1984:141)

- (48) a. 私はその秘密を知っている。
 b. その子もいつかはその秘密を知るだろう。
 c. その秘密を知っている人 (は、いない)
 d. その秘密を知った人 (は、次々に消された) (タは過去)
 (→ a. はアスペクト的) (寺村 1984:142)

- (49) a. あの人を知っている。
 b. *そこへ行ったら、あの人を知るだろう。
 c. *あの方は昨日知った人だ。
 d. 知っている人には誰にも会わなかった。
 e. 知った人には誰も会わなかった。 (タに既然、過去の意味無し)
 (→ a. は形容詞的) (寺村 1984:141-142)

このようなテストをしてみると、寺村 (1984) は動詞には、次の 3 つの種類があると指摘している。

- A. テイルがいつも形容詞的になる動詞
 B. テイルがいつもアスペクト的 (既然の結果) になる動詞
 C. 文脈次第で、テイルが形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなる動詞

このテストの観察のまとめとして、テイルが付くと、どのような種類の動詞がどの用法を表すかを具体的に以下のように示している (○は文脈によってその用法が可能であること、×は不可能、◎は特別の文脈なしに用いられる場合の優先的な読みを示す (p.142)) 。

(50)

過去と結びつけられた

形容詞的

現在の状態

既然の結果の存在

回顧

継続

結果の状態

(開始の結果)

(完了の結果)

A	食ベテ (飲ンデ) イル	◎	○	○	×
	走ッテ (歩イテ) イル	◎	○	○	×
B	ノンビリシテイル	○	×	○	○
	着物ヲ着テイル	○	○	○	○
	フトッテ (ヤセテ) イル	○	◎	?	○
	変ワッテイル	○	◎	?	○
C	始マッテ (終ッテ) イル	×	◎	○	×
	生きテイル	○	×	○	○
	死ンデイル	×	○	○	○
	スグレテイル	×	×	×	○
	バカゲテイル	×	×	×	○
	変ナ形ヲシテイル	×	×	×	○
	堂々トシテイル	×	×	×	○

(寺村 1984:143)

寺村 (1984) は形容詞的なテイルがどのような動詞の場合に表されるかに関する考察を行い、主にその述語における使用を取り扱っている。連体修飾節における用法については、金田一 (1955) は単純状態態のテイルの特徴に触れる際、「連体法の場合には「—た」の形でも表されるのが特徴である (p.46)」と述べているが、それ以上説明されていない。また、金水 (1994) は 3.3.1 節でも見られるように、形容詞的なタを中心に考察を行っており、連体修飾節における形容詞的なテイルについては記述していない。しかも、寺村 (1984) の形容詞的解釈の認定では形容詞的用法の動詞は連体修飾ではテイルを取りうることもあるにも関わらず、寺村 (1984) の指摘に従って整理したタ、テイルとテアルの分布では、主節のテイルとテアルが連体修飾の場合にはタに交替することを示している (pp.32-33)。

(51)

主節

連体修飾

過去・既然

タ

タ

継続・結果の状態

テイル

テイル

主節に現れる形容詞的なテイルは連体修飾においてタになることが多いが、テイルにもなり、そのような両形式の使用可能な場合については、3.3.4節で記述したい。

3.3.3. 動詞と名詞による意味的特徴

3.2節で述べたように、Parsons (1990) は結果状態分詞は永続に続く状態、いわゆる後戻りできない／結果継続のある状態を表すのに対し、目標状態分詞は一時的な後戻りできる／結果継続のない状態を表すと説明し、それらの2つの分詞を区別している。Ogihara (2004) はParsons (1990) の説明に触れ、以下の日本語の例を挙げながら目標状態分詞と結果状態分詞を説明している。

- (52) a. utukusii (人) [adjective]
 b. taore-ta (人) [adjectival]
 c. CD-o kat-ta (人) [preterit²⁵] (Ogihara 2004:22)²⁶

Ogihara (2004) によると、(52a) は典型的に形容詞や状態動詞に関連している語彙的な性質を表す単純な形容詞である。(52b) は目標状態を表す形容詞的な連体修飾であり、一時的／後戻りできる状態を表すが、目標状態だけではなく、その状態を生成する事象も表す。それに対して、(52c) は結果の状態の意味を持つパーフェクティブアスペクト・相対的過去 (preterit) のみを表すため、形容詞的な連体修飾ではない。一時的／後戻りできる状態は規則的には、同じ個人に限られた時間だけそれを持つことができるようなものである。例えば、ジョンがどこかで、ある時点で (52b) の状態である場合、その時点よりも後でその状態ではなくなることは完全に可能である。従って、(52b) は一時的／後戻りできる状態を表すと言える (pp.21-22-23)。

²⁵ Ogihara (2004) は Comrie (1976) や Smith (1991) のような標準的な文献に従い、過去の出来事から生じた現在との関連や結果の状態という意味を表すのに perfect という用語を使用している。用語の perfective は標準的な文献において「相対的過去」と呼ばれる概念に類似した概念を指すために使われている (Ogihara 1996)。彼は混乱を避けるために、単純に「perfect」という用語の使用を避け、代わりに「パーフェクティブアスペクト」や「相対的過去」を指すために preterit ‘単純過去’ という用語を使用している (Ogihara 2004:21)。

²⁶ 括弧の中の (人) は分かりやすくするために筆者によって書き加えられたものである。

Ogihara (2004) はタの形容詞的用法と動詞的用法における目標状態と結果状態の意味に関して記述しているが、形容詞的用法のテイルのそのような意味に関しては述べていない。両方の形式の意味については、森田 (1988) はそれぞれ具体的な例を挙げながら説明している。森田 (1988) によると、タが表す状態は固定観念の非場面的用法であり、平生の恒常的状态である (例 53)。それに対して、テイルはたまたまその折に強調された一時的状態を表す (例 54)。

(53) a. ほら、覚えてるかなあ...髪が長くて、眼鏡を掛けた先生がいたでしょう。

あの先生が担任の山本先生。

b. 白い杖を持った人 (森田 1988:169-170)

(54) a. あそこにいる、僕の黒のサングラスを掛けている人が兄です。

b. 白い杖を持っている人 (森田 1988:170)

森田 (1988) によると、例 (53a) はその人物の属性として普段の特徴を述べ、同様に (53b) は目が見えないという人物の属性を述べている。それに対して、例 (54a) はその時だけたまたま取った (と把握する) 状態の説明であり、(54b) は必ずしも目が見えない人とは限らない。

森田 (1988) は形容詞的なタが恒常的な状態を表すとしているにも関わらず、Ogihara (2004) は例 (52b) のように、形容詞的なタの後戻りできる場合を挙げている。このように先行研究の指摘は異なっていることが現状であり、いずれも明確な根拠に基づいているものではなく、更なる検討が必要である。そこで、本節では、以下の点を明らかにする。

- i. 「形容詞的用法のタが平生の恒常的状态を表す」ということが全ての形容詞的形式のタの構文に当てはまるかどうかを検討する。
- ii. 「形容詞的用法のテイルがたまたまその折にことさら取られた一時的状態を表す」という意味が全ての形容詞的形式のテイルの構文に当てはまるかどうかを検討する。
- iii. 形容詞的形式のタとテイルが持つ後戻りの意味は動詞と名詞から独立して解釈されるかどうかを明らかにし、トルコ語の形容詞的分詞と同様の振る舞いをしているかどうかについて考察を行う。

まず、夕に関する考察を行う。森田 (1988) の「形容詞的用法の夕が平生の恒常的状态を表す」という指摘は連体修飾節においてほとんどの場合に夕で現れる語彙的形狀動詞の場合に当てはまると考えられる。

- (55) a. 日本人で青い目をした人は珍しい。
b. 人間の顔をした犬を見て、びっくりした。

上記の語彙的形狀動詞の例は被修飾名詞の「人」と「犬」の恒常的状态を表し、それは以下のような後戻りできる解釈を持つ文との組み合わせでより明示される。

- (55') a. *あの青い目をした人はもう青い目をしていない。
b. *人間の顔をした犬はもう人間の顔をしていない。

3.2.4 節でも記述したように、Kratzer (2000) は句の分詞の「目標状態分詞」と「結果状態分詞」を副詞の still (まだ) の検証テストによって区別し、still と共起できるものを後戻りできる解釈を持つ「目標状態分詞」とし、共起できないものを後戻りできない解釈を持つ「結果状態分詞」としている。同じテストを日本語の形容詞的な夕に適用すると、上記の語彙的形狀動詞の夕は恒常的状态 (後戻りできない状態) を表すことがわかる。

- (56) a. *まだ青い目をした人
b. *まだ人間の顔をした犬

しかし、Ogihara (2004) の指摘の通り、形容詞的な夕が一時的な状態を表す場合もある。Ogihara (2004) はそれを連体修飾節において夕でもテイルでも現れる構造的形狀動詞を挙げて指摘しているが、語彙的形狀動詞の場合にも同様のことが見られる。

- (57) a. それはちょっと込み入った話で、理解しにくいです。
b. 会議の序盤にあった込み入った話は会長の説明によって解決された。

(57a) では、語彙的形狀動詞の「込み入った」は被修飾名詞の「話」がどのようなものであるかを表し、この時点での話の状態が一時的であるか、恒常的であるかの判断が不可能である。それに対して、(57b) では、会議の序盤にはある込み入った話があったが、会長がそれについて説明した上で、その話はもう込み入っている状態ではない、ということが述べられている。つまり、(57b) の「込み入った」は「話」の一時的な状態を表す。

上記のようなことは構造的形狀動詞の場合にも見られる。

- (58) a. テーブルの上にあった壊れたリモコンをゴミ箱に捨てた。
 b. テーブルの上にあった壊れたリモコンを今になって修理した。

(58a) はリモコンがまだ修理されていない、いわゆるまだ壊れている状態を表しているため、恒常的状态の解釈が可能である。それに対して、(58b) はリモコンがもう壊れておらず、まだ使われている状態を表し、後戻りできるという解釈が可能である。それは、3.2.4 節でトルコ語の形容詞的分詞のために指摘した動詞自体のAspect (語彙的Aspect) と関わっているからであると考えられる。「壊れる」という動詞は後戻りできるという意味特徴を含意しているため、それに接続する形式(ここではタ)は一時的な状態の意味も表せることを可能とする。このような観点は名詞の場合も同様である。

- (59) a. 倉庫にあった腐った木製の椅子は修理して、もう使えるようになった。
 b. *テーブルの上にあった腐ったリンゴはもう腐っていない。

上記のように、動詞と形容詞的形式が同じで、名詞のみが変わると、述語動詞のAspect的な意味と同時に文全体の意味も変わり、後戻りの可・不可の解釈が異なる。

次に、テイルの動詞と名詞との関連性について言うと、森田(1988)はテイルは「たまたまその折にことさら取られた一時的状態を表す」と指摘するが、「持っている」という構造的形状動詞を挙げ、語彙的形状動詞の場合については記述しない。そして、テイルの指摘されたその意味は全ての構文に当てはまるかどうか不明確である。そのため、まず、語彙的形状動詞の場合について考察を行う。テイルは語彙的形状動詞の場合に主節においてのみ使用でき、上記の方法と同様に「そうであったが、もうそうではない」という文の検証テストを適用するため、テイルの過去形であるテイタを使うことにする²⁷。

- (60) a. この本はあの時代では優れていたが、もうそうではない。
 b. 彼は堂々としていたが、年をとるにつれて気後れしてきた。

²⁷ 金田一(1955)は「白い-白かった」という単純な形容詞のように、テイルが現在の状態を表すと同様に、テイタが過去の状態を表すと述べ、テイルのように形容詞的な機能を持つとしている(p.47)。

上記の例 (60) はテイルを含む語彙的形狀動詞であり、森田 (1988) の指摘の通りに、いずれの文も後戻りできる／一時的な状態を表している。しかし、その指摘に反例となる例がある。

- (61) a. *彼女は青い目をしていたが、もうそうではない。
b. *あの犬は羊の顔をしていたが、もうしていない。

タと同様に、テイルの場合も動詞が名詞の恒常的な性質を表す場合、恒常的な状態／後戻りできない状態を表す。それらの動詞は副詞の「まだ」とも共起しない。

- (62) a. *彼女はまだ青い目をしている。
b. *あの犬はまだ羊の顔をしている。

構造的形狀動詞も同様の振る舞いをする。動詞自体が表すアスペク的な性質によって一時的・恒常的な状態の解釈の両方とも可能になる。

- (63) a. このシャンプーを使えば、禿げている人でもどんどん髪が生えてくる。
b. *年をとっている人はだんだん若くなってくる。

上記の例 (63a) では、「ハゲ」は治療を受けて治ることができると考えられるため、「禿げている」はその折にことさら取られた一時的状態を表す。それに対して、(63b) の「年配」は後戻りのない性質を表すため、「年をとっている」は恒常的な状態を表す。同じ例を「そうであったが、もうそうではない」の文として挙げても同様の解釈になる。

- (64) a. 彼は禿げていたが、もう禿げていない。
b. *彼は年をとっていたが、もう年をとっていない。

上記に記述したように、語彙的形狀動詞は副詞の「まだ」と共起できない。しかし、同じ副詞が動詞が後戻りできることを示す場合に構造的形狀動詞との共起が可能になる。

- (65) a. ボタンがまだ外れている。
b. まだ外れているボタン
c. *パンがまだ焦げている。
d. *まだ焦げているパン

最後に、タと同様に、テイルの場合も動詞と形容詞的形式が同じで、名詞のみが変わると、述語動詞のアスペク的な意味と同時に文全体の意味も変わり、後戻りの可能性・不可能性の解釈が異なる。

- (66) a. 彼女は前歯が折れている。
b. 彼女は足が折れている。

歯が折れる場合、それ自体が自然に治ることができない性質を持つため、「前歯が折れている」という状態は恒常的であると考えられる。しかし、骨が折れる場合は、それ自体には再生メカニズムがあるため、一時的状態である。

このようなことは、トルコ語のように、日本語においても後戻り可・不可の区別が形容詞的形式の意味や性質のみによって左右されるわけではなく、動詞・形容詞的形式・名詞の意味と性質とも深く関連していることを表している。

3.3.4. 形容詞的なタとテイルの対応関係

形容詞的なタとテイルは動詞の種類によって様々な類型を示す。例えば、金水 (1994) の動詞分類で述べると、語彙的形狀動詞の場合、主節においてテイルのみが使われ、それを連体修飾化すると、タのみが使用されるという構造的位置による交替現象が見られる。それに対して、構造的形狀動詞の場合は、主節のテイルは連体修飾節においてタにもテイルにも成りうる。

- (67) a. 語彙的形狀動詞：
この事件は馬鹿げている → 馬鹿げた／*馬鹿げている事件
b. 構造的形狀動詞：
このおもちゃは壊れている → 壊れた／壊れているおもちゃ

但し、語彙的形狀動詞は連体修飾節においていつもタを取るわけではなく、タよりもテイルの方が自然に思われる場合がある。

- (68) 現時点では優れている／*優れた脚力も、年をとるにつれて衰えるだろう。

(金 2007:158)

金 (2007) によると、例 (67) のような連体修飾節が動詞のみで成り立っている「一要素述語」は文において述語としてではなく、連体修飾語として働きやすく、述定性を失いやすい。そのために、述定性が低く、連体修飾節の従属度が高い。特に、状態性述語とし

て使われる語彙的形狀動詞は述定性を完全に失いやすいため、例 (67) のように連体修飾節が一要素述語の場合、タが使われやすくなる。それに対して、例 (68) のように主要素である述語以外に補足語、付加語などの要素が存在する「多要素述語」は述定性が高いため、テイルの容認度が高くなる (p.162)。

構造的形狀動詞の場合は、主節のテイルを連体修飾化すると、テイルがタに交替するものが多いが、それに関して砂川 (1986) は、「「シテイル」や「シテアル」の形で、なにかのできごとの結果として存在する状態をのべる文は、名詞を修飾するとき、そのままの形でもつかわれるが「シタ」の形になることもおおい (p.82)」と述べ、以下の例を挙げている。

- (69) a. びんに薬が入っています → 薬が入った／入っているびん
b. びんに薬が入れてあります → 薬を入れた／薬を・が入れてあるびん

同様に、森田 (1988) は連体修飾節においてタもテイルも現れる形容詞的用法について言及し、別の形式での言い方の場合はその連体修飾節が成り立たないか、成り立っても意味が違ってしまおうと述べている。

- (70) 先の尖った／尖っている鉛筆 ≠ 先の尖る鉛筆 (森田 1988:164)

形容詞的なタとテイルの意味については、3.3 節でも述べているように、「主体のある様子を他者と比較して、特徴づけている」ことが挙げられ、これらの両形式は主体の単なる状態やある状態、性質・属性を帯びているとされている (金田一 1955, 寺村 1984, 森田 1988)。森田 (1988) は「タ+名詞／テイル+名詞」形式には、「積もった／積もっている雪」のような自動詞の立つ例と、「赤い靴を履いた／履いている女の子」のような他動詞の立つ例があり、いずれも過去に、ある (瞬間) 動作や作用が行われて、その結果が動作主の姿や状態を変えて一つの属性として現在に及んでいる場合であると述べている。過去になした行為や受けた作用の結果、動作主の現状が新しい状態に置き換わり、現在も存続していると判断されるとき表現であるという (p.165)。

また、連体修飾節における形容詞的なタには動詞的解釈と形容詞的解釈が存在する (例 71) のに対し、形容詞的なテイルには形容詞的解釈のみが存在する (例 72)。

- (71) (ゆでた卵)
a. 太郎がゆでた卵 (再掲、例 42)
b. 昨日ゆでた卵 (同上)
c. 自分の部屋でゆでた卵 (同上)

- d. 大急ぎでゆでた卵 (同上)
- e. テレビを見ながらゆでた卵 (同上)
- (→ a～e は動詞的解釈あり)
- f. テーブルの上にゆでた卵 (ゆで卵) がある。 (作例)
- (→ f は形容詞的解釈あり)

(72) (割れているガラス)

- a. *太郎によって割れているガラス
- b. *昨日割れているガラス
- c. *病院で割れているガラス
- d. *我知らず割れているガラス
- e. *テレビを見ながら割れているガラス
- (→ 動詞的解釈なし)
- f. 割れているガラスはここで交換できません。
- (→ 形容詞的解釈あり) (作例)

これらの形容詞的解釈ではタとテイルは「単なる状態」と「結果の状態」という意味を持っているが、構造的形状動詞に見られる連体修飾節におけるタとテイルの両形式の使用が可能な場合は、タは平生の恒常的状态を表す(例 53)のに対し、テイルはたまたまその折にことさら取られた一時的状態を表す(例 54)とされている(森田 1988)。

3.4. -Ik・-mİş とタ・テイルの対照

3.2 節では、トルコ語には -Ik、-mİş と -(I)II の 3 つの形容詞的分詞が存在すると述べ、それぞれの形式の形態的、統語的、そして意味的な特徴と成立条件について記述し、対照を行った。目標状態分詞とされる -(I)II は目的の解釈というムード的な意味を持っており、単なる状態や結果の状態の意味を表す -Ik と -mİş と意味的な面でも形態的な面でも対応する場合が非常に少ないため、また目的の意味を持っていることで本論文の対象であるタとテイルよりテアルに対応すると考えられるため、本節以降分析から除くことにする。

以下では、トルコ語の形容詞的分詞の -Ik と -mİş の形態的、統語的、そして意味的な特徴と成立条件に再び触れ、タとテイルの形容詞的用法とはどのような点が類似しているか、またどのような点が相違しているかについて考察を行う。

3.4.1. 類似点

トルコ語の形容詞的分詞の動詞との関係について述べると、**-Ik** と **-mİş** には自動詞に接続する場合、非対格動詞と共起できるが、非能格動詞とは共起できないという制限がある。同様に、日本語の形容詞的用法のタとテイルも自動詞に接続する場合、他動性の低い非対格動詞に現れやすいが、他動性の高い非能格動詞には現れにくい（蔡 2013）。

句の分詞である **-mİş** は結果の状態を表す形容詞的な解釈を与えると共に、統語構造において出来事層の **vP** を持っているため、動詞的解釈も与える。従って、出来事中心の様態副詞と共起でき、それはタと共通する点であるが、その場合の **-mİş** とタは動詞的解釈のみを与える。

(73) a. **özensizce çiz-il-miş kaş** (再掲、例 35)

雑に 描く-PASS-PRT 眉毛
 ‘雑に描かれている／描かれた眉毛’

b. 大急ぎでゆでた卵 (再掲、例 42)

それに対して、語彙的分詞の **-Ik** は語根に直接に付くため、出来事中心の様態副詞の付加が不可能になり、単純な形容詞と同様な働きをする。従って、**-Ik** は形容詞的解釈のみを持っており、それはテイルと共通する点である。

(74) a. ***özensizce kes-ik kağıt-lar** (再掲、例 3)

雑に 切る-PRT 紙-PL
 ‘雑に切つてある／切れた紙’

b. *大急ぎで眼鏡をかけている男の人 (作例)

意味の観点から見ると、形容詞的な解釈を与える **-mİş** とタは両方ともある動作の完了の結果、主体の状態・性質を述べる「結果の状態」の意味を表す機能を持っている。

(75) a. **yırt-ıl-mış koli-ler-i bura-ya koy-uyor-uz.**
 破る-PASS-PRT 段ボール-PL-ACC ここ-DAT 置く-PROG-1PL

‘(私たちは) 破れた／破れている段ボールをここに置く’

b. 破れた段ボールを明日ゴミ箱に捨ててください。

上記の例 (75) は、何らかの原因で起こった「破れる」という動作が完了し、その主体である「段ボール」への影響、段ボールの現在の状態、いわゆる結果による状態を表す。

タとテイルは典型的な形容詞的動詞（語彙的形狀動詞）でなければ、連体修飾節ではお互いに置き換えられる特徴を持っている。トルコ語の **-Ik** と **-mİş** も同様の特徴を持っており、例えば上記の例は語彙的狀態分詞の **-Ik** と置き換えられる。この場合の **-Ik**²⁸ はある動作が完了して、その結果の存在による対象の状態・属性を表す (Korkmaz 2014)。同様に、「破れる」という動詞は典型的な形容詞的動詞ではなく、金水 (1994) の分類で言うと構造的形狀動詞であるため、タはテイルに交替でき、この場合のテイルは過去に起こった行為や受けた作用の結果、動作主の現状が新しい状態に置き換わり、現在も存続していると判断される (森田 1988)。

- (75') a. **yırt-ık** **koli-ler-i** **bura-ya** **koy-uyor-uz.**
 破る-PRT 段ボール-PL-ACC ここ-DAT 置く-PROG-1PL
 ‘(私たちは) 破れた／破れている段ボールをここに置く’
 b. 破れている段ボールを明日ゴミ箱に捨ててください。

また、分詞が一時的な状態を表すか、継続的・恒常的な状態を表すかを認定するために Kratzer (2000) の副詞の「still」‘まだ’のテストを使用した Gürer (2014) は、**-mİş** を「hala」‘まだ’と共に起できないことから、継続的・恒常的な状態を表す分詞とし、**-Ik** を「hala」‘まだ’と共に起できることから、一時的な状態を表すとしている。タとテイルのこのような意味に関しては、森田 (1988) はタを平生の恒常的な状態を表す形式とし、テイルをたまたまその折にことさら取られた一時的状態を表すものだとしている。同じテストをタとテイルにもすると、トルコ語の形容詞的分詞と同じ振る舞いをする事が分かる。

- (76) a. Hala **uyuş-ık** **olan** **el**
 まだ 痺れる-PRT である 手
 ‘まだ痺れている手’
 b. *Hala **uyuş-muş** **olan** **el**
 まだ 痺れる-PRT である 手
 ‘まだ痺れた (→痺れている) 手’
 c. まだ痺れている手

²⁸ **-Ik** には動詞の元の意味を失い、単なる形容詞として機能する「単なる状態」と動詞の元の意味を保持し、その動作の結果、主体の状態・属性を述べる「結果の状態」を表す場合がある。前者の例として、例 (38b) の「**bas-ık tavan** ‘低い天井’」、「**as-ık surat-lı kadın** ‘膨れっ面をした女の人’」などが挙げられる。後者は状態変化動詞を含む例 (75') のようである。

d. *まだ痺れた手

このような意味的な観点でも、-miş とタ、-Ik とテイルはお互いに対応していると言える。

3.4.2. 相違点

トルコ語の形容詞的分詞の成立条件は動詞の自他（状態変化動詞、非対格動詞）、語彙的アスペクト（限界的、持続的、動的でなければならないこと）と統語構造による副詞や句・節との両立の可能性（出来事中心の副詞、期間や期間制限を表す表現など）というような要因によって左右される。一方、日本語の形容詞的な意味を表す形式の成立条件は動詞の自他、統語構造による出来事中心の副詞と時間副詞との両立の可能性によって決まるという面でトルコ語の形式と共通しているが、結果の状態を焦点化することによって派生されるかどうか（語彙的形狀動詞と構造的形狀動詞）という語彙概念構造による動詞の種類という要因によって、その成立が左右される面ではトルコ語の形容詞的分詞と相違している。日本語では語彙的形狀動詞の場合、主節においてテイルのみが使われ、それを連体修飾化すると、タのみが使用されるという構造的位罫による交替現象が見られる。それに対して、構造的形狀動詞の場合は、主節のテイルは連体修飾節においてタにもテイルにも成りうる。

(77) a. 語彙的形狀動詞：

この事件は馬鹿げている → 馬鹿げた/*馬鹿げている事件

b. 構造的形狀動詞：

このおもちゃは壊れている → 壊れた/壊れているおもちゃ （再掲、例 67）

一方、トルコ語の形容詞的分詞には構造的位罫による制限がなく、-Ik と -miş は主節においても連体修飾節においても自由に使われる。

(78) a. Cam kir-ik → Kir-ik/ kir-il-miş cam

ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス

‘ガラスが割れている → 割れている/割れたガラス’

b. Cam kir-il-miş → Kir-ik/ kir-il-miş cam

ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス

‘ガラスが割れている → 割れている/割れたガラス’ （再掲、第 1 章の例 1）

表 6 形態的・構造的な特徴

形態的・構造的な特徴		トルコ語の形容詞的分詞		日本語の形容詞的形式		
		-Ik	-mİş	タ	テイル	
動詞との 関係	動詞の自他	他動詞／自動 詞（非対格）	自動詞 （非対格）	他動詞／自動詞（非対格）		
	動詞の種類	達成動詞	達成動詞／ 到達動詞・活 動動詞・状態 動詞 ²⁹	語彙的／ 構造的形状動詞		
補足語／ 付加語と の関係	副詞と の両立	出来事中心		✓		
		期間制限	✓		✓	
構造的 位置	語彙的	主節			✓ ³⁰	
		連体修飾		✓	*	
	構造的	主節	✓	✓		✓
		連体修飾	✓	✓	✓	✓

* 主要素である述語以外に補足語、付加語などの要素が存在する「多要素述語」は述定性が高いため、テイルの容認度が高くなる場合があるが（金 2007）、語彙的形状動詞は主節においてテイルを、連体修飾節においてはタを持つことを典型とする（金水 1994）。

まず、トルコ語と日本語の形容詞的形式の動詞との関係について述べると、両言語の形式は全て非対格動詞に接続する特徴を共有しているが、-Ik、タとテイルは他動詞にも接続しうるのに対し、-mİş のみが他動詞と共起できない。また、それらの形式が付加できる動詞の種類に関しては、トルコ語の形容詞的分詞は達成動詞と共起でき、-mİş は限界性・持続性を表す表現が付加されれば到達・活動・状態動詞と共起できるが、日本語に見られる典型的な形容詞的動詞とそうでない形容詞的動詞（構造的形状動詞）に基づいては弁別されない。

次に、それらの形式の補足語／付加語との関係に関しては、-mİş とタは出来事中心の様態副詞と両立できる点で同様の振る舞いをしており、-Ik とテイルはそれらの様態副詞とは両立できない点で共通している。そして、期間制限を表す表現との両立についても

²⁹ 限界性を表す表現の付加によって -mİş と共起できない活動動詞と状態動詞は -mİş と共起できるようになる。到達動詞は限界的であるが、非持続的／瞬間的であるため、-mİş とは共起できないが、その瞬間的な含意が限界性のあるプロセスに移行するような表現を付加すると、-mİş と共起できるようになり、文法的になる（Slobin and Aksu 1982, Nakipoğlu 2000, Gürer 2014）。

³⁰ 語彙的形状動詞には主節の形を持たない「連体詞」的なものがある（金水 1994）。

-mlş とタ、-lk とテイルは共通しており、-mlş とタはそれらのような表現と共起できないのに対し、-lk とテイルは共起できる。

最後に、構造的位置による形容詞的な形式の使用については、日本語では語彙的形狀動詞の場合、主節においてテイルのみが使われ、それを連体修飾化すると、タのみが使用されるが、構造的形狀動詞の場合は、主節のテイルは連体修飾節においてタにもテイルにも成りうる。一方、トルコ語には典型的な形容詞的動詞とも呼ばれる語彙的形狀動詞が存在せず、構造的形狀動詞と同じ振る舞いをすると考えられる -lk と -mlş は主節においても連体修飾節においても自由に使われる。

両言語の形容詞的な形式の形態的・構造的な特徴は以上のようにまとめられる。次に、意味的な特徴についてまとめていく。

表 7 意味的な特徴

意味的な特徴		トルコ語の形容詞的分詞		日本語の形容詞的形式	
		-lk	-mlş	タ	テイル
状態性	単なる状態	✓		✓	✓
	結果の状態	✓	✓	✓	✓
動作性	動詞的解釈		✓	✓	
	形容詞的解釈	✓	✓	✓	✓

形容詞的用法は主体の状態・属性を表し、その状態という意味は「単なる状態」と「結果の状態」という 2 つの意味に分けられる。トルコ語と日本語の形容詞的な形式は全て「結果の状態」の意味を共有している。それに対して、-lk、タとテイルは「単なる状態」を表す特徴を持っているが、-mlş のみが「単なる状態」の意味を持たない。-mlş は Gürer (2014) の分詞分類においても「結果状態分詞」として他の分詞接辞から区別されている。また、形容詞的な形式は全て形容詞的な解釈を持っているに違いないが、動詞的解釈を持っている場合もあり、それは -mlş とタによる分詞のみ可能である。

最後に、意味的な特徴の一つである後戻りの可能性については、これまでの先行研究においては -lk とテイルは一時的な状態を表しており、-mlş とタは恒常的な状態を表している (森田 1988, Ogihara 2004, Gürer 2014)。しかし、本章では、トルコ語においても日本語においても「後戻りできる状態」と「後戻りできない状態」といった区別は形容詞的形式の意味や性質のみによって左右されるわけではなく、動詞・形容詞的形式・名詞の意味と性質とも関連していることが明らかになった。

次の章では、トルコ人日本語学習者のタとテイルの使用状況を明らかにし、タとテイルが -lk と -mlş にどのように対応づけられるかを検討した上で、本章で考察を行った両

言語の形式の類似点と相違点のうち、どのような特徴が習得に影響を及ぼす要因になっているかについての考察を行う。

第4章

質問紙調査によるタ・テイルの使用状況と -Ik と -mİş との対応関係

4.1. 序

本章では、トルコ人日本語学習者を対象に実施した質問紙調査の結果を元に、学習者のタとテイルの形容詞的用法の使用状況を明らかにし、トルコ語の形容詞的分詞との対応関係を検討しつつ、第3章で記述した言語間の類似点と相違点のうち、どのような要因が習得に影響をもたらすかについて考察を行う。本章は6節から成っている。4.2節では質問紙調査とはどのようなものであるかについて説明し、4.3節では調査の目的を、4.4節では調査方法と作成手順について述べたのちに、4.5節では調査の結果を挙げ、その結果を元に考察を行う。最後に、4.6節で本章をまとめる。

4.2. 質問紙調査とは

質問紙（アンケート、テストとも呼ばれる）調査とは、社会の様々な分野で生じている問題を解決するために、問題に関係している人々あるいは組織に対して同じ質問を行い、質問に対する回答としてデータを収集し、そのデータを解析することによって、問題解決に役立つ情報を引き出していくという一連のプロセスである（辻・有馬 1987:2-3）。辻・有馬 (1987) によると、アンケート調査は問題解決のプロセスとの関係から考えてみると、以下の7つのタイプに分類することができる (p. 6-7)。

① 基礎的な統計資料を得るためのアンケート調査：

人々や組織の基本的活動の実態を詳細に知ることを目的に実施され、その調査結果は、主として、将来の調査や行政施策策定のための基礎資料として利用される。

② 問題発見のためのアンケート調査：

ある特定の社会的活動の実態や社会的意識を明らかにするための調査で、調査結果から問題の所在とその内容が明確にされる。

③ 問題の原因や構造を解明するためのアンケート調査：

データの解析から問題の原因や構造を解明していかうとする調査で、質問する項目をどのように設定し、収集したデータをどのように解析していくかに応じて、さらに次の二つに分けられる。

1. 探索的調査：問題の原因や構造に関すると考えられる活動や意識の諸側面を網羅的に調査し、収集したデータを様々な観点から解析することによって、問題の真の原因や構造を探っていく。
2. 確認的調査：問題の因果関係や構造を事前に予想し、予想した因果関係や構造（これを仮説という）に関連する活動や意識の特定の側面を選択的に調査し、取

集したデータの解析から予想した因果関係や構造が正しいといえるかどうかを確認する。

④ 問題の解決策を探るためのアンケート調査：

一般消費者の購買活動や消費意識の特定の側面に焦点を当てた消費者調査から製品やサービスの開発戦略を探るといのように、問題解決のためにはどのような方策があるのかを探ることを目的とする調査である。

⑤ 問題の解決策を選択するためのアンケート調査：

複数の問題解決策の中からどの解決策を選択すれば良いのかを決定するための調査である。

⑥ 問題の解決策の実行可能性を探るためのアンケート調査：

問題の解決策を実施する段階で、当事者の合意が必要となることがあり、問題の解決策が受け入れられるかどうかを探ることを目的とする調査である。

⑦ 予測のためのアンケート調査：

問題によっては、将来を予測し、あらかじめ対策を講じておくことが必要な場合があり、社会の構造や社会的意識の変化の方向、あるいはこの変化に対する人々や企業の反応を探る調査である。

上記の説明は社会的な調査に関するものであるが、本調査について言えば、上記の分類の③問題の原因や構造を解明するためのアンケート調査の確認的調査が本調査のタイプであると言える。

言語教育の観点から述べると、言語テストには採点方法の面から見た場合は、主に正答が一つしかなく、コンピュータでも採点ができる「客観テスト」と、決まった正答が特になく、採点者が採点基準に基づいて一つ一つ答案を採点する「主観テスト」がある（ヒューマンアカデミー 2014）。客観テストは更に「再認形式」と「再生形式」という2つの種類がある。再認形式は、用意されている選択肢の中から正答を選ぶものであり、再生形式は受験者が自分で解答を書き込むものである。

再認形式のテストには、以下のような形式がある（ヒューマンアカデミー 2014:204-205）。

a) 真偽法：いわゆる〇×法。

例： 問題 CD を聞いて、正しいものには〇、正しくないものには×を書きなさい。
() 1. K先生の趣味は絵を描くことである。

- b) 多肢選択法：複数の選択肢から正答を選ばせる。
 例： 問題 CDを聞いて、正しいものを選びなさい。
 1. K先生の趣味は (a. 絵を描く b. 料理を作る c. 旅行する d. 音楽を聴く) ことである。
- c) 組み合わせ法：複数の語群から設問に合う組み合わせを選ばせる。
 例： 問題 a～cに合う語をア～エから選び、()に書きなさい。
 a. 目を() b. 眉を() c. 耳を()
 ア. 傾ける イ. そむける ウ. 寄せる エ. 曲げる
- d) (再)配列法／並べ替え：順不同の語を正しい語順に並び替えさせる。
 例： 問題 正しい文になるように、並べ替えて書きなさい。
 私／を／が／く／だ／さい／ま／し／た／に／貸／し／て／本／先／生
 ⇒ _____。

また、再生形式のテストには、以下のような形式がある（ヒューマンアカデミー2014:205）。

- a) 単純再生法／穴埋め法：空欄に当てはまる語を書かせる。
 例： 問題 ()に当てはまる言葉を書きなさい。
 1. お名前()何ですか。
- b) 訂正法：誤りを探させる。
 例： 問題 ___の語が間違っていたら直しなさい。
 1. りーさん の お国 は 何 です か。
- c) 完成法：未完の文を完成させる。
 例： 問題 文の続きを書きなさい。
 1. 天気予報によると、_____。
- d) 質問文作成法：答えを与えてそれに合う質問文を答えさせる。
 例： 問題 Bの文が答えになる質問をAに書きなさい。
 1. A: _____。
 B: 5人です。両親と兄と姉がいます。
- e) 質問法：文章や談話（音声）の内容に関する質問を答えさせる。
 例： 問題 (1)の文章を読んで、次の質問に答えなさい。
 1. 母親はなぜ息子にピアノを買わせたのですか。

- f) 変換法：指示を与えて答えを書かせる。
 例： 問題 次の動詞の使役形を書きなさい。
 1. 食べる () 2. 持つ ()
- g) 翻訳法：日本語ないし母語に訳させる。
 例： 問題 Write them in Japanese.
 1. post office () 2. station ()
- h) 綴り法：仮名、漢字の読み書きをさせる。
 例： 問題 漢字で書きなさい。
 1. としょかん () 2. がっこう ()
- i) クローズ法／クローズ・テスト：文章から一定の、または任意の間隔で単語を抜いて空欄にし、そこに当てはまる語を記入させる。
 例： 問題 () に当てはまる言葉を書きなさい。
 東京は日本の () で、日本列島のほぼ中央に () し、政治・経済・文化の () 地となっている。

次に、主観テストとは、書くことや話すことのような決まった正解のない学習者のパフォーマンスに対し、採点者が一定の基準（採点基準）に基づいて評価するテストをいう。能力を総合的に判断できるという利点があるが、採点が採点者の主観に左右される恐れもある。問題作成は客観テストと比較すれば、容易であるが、採点には時間を要する（ヒューマンアカデミー 2014:206）。

上記の調査方法のうち、客観テストが本調査の方法である。調査の方法については、4.4.1 節で詳細に説明する。

4.3. 調査の背景と目的

連体修飾節における形容詞的用法のタとテイルの使用は結果の状態を焦点化するか（構造的形状動詞（壊れる、破れる等））、それを焦点化せず動詞自体がほぼ形容詞的用法専用のものであるか（語彙的形狀動詞（優れる、変な形をする等））によって見分けられる（金水 1994）。それに対してトルコ語では、（日本語の形容詞的なタとテイルに対応する）形容詞的分詞の -Ik と -mİş の使用は動詞の自他と語彙的アスペクト、そして統語構造における vP や VoiceP の有無による動作性を持つかどうかによって分けられ、日本語のような構造的な位置による制限が見られない。

- (1) a. Cam kır-ık → Kır-ık/ kır-il-mİş cam
 ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス
 ‘ガラスが割れている → 割れている／割れたガラス’

- b. Cam kır-ıl-mış → Kır-ık/ kır-ıl-mış cam
 ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス
 ‘ガラスが割れている → 割れている／割れたガラス’ (再掲、第 1 章の例 1)

また、連体修飾のタは動詞的解釈と形容詞的解釈の二つを持ちうるが（ゆでた卵）、テイルは「単なる状態」や「結果の状態」という形容詞的解釈のみを持つ（割れている窓）。この観点ではタと -miş、テイルと -ık は同様な振る舞いをしている。更に、形容詞的なタと -miş は平生の恒常的な状態を表すのに対し、テイルと -ık は一時的な状態を表すとされている（森田 1988, Gürer 2014）が、両言語においても、このような意味の区別は動詞・形容詞の形式・名詞の意味と性質とも大きく関連している。このような両言語間の相違点と類似点はトルコ語を母語とする日本語学習者のタとテイルの習得を困難にしていると考えられる。

更に、調査を実施したチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科において学習の早期段階では日本語の初級の教材である『みんなの日本語初級 I - II』が使用され、連体修飾のテイルの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 I』の第 22 課で初めて、そして主節のテイルの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 II』の第 29 課で導入されるのに対し、タの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 I』においても『みんなの日本語初級 II』においても取り扱われていない。

- (2) a. あの眼鏡をかけている人は山田さんです。
 b. あの着物を着ている人はだれですか? (『みんなの日本語初級 I』第 22 課)
- (3) a. ガラスが割れています。
 b. この袋は破れています。
 c. この自動販売機は壊れています。 (『みんなの日本語初級 II』第 29 課)

上記の例 (2) のテイルはタと置き換えられるにも関わらず、テイルのみが導入されている。そして、例 (3) のテイルの主節における用法が導入されているのに対し、その連体修飾節における使用とタとの交替が導入されていない。また、これらの動詞は金水 (1994) の分類によると、構造的形状動詞であり、語彙的形狀動詞は取り扱われていない。このような教育上の導入の問題も学習者のタとテイルの形容詞的用法の習得に影響をもたらすと考えられる。

そこで、本調査の目的を以下の 3 点とする。

- 1) 学習者の母語に存在しない構造的な位置による形容詞的用法を持つ形式の交替現象の要因がタとテイルの習得に影響をもたらすかどうかを探る。

- 2) タとテイルの使用状況を究明し、正答数の多い形式と少ない形式を明らかにした上で、形容詞的用法を持つ形式の使用に早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化が関わっているかどうかを探る。
- 3) 日本語の形容詞的用法を持つ形式とトルコ語の形容詞的分詞接辞がどのように対応づけられているかを明らかにし、両言語の形式の類似点と相違点はその対応に影響するかどうかを究明する。

4.4. 調査方法と作成

4.4.1. 調査方法

トルコ語母語話者であるチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科の在学学生を対象に実施した調査は質問紙法を使用したものであり、大きく 2 つの部分から成っている。1 つは、構造的位置による使用状況とそれ以外の要因（早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化）による使用状況を検討する文法テストであり、もう 1 つは、両言語の形式の対応関係を検討する自由翻訳テストである。

本調査は客観テストの形式で作成されており、問題グループ I、II、III は再認形式であり、4 つの選択肢からの多肢選択法を使用したものである。そして、問題グループ IV は再生形式である変換法を使ったものである。自由翻訳テストの問題グループ V は再生形式である日本語ないし母語に翻訳させる翻訳法を使ったものである。

本調査で得られたデータの分析には、カイニ乗 (χ^2) 検定を用いた統計分析を行った。それぞれの問題グループの詳細は次節にて説明する。

4.4.2. 調査項目の作成

4.4.1 節でも述べたように、文法テストは 4 つの問題グループから成っている。問題グループの I、II と III は語彙的形状動詞を含む設問から成っており、問題グループの IV は構造的形状動詞を含む設問から成っている。それぞれの設問数については、問題グループ I と II にはそれぞれ 5 問（そのうちの 1 問ずつがダミー問題）、問題グループ III には 8 問（そのうちの 2 問がダミー問題）ある。そして、問題グループ IV には 10 問（そのうちの 1 問がダミー問題）ある。自由翻訳テストである問題グループ V は、「A. 日本語からトルコ語への翻訳（以下は「日-土」略記する）」と「B. トルコ語から日本語への翻訳（以下は「土-日」と略記する）」という 2 つの部門から成り立っている。それぞれの部門には 3 問ずつあり、A. 日-土の部門のそれぞれの問題には 4 つの翻訳対象文がある。そのうちの 1 問は主節の形のタを問う文であり、学習者が形容詞的形式が問われていることに気付かないように配慮したものである。そして、B. 土-日の部門のそれぞれの問題には 6 つの翻訳対象文があるが、そのうちの 2 つの文は過去形の -DI と別の分詞形式の

-(y)En を問う文であり、学習者が -Ik と -mİş のみが問われていることに気付かないように配慮したものである。また、多肢選択式の問題グループ I、II と III では、学習者がタとテイルのみが問われていることに気付かないように、選択肢にタとテイルの他に、ルとテアルを含むものを加えた。

問題グループの I、II と III の語彙的形狀動詞は金水 (1994) が指摘した動詞分類による。具体的には、以下のようである。

表 1 それぞれの問題グループにおいて使用された語彙的形狀動詞

問題グループ	語彙的形狀動詞	設問の動詞	設問番号
I	様態副詞 (擬態語・擬声語を含む) +スル	堂々とする	1
	典型的第四種動詞	優れる	2
	身体部分または形状を表す名詞+ヲ+スル	青い目をする	4
	結果の状態の固定とずれ、熟語的なもの	決まる	5
II	様態副詞 (擬態語・擬声語を含む) +スル	冷え冷えとする	4
	典型的第四種動詞	満ち足りる	5
	身体部分または形状を表す名詞+ヲ+スル	人間の顔をする	2
	結果の状態の固定とずれ、熟語的なもの	太る	3
III	様態副詞 (擬態語・擬声語を含む) +スル	生き生きとする	2
	典型的第四種動詞	込み入る	3
	身体部分または形状を表す名詞+ヲ+スル	星の形をする	1
	結果の状態の固定とずれ、熟語的なもの	似る	5
	連体詞的形狀動詞	困る	6
	漢語+スル	適する	8

また、それぞれの問題グループにおける個々の設問は本調査の目的に沿って形成されている。問題グループ I と II は母語に存在しない構造的位置による形式の交替が形容詞的用法のタとテイルの使用に影響をもたらすかどうかを探ることを目的としている (4.3 節で述べた目的 1)。そのため、問題グループ I は主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題から成っている。それに対して、問題グループ II は連体形のタを文中に入れ、主節形のテイルを問う問題を含んでいる。問題グループ III はタとテイルの使用状況を究明し、正答数の多い形式と少ない形式を明らかにした上で、形容詞的用法を持つ形式の使用に早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化が関連しているかどうかを探ることを目的としている (4.3 節で述べた目的 2)。そのため、構造

的位置による形式の交替を問わないもの、つまり、主節の形を挙げず、連体形のタを問う問題のみから成っている。それぞれの問題グループにおける設問の形式は具体的に次のようである。

問題グループⅠ：主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う

(4) (グループⅠの問題1)

A: スミスさんは背が^{せ たか}高く、^{どうどう}堂々としているね。

B: そうだね！彼の^{かれ むすこ}息子も_____^{ひと}人だそうだ。

a) ^{どうどう}堂々としてある b) ^{どうどう}堂々としている c) ^{どうどう}堂々とした d) ^{どうどう}堂々とする

問題グループⅡ：連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う

(5) (グループⅡの問題2)

その日、人間の顔をした犬を見て、びっくりしました。

→ その犬は人間の顔を_____。

a) している b) する c) してある d) した

問題グループⅢ：主節の形を挙げず、連体形のタを問う

(6) (グループⅢの問題1)

この町は星の^{まち ほし かたち}形を_____^{ゆうめい}クッキーが有名です。

a) してある b) している c) した d) する

次に、問題グループⅣにおいては「壊れる」、「着る」、「禿げる」などのような連体節においてタもテイルも可能な構造的形状動詞が使われ、動詞の辞書形を挙げて、それを適当な形式に変えさせるという変換法が使用されている。このような動詞はタもテイルも取ることが可能であるため、グループⅠ、ⅡとⅢと違い、答えが一つ以上でも良いという指示が与えられた。また、語彙的形狀動詞の問題の形式と同様に、構造的形狀動詞の設問も本調査の目的に沿って形成されている。以下に具体的に示す。

表2 問題グループIVにおいて使用された構造的形状動詞

問題グループ	構造的形状動詞	設問の動詞	設問番号	個々の設問の形式
IV	タ、テイル、テアルを付加し、動詞の結果の状態を焦点化することによって派生されるもの	壊れる	2	主節のテイルを会話
		入る	5	文に挿入し、連体形
		取れる	9	のタ/テイルを問う
		年を取る	3	連体形のタを文中に
		着る	6	入れ、主節のテイル
		眼鏡をかける	8	を問う
		巻く	1	主節の形を挙げず、
		禿げる	7	連体形のタ/テイル
		晴れる	10	を問う

主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題形式：

(7) (グループIVの問題2)

A: お母さん！このおもちゃも壊れているよ。

B: ここに持ってきて！_____おもちゃは全部捨てましょう。(壊れる)

連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題形式：

(8) (グループIVの問題3)

彼のお母さんは年をとった女の人です。

→彼のお母さんは年を_____。(とる)

主節の形を挙げず、連体形のタを問う問題形式：

(9) (グループIVの問題1)

スカーフを首に_____女が座っていた。(巻く)

自由翻訳テストである問題グループVでは、両言語の形式の対応関係を探るため、連体修飾節においてタでしか現れない語彙的形狀動詞は使われず、構造的形狀動詞のみが使用されている。動詞を選択する際に、トルコ語の -Ik が接続できる動詞が -mİş より制限されているため、-Ik と -mİş の両方とも付加できる動詞になることを考慮に入れた。自由翻訳テストで使用された動詞は以下のように表示できる。

表3 問題グループVにおいて使用された構造的形状動詞

問題グループ	部門番号	設問の動詞	設問番号	個々の設問の形式
V	A	穴があく	1	日-土 翻訳
		外れる	2	
		焦げる	3	
	B	割れる	1	土-日 翻訳
		破れる	2	
		たわむ	3	

日-土翻訳：

(10) (グループV-Aの問題1)

^{あな}(穴があく : delinmek) ^{くつした}(靴下 : çorap)

a. いやだー！また^{くつした}靴下に^{あな}穴があいた！

→ Olamaz! Yine çorabım _____.

b. 向こうに座っている人の^{くつした}靴下に^{あな}穴があいている。

→ Karşıda oturan kişinin çorabı _____.

c. ^{あな}穴の^{くつした}あいた靴下を^き気にせず^は履く^{ひと}人が^{すく}少ない。

→ _____ çorapları umursamadan giyen insanlar az değil.

d. ^こあの^{あな}子は^{くつした}穴の^はあいている靴下を履いていた。

→ O çocuk _____.

土-日翻訳：

(11) (グループV-Bの問題1)

(pencere: ^{まど}窓, cam : ガラス, kırılmak : ^わ割れる)

a. Pencerenin camı kırıldı.

→ _____.

b. Pencerenin camı kırılmış.

→ _____.

c. Pencerenin camı kırık.

→ _____.

d. Kırılan camı gazete kağıdına sarıp çöpe attım.

→ _____ ^{しんぶんし つつ す}を新聞紙で包んで捨てた。

e. Kırılmış olan cam dokunmatığı etkiliyorsa, ekran değişimi yapılır.

→ _____ ^{がめん じゆう そうさ ばあい がめん しんびん}画面で自由にタッチ操作ができない場合、画面を新品に
^{こうかん}交換させていただきます。

f. Kırık cam tamir edilemez.

→ _____ ^{しゅうり}は修理することができません。

質問紙調査の構成と設問の作成は具体的には上記のようである。対象者の選定基準と調査の実施期間については次節にて記述する。

4.4.2.1. 調査対象者及び実施期間

日本語学習者の日本語学習期間とレベルによって調査対象者を決めるため、まず本調査を実施したチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科で使用される初級の教材である『みんなの日本語』を調べた。5.3 節でも触れたように、連体修飾のテイルの形容詞的用法は『みんなの日本語初級Ⅰ』の第 22 課で初めて、そして主節のテイルの形容詞的用法は『みんなの日本語初級Ⅱ』の第 29 課で導入されるのに対し、タの形容詞的用法は『みんなの日本語初級Ⅰ』においても『みんなの日本語初級Ⅱ』においても取り扱われていない（例 2-3）。

本調査は 2018 年 3 月中旬に実施されたため、『みんなの日本語初級Ⅱ』を始めたばかり³¹の予備クラスの学習者が形容詞的用法を持つ形式の理解度の面でも日本語の語彙・文法の理解の面でも本調査の対象者として不適切であると判定した。そのため、予備クラスより学習期間が 1 年～4 年ほど長い日本語教育学科の 1 年生から 4 年生までの在学学生を本調査の対象とした。

³¹ 日本語教育学科では前期に『みんなの日本語初級Ⅰ』が使われ、後期には『みんなの日本語初級Ⅱ』が使われる。チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学 2017-2018 年度授業日程計画によると、授業開始は 2017 年 9 月からであり、前期期末試験の終了は 1 月 6 日までである。後期の授業開始は 2018 年 2 月 19 日からであり、調査の実施期間は授業開始期間から一ヶ月後である。

4.4.2.2. 文法と回答の判定

筆者が日本語母語話者ではないため、調査の設問を設ける際に、日本語の文法書やコーパス（少納言）から収集したり、調査の対象である形式に調整したりした文について、文法的な自然性、妥当性と回答の判定をするために、6名の日本語母語話者（そのうち2名は日本語教師であり、4名は社会人）に修正をしてもらった。日本語母語話者の判断に従って、多肢選択テストではタもテイルも可能な文や動詞を削除し、回答を一つに限った動詞や場面を設定した。改善を行ってから、再度の判断をもらい、予備調査の実施に向けて用意した。

4.4.3. 予備調査

4.4.3.1. 調査の目的及び調査対象者

予備調査の目的は本調査を実施する前に調査の設問の形式、回答時間の長さ、語彙・文法の理解などに見られる問題点を探り、それらの問題点を改善することにある。予備調査は6名を対象に2段階に分けて実施した。第1段階の対象者はチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科を卒業し、現在日本の大学に留学しているトルコ人日本語学習者（1名）であり、第2段階の対象者はチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科の在學生（1年生が1名、2年生が1名、3年生が2名、4年生が1名）である。

4.4.3.2. 予備調査の結果からの問題点と改善点

予備調査の第1段階では、質問紙調査は主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題から成っているグループⅠ、連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題を含んでいるグループⅡ、そして主節の形を挙げず、連体形のタを問う問題から成っているグループⅢと日-土・土日自由翻訳テストのグループⅣという4つのグループを含んでいた。これらのグループには語彙的形狀動詞と構造的形狀動詞の両方の動詞の種類が混ざっていた。語彙的形狀動詞の正答は一つしかないのに対し、構造的な形狀動詞はタもテイルも接続することが可能であるため、回答を一つに絞るため、日本語母語話者の提案に従い、それらの動詞を含む問題の選択肢からタないしテイルのどちらか一つを削除した。問題数に関しては、グループⅠとⅡには10問ずつ（そのうちの5問ずつはダミー問題）あり、グループⅢには20問（そのうちの10問はダミー問題）あった。学習者の回答は具体的には以下のようなものである（Dはダミー問題を表し、影が付いたところは分析の対象を表す）。以下の表は、グループⅣの自由翻訳テストの結果を含まない。その理由については、以下で述べる。

表4 第1段階の予備調査の結果（文法テスト）（1名）

問題グループ	設問番号	正答	学習者（留学生）の回答
I	1 (D)	(変な味が) する	○
	2	満ち足りた (生活)	ル
	3 (D)	激しい (雨)	○
	4	優れた (作品)	○
	5 (D)	休みだった	○
	6	馬鹿げた (話)	○
	7 (D)	(熱は) 下がりました	テイル
	8	(青い目を) した (人)	テイル
	9 (D)	死んだ (金魚)	○
	10	堂々とした (人)	テイル
II	1 (D)	(山に) 咲く	○
	2	(着物を) 着ている	○
	3 (D)	(肉を) 食べる	○
	4	(史実に) 基づいている	○
	5 (D)	(おとなしく) 遊んでいた	○
	6	(ずいぶん) 太っている	タ
	7 (D)	(シャツが) 干してある	○
	8	(犬を) 連れている	○
	9 (D)	(荷物を) 持っていた	○
	10	(眼鏡を) かけている	○
III	1	(星の形を) した (クッキー)	テイル
	2 (D)	生きている (エビ)	ル
	3 (D)	禿げている (人)	○
	4	(生き生きと) した (表情)	ル
	5 (D)	(ファッションに) 驚く (外国人)	○
	6	(冷え冷えと) した (空気)	ル
	7	知った (人)	○
	8 (D)	(お父さんに) 似ている (子)	○
	9 (D)	(今晚パーティーに) 行く (人)	○
	10	変わった (車)	テイル
	11	困った (男)	テイル
	12 (D)	(スカーフを首に) 巻いた (女)	○
	13	間違った (考え)	テイル
	14	(私に) 似た (性格)	テイル
	15	湿った (空気)	ル
	16 (D)	洗う (汚いお皿)	○

	17 (D)	(スーパーで) 売っている (チーズ)	○
	18	誤った (解釈)	○
	19 (D)	(チケットを) 買う (人たち)	○
	20 (D)	痩せている (人)	○
正答数 (正答率) (Dを除く)			8 (40%)

上記の結果、絞られた問題点とその改善点は以下のようにまとめられる。

- 一番大きな問題は、問題数が多かったことである。この予備調査は全問題の実施に2時間以上かかったため、部分Ⅰの10問を6問に、部分Ⅱの10問を6問に、部分Ⅲの20問を12問に減らした。部分ⅠとⅡの6問のうち、3問をダミー問題とし、部分Ⅲの12問のうち、6問をダミー問題とした。
- 設問を減らすときに注意をしたのは、設問で使用した動詞の性質であった。述語の「テイル」が連体修飾節において「タ」に変化する動詞の設問、あるいは連体形の「タ」が述語において「テイル」に変化する動詞の設問を設けていたが、「満ち足りる」、「馬鹿げる」などの動詞に加え、「(着物を) 着る」や「(眼鏡を) かける」のような動詞も使用しており、「着物を着た女」を述語にすると、「タ」が「テイル」に変化し、「タ」と「テイル」の形容詞的用法における使用についての問題がないと考えられる。しかし、調査で使用した動詞の間の形容詞性の度合いが異なっていることに気付き(典型的または語彙的かそうでないか)、統一させるために「(着物を) 着る」や「(眼鏡を) かける」のような動詞を使用した設問を取り除き、述語において常に「テイル」を、連体修飾節においては常に「タ」を取る形容詞的動詞を使用した設問を設けた。
- グループⅣの自由翻訳テストでは、連体修飾節の翻訳を問う問題においてその節を文中に挿入せず、連体修飾節とそれに修飾される名詞のみを書いていたため、理解が困難であり、翻訳が不可能であった。連体修飾節そのものを文に含めた形でないと、「タ」や「テイル」がトルコ語の多くの形式のうち、どの形式に対応するかについての判断が難しいことに気付き、翻訳の対象を文の形に書き換えた。また、この部分の設問数も多かったため、A(日-土訳)とB(土-日訳)のそれぞれの部分の10問を3問に減らした。

上記の絞られた問題点に従って改善を行った後に、予備調査の第2段階を実施した。その結果は以下のようなものである(Dはダミー問題を表し、影が付いたところは分析の対象である)。

表5 第2段階の予備調査の結果（文法テスト）（5名）

問題グループ	設問番号	正答	1年生	2年生	3年生①	3年生②	4年生
I	1 (D)	激しい（雨）	○	○	○	○	○
	2	優れた（作品）	○	テイル	テイル	○	テイル
	3 (D)	休みだった	ダソウダ	○	ダソウだ	テイル	○
	4	馬鹿げた（話）	テイル	○	○	○	ル
	5 (D)	（熱は）下がりました	○	○	○	○	○
	6	（青い目を）した（人）	テイル	テイル	ル	テイル	ル
II	1 (D)	（山に）咲く	○	○	○	○	○
	2	（犬を）連れている	タ	○	タ	○	○
	3 (D)	（おとなしく）遊んでいた	○	○	○	○	○
	4	（ずいぶん）太っている	ル	タ	○	○	○
	5 (D)	（シャツが）干してある	○	タ	テイル	○	タ
	6	満ち足りている	○	○	ル	○	ル
III	1	（星の形を）した（クッキー）	テイル	ル	テアル	○	テイル
	2 (D)	生きている（エビ）	○	○	○	○	ル
	3	（生き生きと）した（表情）	ル	ル	ル	○	○
	4 (D)	禿げている（人）	○	テアル	○	○	○
	5	（冷え冷えと）した（空気）	ル	テイル	テイル	○	ル
	6 (D)	（今晚パーティーに）行く（人）	○	○	○	○	○
	7	変わった（車）	テイル	○	テイル	ル	—
	8 (D)	洗う（汚いお皿）	○	タ	タ	○	○
	9	間違った（考え）	テイル	テイル	テイル	○	○
	10 (D)	（チケットを）買う（人たち）	タ	○	○	○	テイル
	11	（私に）似た（性格）	テイル	テイル	テイル	テイル	○
	12 (D)	（スーパーで）売っている（チーズ）	○	○	○	○	○
正答数（正答率）（Dを除く）			2 (16.7%)	4 (33.4%)	2 (16.7%)	9 (75%)	4 (36.4%)

表6 第2段階の予備調査の結果（自由翻訳テスト）（5名）

問題 グループ	設問の 形式	設問 番号	設問で使われた形式	1年生	2年生	3年生 ①	3年生 ②	4年生
V	日-土	1.a	穴があいた。	-DI	-mİş	-mİş	-mİş	-DI
		1.b	穴があいている。	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik
		1.c	穴のあいた（靴下）	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik	-mİş
		1.d	穴のあいている（靴下）	-Ik	-Ik	-Ik	-mİş	-Ik
		2.a	外れた。	-DI	-DI	-DI	-DI	-DI
		2.b	外れている。	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik
		2.c	外れた（ボタン）	-Ik	-Ik	-Ik	-(y)En	-mİş
		2.d	外れている（ボタン）	-Ik	-Ik	-Ik	-mİş	-Ik
		3.a	開いた。	-DI	-DI	-DI	-DI	-DI
		3.b	開いている。	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik
		3.c	開けてある。	-Ik	-Ik	-Ik	-DI	-mİş
		3.d	開いた（ドア）	-Ik	-DIK	-mİş	-Ik	-Ik
		3.e	開いている（ドア）	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik
		3.f	開けてある（ドア）	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik
		土-日	1.a	（割れる） kırıl-dı.	タ	タ	タ	タ
	1.b		kırıl-mış.	テイル ³²	テイル	テアル	テイル	テイル
	1.c		kır-ık.	テイル	テイル	テイル	テイル	テイル
	1.d		kırıl-an (cam ‘ガラス’)	タ	タ	テイル	タ	タ
	1.e		kırıl-mış (cam)	タ	テイル	テアル	テイル	テイル
	1.f		kır-ık (cam)	テイル	タ	テイル	テイル	タ
	2.a		（貼る） as-tı.	タ	タ	タ	タ	タ
	2.b		as-mış.	タ	タ	タ	テイル	テアル
	2.c		as-ılı.	テアル ³³	テイル	テイル	テアル	テイル
	2.d		asıl-an (takvim ‘カレンダー’)	テイル	テイル	テイル	タ	タ
	2.e		asıl-mış (takvim)	テイル	テイル	テアル	タ	テアル
	2.f		as-ılı (takvim)	テイル	テイル	テアル	テアル	テイル
	3.a		（破れる） yırtıl-dı.	タ	タ	タ	タ	タ
	3.b		yırtıl-mış.	テイル	テイル	テアル	テイル	テイル
	3.c		yırt-ık.	テイル	テイル	テイル	テイル	テイル
	3.d	yırtıl-an (kazak ‘セーター’)	テイル	タ	テイル	タ	タ	
3.e	yırtıl-mış (kazak)	テイル	タ	テイル	テイル	テイル		
3.f	yırt-ık (kazak)	テイル	テイル	テアル	テイル	テイル		

³² テイル・テイタを一括してテイルとして取り扱う。

³³ テアル・テアッタを一括してテアルとして取り扱う。

上記の結果、絞られた問題点と改善点は以下のようにまとめられる。

- 学習者の一人（4年生）は文法テストにおいて一つの質問に答えなかったことに気づき、冒頭の説明には「全ての質問に答えなさい」という説明を書き入れた。
- 自由翻訳テストでは、ある設問で他動詞だけではなく、自動詞も使われる場合、指示として括弧の中で自他のいずれもあげていた。トルコ語から日本語への自由翻訳テストでは、トルコ語の「貼る」という動詞を「テイル」や「テアル」を用いた形に対応づけると、その他動詞は自動詞に変わる。それはトルコ語では「貼られる」(as-ılı) という動詞に対応するが、参加者は全員それらのトルコ語の文を日本語に翻訳する際、そのトルコ語の文と同様の意味になる「貼ってある」や「貼っている」を使用せず、「貼られている」という自動詞を使用してしまう。参加者が括弧の中で挙げられた自動詞の影響を受ける可能性があり、自動詞を削除し、他動詞のみを挙げることにした。
- 文法テストでダミーとして選択肢に入れたテアルを自由翻訳テストでは翻訳の対象として入れていたが、テアルはムード的な意味でトルコ語の -(I)II に対応し、付加できる動詞が大変少なく、更に -(I)II が付く動詞に -Ik が付加できない場合が多く、本研究の対象である -Ik の使用の調査を妨げるため、本調査の対象外とし、-(I)II が付加する動詞の「as-」‘貼る’を -Ik も -mİş も付加できる「eğil-」‘たわむ’という動詞に入れ替えた。
- 「開く」を含んだ問題（日-土の問題 3）では一人の学習者（2年生）が分詞接辞の -DIK を使い、「私が開けたドア」として訳している。指示の部分で「開く」の自動詞を挙げても、それは学習者に他動詞の「開ける」として捉えられやすいため、その問題を他動性が低い非対格動詞の「焦げる」を使用した問題に入れ替えた。

また、予備調査の結果から絞った問題点ではないが、文法テストでは語彙的形狀動詞を使用しているが、構造的形狀動詞を使用していないことに気づき、母語に存在する構造的形狀動詞の場合にタとテイルの使用に差が見られるかを探るために、新しい問題グループ（本調査ではグループIV）を形成し、本調査に付け加えた。その際、設問で使った動詞が金水 (1994) が指摘している語彙的形狀動詞の種類（漢語+する、様態副詞+する、身体部分または形状を表す名詞+する、第 5 種動詞、結果の状態の固定とずれ、連体詞的形狀動詞、副詞的・後置詞的形狀動詞）を配慮した形で使用されず、一つのグループに同じ種類の動詞があることに気づき、語彙的形狀動詞の種類に沿って動詞を変えて、回答時間を考慮に入れながら分析に入れる問題数を増やし、ダミー問題を減らした。それらの文の自然性・妥当性を確認するために、再度日本語母語話者 4 名に問題を解い

てもらい、語彙・文法の修正を行ったのちに、本調査を実施した（本調査の構造と形式は表 1～3 に示した通りである）。

4.5. 調査の結果及び考察

4.5.1. 調査の結果

本節では、1 年生から 4 年生までのトルコ人日本語学習者を対象に実施した調査の結果を「語彙的形狀動詞の場合」、「構造的形狀動詞の場合」、「トルコ語の形容詞的分詞との対応の場合」の 3 つの部分に分けてまとめる。

4.5.1.1. 語彙的形狀動詞の場合

本調査において、述語においてはテイルで、連体修飾節においてはタで現れるのが典型である語彙的形狀動詞を使用した問題グループはⅠ、ⅡとⅢである。問題グループⅠとⅡは母語に存在しない構造的位罫による形式の交替が形容詞的用法のタとテイルの使用に影響をもたらすかどうかを探ることを目的としている（4.3 節で述べた目的 1）。そのため、問題グループⅠは主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題から成っている。それに対して、問題グループⅡは連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題を含んでいる。問題グループⅢはタとテイルの使用状況を究明し、回答数の多い形式と少ない形式を明らかにした上で、形容詞的形式の使用に早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化が関わっているかどうかを探ることを目的としている（4.3 節で述べた目的 2）。そのため、構造的位罫による要因を取り除き、主節の形を挙げず、連体形のタを問う問題から成っている。それらの語彙的形狀動詞における問題グループ別のタとテイルの使用状況³⁴は学年別に以下のように挙げられる。

³⁴ 分析にルとテアルを入れず、タとテイルのみの使用による回答数を示す理由は、タとテイルが本研究の対象であり、ルとテアルは学習者がタとテイルが問われていることに気付かないように入れたためである。以下の 2・3・4 年生の場合も同様である。

表 7 1年生の語彙的形狀動詞の構造的位置による正答／誤答別結果 (30名)³⁵

要因		正答数	誤答数 ³⁶	合計
構造的 位置	連体修飾節 (問題グループ I) (正答はタ)	15 (27.2)	74 (61.8)	89
	主節 (問題グループ II) (正答はテイル)	44 (31.8)	60 (72.2)	104
合計		59	134	193

() 内は期待度数

語彙的形狀動詞の場合、調査対象者の1年生に対する主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題 (問題グループ I) と、連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題 (問題グループ II) におけるタとテイルの回答結果は表 7 の通りである。 χ^2 検定を行った結果、正答を得られるかどうかは構造的位置による形式の交替と関係があることが分かった($\chi^2(1)=13.465, p<.01$)。また、いずれの形式を選ぶ割合が高いのかを見るために観測度数と期待度数を見ると、連体修飾節においても主節においてもテイルを選ぶ者が有意に多いことが分かった。

次に、2年生の語彙的形狀動詞の構造的位置に関するタとテイルの使用状況 (表 8) を以下に挙げる。

³⁵ 1年生の語彙的形狀動詞における全ての形式 (タ、テイル、ル、テアル) の使用別回答数、正答数と正答率の詳細は付属資料 2 の表 1 を、タとテイルの使用の割合は付属資料 2 の表 2 を参照されたい。

³⁶ 本調査の問題グループ I と II はタとテイルを使用する際の類推があるかどうかを調べているため、誤答数は連体修飾節においてテイルの回答数を表し、主節においてはタの回答数を表している。以下の学年の場合も同様である。

表 8 2年生の語彙的形狀動詞の構造的位罫に関する正答／誤答別結果 (27名)³⁷

要因		正答数	誤答数	合計
構造的 位罫	連体修飾節 (問題グループⅠ) (正答はタ)	9 (19.3)	73 (62.7)	82
	主節 (問題グループⅡ) (正答はテイル)	33 (22.7)	63 (73.3)	96
合計		42	136	178

() 内は期待度数

主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題 (問題グループⅠ) と、連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題 (問題グループⅡ) におけるタとテイルに関する2年生の回答結果は表8の通りである。χ²検定を行った結果、1年生の場合と同様に、正答を得られるかどうかは構造的位罫による形式の交替と関係があることが分かった (χ²(1)=12.165, p<.01)。また、2年生の場合も、観測度数と期待度数を見ると、連体修飾節においても主節においてもテイルを選ぶ者が有意に多い傾向が見られた。

更に、3年生の語彙的形狀動詞の構造的位罫に関するタとテイルの使用状況 (表9) は以下のようなものである。

³⁷ 2年生の語彙的形狀動詞における全ての形式 (タ、テイル、ル、テアル) の使用別回答数、正答数と正答率の詳細は付属資料2の表3を、タとテイルの使用の割合は付属資料2の表4を参照されたい。

表 9 3年生の語彙的形狀動詞の構造的位罫に関する正答／誤答別結果 (31名)³⁸

要因		正答数	誤答数	合計
構造的 位罫	連体修飾節 (問題グループⅠ) (正答はタ)	26 (24.9)	79 (80.1)	105
	主節 (問題グループⅡ) (正答はテイル)	14 (15.1)	50 (48.9)	64
合計		40	129	169

()内は期待度数

主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題(問題グループⅠ)と、連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題(問題グループⅡ)におけるタとテイルに関する3年生の回答結果は表9の通りである。 χ^2 検定を行った結果、1年生と2年生の場合とは異なり、正答と構造的位罫の間に有意な差がないことが分かった($\chi^2(1)=0.058$, n.s.)。

最後に、4年生の語彙的形狀動詞の構造的位罫に関するタとテイルの使用状況(表10)は以下のようにまとめられる。

³⁸ 3年生の語彙的形狀動詞における全ての形式(タ、テイル、ル、テアル)の使用別回答数、正答数と正答率の詳細は付属資料2の表5を、タとテイルの使用の割合は付属資料2の表6を参照されたい。

表 10 4年生の語彙的形狀動詞の構造的位罫に関する正答／誤答別結果 (29名)³⁹

要因		正答数	誤答数	合計
構造的 位罫	連体修飾節 (問題グループⅠ) (正答はタ)	24 (39.8)	64 (48.2)	88
	主節 (問題グループⅡ) (正答はテイル)	62 (46.2)	40 (55.8)	102
合計		86	104	190

() 内は期待度数

主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う問題(問題グループⅠ)と、連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う問題(問題グループⅡ)におけるタとテイルの4年生の回答結果は表10の通りである。 χ^2 検定を行った結果、1年生と2年生の場合と同様に、正答と構造的位罫による形式の交替の間に有意な差があることが分かった($\chi^2(1)=20.083, p<.01$)。また、4年生の場合も、観測度数と期待度数を見ると、連体修飾節においても主節においてもテイルを選ぶ者が有意に多いことが分かる。

更に、構造的位罫に関する正答に学年の主効果があるかどうかを検討する。1年生から4年生までの学習者の正答結果は以下のようにまとめられる⁴⁰。

表 11 学年別の語彙的形狀動詞の構造的位罫に関する正答結果

構造的位罫	正答	学年				合計
		1年生	2年生	3年生	4年生	
連体修飾節	タ	15 (19.23)	9 (13.69)	26 (13.04)	24 (28.04)	74
主節	テイル	44 (39.77)	33 (28.31)	14 (26.96)	62 (57.96)	153
合計		59	42	40	86	227

() 内は期待度数

³⁹ 4年生の語彙的形狀動詞における全ての形式(タ、テイル、ル、テアル)の使用別回答数、正答数と正答率の詳細は付属資料2の表7を、タとテイルの使用の割合は付属資料2の表8を参照されたい。

⁴⁰ 語彙的形狀動詞の連体修飾節と主節における全ての形式(タ、テイル、ル、テアル)の使用別回答率と正答率は学年別に付属資料2の表9を参照されたい。

表 12 表 11 の残差分析の結果

構造的位置 (正答)	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
連体修飾節 (タ)	-1.37	-1.71 +	4.82 **	-1.18
主節 (テイル)	1.37	1.71 +	-4.82 **	1.18

+ p<.10 ** p<.01

構造的位置による正答に学年の主効果があるかどうかを検討するために行った χ^2 検定の結果、構造的位置によって正答を得られることは学年間で有意に異なっていた ($\chi^2(3)=23.741, p<.01$)。残差分析の結果、2 年生は主節において正答を選ぶ者が多く、3 年生は連体修飾節において正答を選ぶ者が多いことが分かった。

次に、述語の形を挙げず、連体形のタを問う問題 (問題グループⅢ) におけるタとテイルの回答結果は学年別に以下のように示される⁴¹。

表 13 学年別の語彙的形狀動詞のテイルの用法の定着化による正答／誤答別結果⁴²

		1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	合計
テイルの用法の定着化	正答 (タ)	22 (38.1)	19 (26.4)	49 (32.1)	38 (31.4)	128
	誤答 (テイル)	132 (115.9)	88 (80.6)	81 (97.9)	89 (95.6)	390
合計		154	107	130	127	518

() 内は期待度数

表 14 表 13 の残差分析の結果

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
正答 (タ)	-3.58 **	-1.87 +	3.97 **	1.57
誤答 (テイル)	3.58 **	1.87 +	-3.97 **	-1.57

+ p<.10 ** p<.01

⁴¹ 語彙的形狀動詞における全ての形式 (タ、テイル、ル、テアル) の学年別の回答率と正答率は付属資料 2 の表 18 を参照されたい。

⁴² 各学年の語彙的形狀動詞における全ての形式 (タ、テイル、ル、テアル) の使用状況とその正答数・率の詳細は付属資料 2 の表 10-12-14-16 を、各学年のタとテイルの使用の割合は付属資料 2 の表 11-13-15-17 を参照されたい。

タとテイルの使用に「テイルの用法の定着化」が見られるかどうかを検討する問題グループⅢの全学年の回答結果は上記の表 13 と 14 のようである。χ²検定を行った結果、正答を得られるかどうかは学年間で有意に異なっていた (χ²(3)=25.406, p<.01)。残差分析の結果、1 年生と 2 年生は誤答のテイルを選ぶ者が多く、逆に 3 年生は正答のタを選ぶ者が多いことが分かった。

但し、動詞の種類によるタとテイルの回答数の分布を見ると、同様のことは言えない。各グループにおける動詞によって学習者がタとテイルのどちらの形式を選択しているかは付属資料 2 の表 1・3・5・7・10・12・14・16 で具体的に示されているが、誤答数の最も多い動詞を学年別で明示すると、学習期間を問わず、ほぼ同様の種類の動詞の場合に誤答となる傾向が見られた。

表 15 動詞の種類に関する学年別のタとテイルの使用

学年	問題グループ	使用された動詞 (正答)	タとテイルの 回答数	タの回答数	テイルの回答数	正答数が最も少なく、誤答数が最も多い動詞
1 年生 (30 名)	I	堂々とした	25	5	20	青い目をする
		優れた	18	4	14	
		青い目をした	30	3	27	
		決まった	16	3	13	
	II	人間の顔をしている	26	19	7	冷え冷えとする
		太っている	28	9	19	
		冷え冷えとしている	28	27	1	
		満ち足りている	22	5	7	
	III	星の形をした	24	4	20	似る
		生き生きとした	18	5	13	
		込み入った	14	6	8	
		似た	30	1	29	
		困った	29	3	26	
		適した	22	3	19	
	2 年生 (27 名)	I	堂々とした	25	0	25
優れた			18	4	14	
青い目をした			21	0	21	
決まった			18	5	13	
II		人間の顔をしている	24	18	6	冷え冷えとする
		太っている	26	17	9	
		冷え冷えとしている	26	23	3	
		満ち足りている	20	5	15	
III		星の形をした	18	1	17	似る
		生き生きとした	14	5	9	
		込み入った	10	5	5	

		似た	25	0	25	
		困った	27	6	21	
		適した	13	2	11	
3年生 (31名)	I	堂々とした	26	7	19	青い目をする
		優れた	27	8	19	
		青い目をした	26	1	25	
		決まった	26	10	16	
	II	人間の顔をしている	27	16	11	冷え冷えとする
		太っている	30	8	22	
		冷え冷えとしている	26	20	6	
		満ち足りている	23	6	17	
	III	星の形をした	21	10	11	似る
		生き生きとした	13	7	6	
		込み入った	18	12	6	
		似た	29	5	24	
困った		30	10	20		
適した		19	5	14		
4年生 (29名)	I	堂々とした	22	5	17	青い目をする
		優れた	24	7	17	
		青い目をした	20	1	19	
		決まった	22	11	11	
	II	人間の顔をしている	26	10	16	冷え冷えとする
		太っている	28	4	24	
		冷え冷えとしている	28	23	5	
		満ち足りている	20	3	17	
	III	星の形をした	16	7	9	似る
		生き生きとした	15	7	8	
		込み入った	18	11	7	
		似た	29	2	27	
		困った	28	9	19	
		適した	21	2	19	

どのような動詞が最も誤答となるかということを検討してみると、1年生から4年生までの全ての学習者の回答では、「青い目をする」、「冷え冷えとする」、そして「似る」という動詞の場合に正答数が最も少なく、誤答数が最も多い傾向が見られた。2年生の場合は「堂々とする」という動詞は「青い目をする」と同様に、正答数が最も少なく、誤答数が最も多いが、回答数を見ると、「堂々とする」の回答数の方が多く(25名)、「青い目をする」の場合は、学習者はタとテイル以外の形式を選択する傾向があると言える。いずれにせよ、本研究の対象であるタとテイルの使用に関して、それらの動詞において正答数が最も少なく、誤答数が最も多いということに違いはない。

4.5.1.2. 構造的形状動詞の場合

本調査で結果の状態を焦点化することによって派生される構造的形状動詞は問題グループⅣにおいて使用されている。「壊れる」、「着る」、「禿げる」などのようなこの種の動詞は主節においてテイルを、連体修飾節においてはタとテイルの両方とも取るという特徴を持っている。そのため、問題グループⅣではグループⅠ、ⅡとⅢと違い、答えが一つ以上でも良いという指示が与えられ、選択肢を挙げず、動詞の辞書形を挙げて、それを適当な形式に変えさせるという変換法が使用されている。また、語彙的形状動詞の問題の形式と同様に、構造的形状動詞の設問も本調査の目的に沿って形成されている。

それらの構造的形状動詞におけるタとテイル⁴³の回答数は学年別に、以下の表 16-表 19 のように示される⁴⁴。

表 16 1年生の構造的形状動詞の構造的位置に関するタとテイルの回答数 (30名)

		タ	テイル	合計
構造的位置	連体修飾節	47 (37.1)	52 (61.9)	99
	主節	26 (35.9)	70 (60.1)	96
合計		73	122	195

() 内は期待度数

構造的形状動詞が用いられた「述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う」という設問と、「連体形のタを文中に入れ、主節の述語のテイルを問う」という設問におけるタとテイルの1年生の回答結果は表 16 の通りである。 χ^2 検定を行った結果、構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合は構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(1)=7.804, p<.01$)。また、どちらの形式を選ぶ割合が高いのかを見るために観測度数と期待度数を見ると、連体修飾節においてタが使用されることが多く、主節においてはテイルが使用されることが多いことが分かった。

次に、2年生の構造的形状動詞におけるタとテイルの回答数は以下のように挙げられる⁴⁵。

⁴³ 分析にタとテイルのみの使用による回答数を示す理由は、タとテイルが本研究の対象であるからである。以下の2・3・4年生の場合も同様である。

⁴⁴ 1年生の構造的形状動詞における各形式の使用状況は付属資料 2 の表 19 を、タとテイルの使用の割合は付属資料 2 の表 20 を参照されたい。

表 17 2年生の構造的形状動詞の構造的位置に関するタとテイルの回答数 (27名)

		タ	テイル	合計
構造的位置	連体修飾節	45 (37)	51 (59)	96
	主節	24 (32)	59 (51)	83
合計		69	110	179

() 内は期待度数

「述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う」という設問と、「連体形のタを文中に入れ、主節の述語のテイルを問う」という設問におけるタとテイルの2年生の回答結果は表17の通りである。 χ^2 検定を行った結果、構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合は構造的位置によって0.05の有意水準で有意に異なっていた($\chi^2(1)=5.327, p<.05$)。また、どちらの形式を選ぶ割合が高いのかを見るために観測度数と期待度数を見ると、連体修飾節においてタが使用されることが多く、主節においてはテイルが使用されることが多いことが分かった。

更に、3年生の構造的形状動詞におけるタとテイルの回答数は以下のように表示できる⁴⁶。

表 18 3年生の構造的形状動詞の構造的位置に関するタとテイルの回答数 (31名)

		タ	テイル	合計
構造的位置	連体修飾節	44 (32.7)	49 (60.3)	93
	主節	21 (32.3)	71 (59.7)	92
合計		65	120	185

() 内は期待度数

「述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う」という設問と、「連体形のタを文中に入れ、主節の述語のテイルを問う」という設問におけるタとテイルの

⁴⁵ 2年生の構造的形状動詞における各形式の使用状況は付属資料2の表21を、タとテイルの使用の割合は付属資料2の表22を参照されたい。

⁴⁶ 3年生の構造的形状動詞における各形式の使用状況とタとテイルの使用の割合はそれぞれ付属資料2の表23と24を参照されたい。

3年生の回答結果は表18の通りである。 χ^2 検定を行った結果、構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合は構造的位置によって有意に異なっていた($\chi^2(1)=11.116$, $p<.01$)。また、どちらの形式を選ぶ割合が高いのかを見るために観測度数と期待度数を見ると、連体修飾節においてはタが使用されることが多く、主節においてはテイルが使用されることが多いことが分かった。

最後に、4年生の構造的形状動詞におけるタとテイルの回答数は以下のようなものである⁴⁷。

表19 4年生の構造的形状動詞の構造的位置に関するタとテイルの回答数(29名)

		タ	テイル	合計
構造的位置	連体修飾節	28 (27.5)	65 (65.5)	93
	主節	25 (25.5)	61 (60.5)	86
合計		53	126	179

()内は期待度数

「述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う」という設問と、「連体形のタを文中に入れ、主節の述語のテイルを問う」という設問におけるタとテイルの4年生の回答結果は表19の通りである。 χ^2 検定を行った結果、構造的形状動詞におけるタとテイルの使用と構造的位置の間に有意な差が見られなかった($\chi^2(1)=0.000$, n.s.)。

上記の結果からもわかるように、1年生、2年生と3年生には設問の「主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う」という形式においてタを選ぶ傾向が見られ、「連体形のタを文中に入れ、主節の述語のテイルを問う」という形式においてはテイルを使用する傾向が見られた。上記では、構造的形状動詞の場合の形容詞的なタとテイルの設問の2つの形式における使用状況を学年別に分けて示したが、以下では「構造的位置」の水準間(学年間)で学年の主効果を見る。1年生から4年生までの学習者間のタとテイルの回答結果は以下のようにまとめられる⁴⁸。

⁴⁷ 4年生の構造的形状動詞における各形式の使用状況とタとテイルの使用の割合はそれぞれ付属資料2の表25と26を参照されたい。

⁴⁸ 構造的形状動詞における形式の学年別の回答率と正答率は付属資料2の表27を参照されたい。

表 20 学年別の構造的形状動詞の構造的位置に関するタとテイルの回答結果

構造的位置	回答	学年				合計
		1年生	2年生	3年生	4年生	
連体修飾節	タ	47 (43.3)	45 (39.8)	44 (41.1)	28 (39.8)	164
	テイル	52 (57.4)	51 (52.6)	49 (54.4)	65 (52.6)	217
主節	タ	26 (25.3)	24 (23.3)	21 (24.1)	25 (23.3)	96
	テイル	70 (69)	59 (63.3)	71 (65.4)	61 (63.3)	261
合計		195	179	185	179	738

() 内は期待度数

構造的形状動詞における構造的位置による形式の交替によるタとテイルの使用に学年の主効果があるかを検討するために行った χ^2 検定の結果、形式の使用と学年の間に有意な差が見られなかった($\chi^2(9)=10.097$, n.s.)。つまり、1年生から4年生までの全学年において、連体修飾節においても主節においてもタとテイルの回答数には有意な違いがないことが分かった。

次に、述語の形を挙げず、構造的形状動詞の連体形のタ/テイルを問う問題におけるタとテイルの回答結果は学年別に以下のように示される⁴⁹。

表 21 学年別の構造的形状動詞のテイルの用法の定着化による回答結果⁵⁰

	正答	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
テイルの用法の定着化	タ	33 (34.6)	33 (31.2)	36 (35.7)	33 (33.5)	135
	テイル	59 (57.4)	50 (51.8)	59 (59.3)	56 (55.5)	224
合計		92	83	95	89	359

() 内は期待度数

⁴⁹ テイルの用法の定着化の要因の場合の各学年の構造的形状動詞における形式の使用状況は付属資料 2 の表 28・30・32・34 を、そのタとテイルの使用の割合は表 29・31・33・35 を参照されたい。

⁵⁰ テイルの用法の定着化の要因の場合の構造的形状動詞における形式の学年別の回答率と正答率は付属資料 2 の表 36 を参照されたい。

構造的形状動詞のテイルの用法の定着化という要因をはかる設問において、タとテイルの使用に学年の主効果があるかを検討するために行った χ^2 検定の結果、タとテイルの選択と学年の間に有意な差が見られなかった($\chi^2(3)=0.296, n.s.$)。

4.5.1.3. トルコ語の形容詞的分詞との対応について

日本語の形容詞的形式とトルコ語の形容詞的分詞がどのように対応づけられているかを明らかにし、両言語の形式の類似点と相違点はその対応に影響するかどうかを究明する(本調査の目的3)ために行った自由翻訳テスト(グループV)はAとBという2つの部分から成っており、Aは日本語からトルコ語への翻訳を指示し、Bはトルコ語から日本語への翻訳を指示している。それぞれの部分では、タとテイルの述語における使用と、連体修飾節における使用が問われている。以下では、自由翻訳テストの結果を学年別に分けて表示する⁵¹。

表 22 1年生の自由翻訳テストによる -Ik と -mİş とタとテイルとの対応関係 (30名)⁵²

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式の回答数				合計
				-Ik	-mİş	タ	テイル	
A	日-土	述語	タ	0 (6.3)	10 (3.7)	/	/	10
			テイル	72 (54.4)	15 (32.6)	/	/	87
		連体修飾	タ	38 (51.9)	45 (31.1)	/	/	83
			テイル	52 (49.4)	27 (29.6)	/	/	79
合計				162	97	/	/	259
B	土-日	述語	-Ik	/	/	6 (30.9)	81 (56.1)	87
			-mİş	/	/	42	37	79

⁵¹ 学習者が A の日-土翻訳の設問においてタとテイルを -Ik と -mİş の他の形式にも対応づけているものが見られた。同様に、B の土-日翻訳の設問においては -Ik と -mİş をタとテイルの他の形式にも対応づけているものが見られた。しかし、本研究はタとテイル、そして -Ik と -mİş を対象とするため、それらの対象の形式のみを分析に入れる。以下の2・3・4年生の場合も同様である。

⁵² 1年生の全ての対応形式を含む自由翻訳テストの結果は付属資料2の表37を参照されたい。

					(28)	(51)	
		連体修飾	-Ik		25 (30.5)	61 (55.5)	86
			-mİş		47 (30.5)	39 (55.5)	86
合計					120	218	338

() 内は期待度数

表 23 表 22 の残差分析の結果

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式			
				-Ik	-mİş	タ	テイル
A	日-土	述語	タ	-4.17 **	4.17 **		
			テイル	4.78 **	-4.78 **		
		連体修飾	タ	-3.83 **	3.83 **		
			テイル	0.72	-0.72		
B	土-日	述語	-Ik			-6.47 **	6.47 **
			-mİş			3.75 **	-3.75 **
		連体修飾	-Ik			-1.44	1.44
			-mİş			4.3 **	-4.3 **

** p<.01

1 年生に実施した日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応関係を検討する自由翻訳テストの結果は表 22 と 23 のようである。A の日-土翻訳の設問で、日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応について、 χ^2 検定を行った結果、トルコ語の -Ik と -mİş の使用は日本語のタとテイルの構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=42.191, p<.01$)。特にどこで有意な違いがあるのかを検討するために行った残差分析の結果、1 年生は述語のタと連体修飾のタを -mİş に対応づける者が多く、逆に述語のテイルを -Ik に対応づける者が多いことが分かった。同様に、B の土-日翻訳の設問で、 χ^2 検定を行ったところ、日本語のタとテイルの使用はトルコ語の -Ik と -mİş の構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=57.178, p<.01$)。残差分析の結果、1 年生は述語の -mİş と連体修飾の -mİş をタに対応づける者が多く、述語の -Ik をテイルに対応づける者が有意に多いことが分かった。

次に、2 年生は両言語の形式を以下のように対応づけている。

表 24 2年生の自由翻訳テストによる -Ik と -mIş とタとテイルとの対応関係 (27名)⁵³

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式の回答数				合計
				-Ik	-mIş	タ	テイル	
A	日-土	述語	タ	0 (7.7)	12 (4.3)	/	/	12
			テイル	65 (47.7)	9 (26.3)	/	/	74
		連体修飾	タ	33 (47.1)	40 (25.9)	/	/	73
			テイル	49 (44.5)	20 (24.5)	/	/	69
合計				147	81	/	/	228
B	土-日	述語	-Ik	/	/	3 (27.8)	74 (49.2)	77
			-mIş	/	/	42 (27.1)	33 (47.9)	75
		連体修飾	-Ik	/	/	23 (27.5)	53 (48.5)	76
			-mIş	/	/	43 (28.6)	36 (50.4)	79
合計				/	/	111	196	307

() 内は期待度数

表 25 表 24 の残差分析の結果

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式			
				-Ik	-mIş	タ	テイル
A	日-土	述語	タ	-4.8 **	4.8 **	/	/
			テイル	5.11 **	-5.11 **	/	/
		連体修飾	タ	-4.17 **	4.17 **	/	/
			テイル	1.36	-1.36	/	/
B	土-日	述語	-Ik	/	/	-6.81 **	6.81 **
			-mIş	/	/	4.12 **	-4.12 **
		連体修飾	-Ik	/	/	-1.23	1.23
			-mIş	/	/	3.92 **	-3.92 **

** p<.01

⁵³ 2年生の全ての対応形式を含む自由翻訳テストの結果は付属資料 2 の表 38 を参照されたい。

2年生に実施した日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応関係を検討する自由翻訳テストの結果は表24と25のようである。Aの日-土翻訳の設問で、日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応について、 χ^2 検定を行った結果、トルコ語の -Ik と -mİş の使用は日本語のタとテイルの構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=52.535, p<.01$)。特にどこで有意な違いがあるのかを検討するために行った残差分析の結果、2年生は述語のタと連体修飾のタを -mİş に対応づける者が多く、逆に述語のテイルを -Ik に対応づける者が多いことが分かった。同様に、Bの土-日翻訳の設問で、 χ^2 検定を行ったところ、日本語のタとテイルの使用はトルコ語の -Ik と -mİş の構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=60.081, p<.01$)。残差分析の結果、2年生は述語の -mİş と連体修飾の -mİş をタに対応づける者が多く、述語の -Ik をテイルに対応づける者が有意に多いことが分かった。

更に、3年生の結果を分析すると、具体的には以下のように示される。

表26 3年生の自由翻訳テストによる -Ik と -mİş とタとテイルとの対応関係 (31名)⁵⁴

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式の回答数				合計
				-Ik	-mİş	タ	テイル	
A	日-土	述語	タ	1 (9.8)	16 (7.2)	/	/	17
			テイル	63 (46.6)	18 (34.4)	/	/	81
		連体修飾	タ	39 (48.9)	46 (36.1)	/	/	85
			テイル	42 (39.7)	27 (29.3)	/	/	69
合計				145	107	/	/	252
B	土-日	述語	-Ik	/	/	9 (27.4)	74 (55.6)	83
			-mİş	/	/	36 (30.1)	55 (60.9)	91
		連体修飾	-Ik	/	/	33 (28.1)	52 (56.9)	85
			-mİş	/	/	38 (30.4)	54 (61.6)	92

⁵⁴ 3年生の全ての対応形式を含む自由翻訳テストの結果は付属資料2の表39を参照されたい。

合計	/	/	116	235	351
----	---	---	-----	-----	-----

() 内は期待度数

表 27 表 26 の残差分析の結果

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式			
				-Ik	-mİş	タ	テイル
A	日-土	述語	タ	-4.46 **	4.46 **	/	/
			テイル	4.47 **	-4.47 **	/	/
		連体修飾	タ	-2.67 **	2.67 **	/	/
			テイル	0.66	-0.66	/	/
B	土-日	述語	-Ik	/	/	-4.92 **	4.92 **
			-mİş	/	/	1.53	-1.53
		連体修飾	-Ik	/	/	1.3	-1.3
			-mİş	/	/	1.96 +	-1.96 +

+ p<.10 ** p<.01

3年生に実施した日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応関係を検討する自由翻訳テストの結果は表 26 と 27 のようである。A の日-土翻訳の設問で、日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応について、 χ^2 検定を行った結果、トルコ語の -Ik と -mİş の使用は日本語のタとテイルの構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=37.188, p<.01$)。特にどこで有意な違いがあるのかを検討するために行った残差分析の結果、3年生は述語のタと連体修飾のタを -mİş に対応づける者が多く、逆に述語のテイルを -Ik に対応づける者が多いことが分かった。同様に、B の土-日翻訳の設問で、 χ^2 検定を行ったところ、日本語のタとテイルの使用はトルコ語の -Ik と -mİş の構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=24.355, p<.01$)。残差分析の結果、3年生は1年生と2年生とは異なり、述語の -Ik をテイルに対応づける者が多く、連体修飾の -mİş をタに対応づける者が有意に多いことが分かった。

最後に、4年生の分析結果は以下のように表示される。

表 28 4年生の自由翻訳テストによる -Ik と -mIş とタとテイルとの対応関係 (29名)⁵⁵

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式の回答数				合計
				-Ik	-mIş	タ	テイル	
A	日-土	述語	タ	0 (6.5)	12 (5.5)	/	/	12
			テイル	42 (39.6)	31 (33.4)	/	/	73
		連体修飾	タ	38 (42.3)	40 (35.7)	/	/	78
			テイル	49 (40.7)	26 (34.3)	/	/	75
合計				129	109	/	/	238
B	土-日	述語	-Ik	/	/	3 (20.5)	75 (57.5)	78
			-mIş	/	/	25 (20.5)	53 (57.5)	78
		連体修飾	-Ik	/	/	26 (22)	58 (62)	84
			-mIş	/	/	30 (21)	50 (59)	80
合計				/	/	84	236	320

() 内は期待度数

表 29 表 28 の残差分析の結果

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式			
				-Ik	-mIş	タ	テイル
A	日-土	述語	タ	-3.87 **	3.87 **	/	/
			テイル	0.69	-0.69	/	/
		連体修飾	タ	-1.19	1.19	/	/
			テイル	2.34 *	-2.34 *	/	/
B	土-日	述語	-Ik	/	/	-5.17 **	5.17 **
			-mIş	/	/	1.34	-1.34
		連体修飾	-Ik	/	/	1.14	-1.14
			-mIş	/	/	2.64 **	-2.64 **

*p<.05 ** p<.01

⁵⁵ 4年生の全ての対応形式を含む自由翻訳テストの結果は付属資料 2 の表 40 を参照されたい。

4年生に実施した日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応関係を検討する自由翻訳テストの結果は表 28 と 29 のようである。A の日-土翻訳の設問で、日本語とトルコ語の形容詞的形式の対応について、 χ^2 検定を行った結果、トルコ語の **-Ik** と **-mlş** の使用は日本語のタとテイルの構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=19.217, p<.01$)。特にどこで有意な違いがあるのかを検討するために行った残差分析の結果、4年生は述語のタを **-mlş** に対応づける者が多く、連体修飾のテイルを **-Ik** に対応づける者が多いことが分かった ($p<.05$)。同様に、B の土-日翻訳の設問で、 χ^2 検定を行ったところ、日本語のタとテイルの使用はトルコ語の **-Ik** と **-mlş** の構造的位置によって有意に異なっていた ($\chi^2(3)=27.769, p<.01$)。残差分析の結果、4年生は連体修飾の **-mlş** をタに対応づける者が多く、述語の **-Ik** をテイルに対応づける者が有意に多いことが分かった。

自由翻訳テストの結果、学年を問わず、日本語からトルコ語への翻訳の場合とトルコ語から日本語への翻訳の場合のいずれにも両言語の形容詞的形式の選択は構造的位置によって有意に異なっていた ($p<.01$)。日本語からトルコ語への翻訳(部門 A)の場合、1年生、2年生と3年生は述語のタと連体修飾のタを **-mlş** に、述語のテイルを **-Ik** に対応づける者が多いことが見られた。それに対して、4年生は1・2・3年生と同様に述語のタを **-mlş** に対応づける者が多いが、連体修飾のテイルを **-Ik** に対応づける者が他の学年の学習者より有意に多いことが分かった ($p<.05$)。また、トルコ語から日本語への翻訳(部門 B)の場合、学習期間が短い場合(1・2年生)には述語の **-mlş** と連体修飾の **-mlş** はタに、述語の **-Ik** はテイルに対応づけられていることが有意に多かった。同様に、学習期間が長い場合(3・4年生)には連体修飾の **-mlş** はタに、述語の **-Ik** はテイルに対応づけられていることが有意に多かったが、述語の **-mlş** については有意差がうかがえないことは1・2年生とは異なっている。

このような結果は残差分析の結果から得られた「有意に多く使用された」形式に関するものであるが、同じ残差分析の結果から、有意な差が見られなくても、学習者がどの形式を使用する傾向が見られるかということはマイナス(-)のない割合からうかがえる。そこで、形式の使用傾向について言及すると、日本語からトルコ語への翻訳の場合、学習期間を問わず、述語と連体修飾のタは **-mlş** に、両方の構造的位置におけるテイルは **-Ik** に対応づけられるという傾向が見られた。それに対して、トルコ語から日本語への翻訳の場合、学習期間が短い場合には **-mlş** は述語においても連体修飾節においてもタに対応づけられ、**-Ik** は両方の構造的位置においてテイルに対応づけられており、学習期間が長い場合には連体修飾の **-Ik** はタに対応づけられているということのみが異なってい

る点である。具体的には、以下のように表示できる（以下の表は全学年の残差分析の結果から得られたものであり、有意に多い形式には記号を付けている）。

表 30 全学年の自由翻訳テストによる形容詞的形式の対応傾向

部門	設問の形式	構造的位置	形式	学年			
				1年生	2年生	3年生	4年生
A	日-土	述語	タ	-mİş **	-mİş **	-mİş **	-mİş **
			テイル	-Ik **	-Ik **	-Ik **	-Ik
		連体修飾	タ	-mİş **	-mİş **	-mİş **	-mİş
			テイル	-Ik	-Ik	-Ik	-Ik *
B	土-日	述語	-Ik	テイル**	テイル**	テイル**	テイル**
			-mİş	タ**	タ**	タ	タ
		連体修飾	-Ik	テイル	テイル	タ	タ
			-mİş	タ**	タ**	タ+	タ**

+ p<.10 *p<.05 ** p<.01

本調査の結果に基づいた考察は次節にて行う。

4.5.2. 考察

4.5.2.1. タ・テイルの使用状況

語彙的形狀動詞の場合、調査対象者の1年生、2年生と4年生から正答を得られるかどうかは構造的位置による形式の交替と関係があることが分かった。言い換えると、学習者の正答は構造的位置によって有意に ($p<.01$) 異なっていた。このようなことから、母語に存在しない構造的位置による形式の交替が形容詞的用法のタとテイルの使用に影響をもたらしていると考えられる。しかし、本調査で得られた「主節のテイルを会話文に挿入し連体形のタを問う問題グループ I においても、連体形のタを文中に入れ主節のテイルを問う問題グループ II においても、テイルを選ぶ者が多い」という結果は学習者のタとテイルの使用に形式の類推の影響がなく、テイルを使用する傾向、或はタの回避があることを表している。全学年の正答結果を比べると、構造的位置による正答は学年間で有意に異なっていたが、有意差が見られたのは2年生 ($p<.10$) と3年生 ($p<.01$) であり、4年生の回答からは1年生の場合とほぼ同様な結果が得られたため (n.s.)、構造的位置の違いの影響は学習期間の長さとの関係があるとは考えにくい。

問題グループ I と II の設問においてテイルを使用する傾向が見られたが、それは早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化と関わっているかどうかを検討

するために、問題グループⅢの回答結果を見る必要がある。問題グループⅢの設問では、正答を得られるかどうかは学年間で有意に異なっており、1年生と2年生は誤答のテイルを選んだ者が多く、逆に3年生は正答のタを選んだ者が有意に多いことが見られた。4年生の場合は有意な差がないが、正答のタを使用する傾向が見られたため、学習期間が長いほど、正答のタを得られる割合が高くなっており、グループⅠとⅡでは学習者のテイルを使用する傾向がテイルの用法の定着化と関わっていないと考えられる。そこで、グループⅠとⅡでは学習者のテイルを使用する傾向が学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっていると考えられる。その根拠として、動詞の種類ごとのタとテイルの回答数が挙げられる。

動詞の種類ごとのタとテイルの回答数の分布を見ると、学習期間を問わず、「青い目をする」、「冷え冷えとする」、そして「似る」という動詞の場合に正答数が最も少なく、誤答数が最も多い傾向が見られた。「青い目をする」と「似る」の場合、正答がタであり、「冷え冷えとする」の場合は正答がテイルであるが、学習者は前者の場合にテイルを、後者の場合にはタを使用している。それは学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっていると考えられる。例えば、グループⅠにおいて使われた「青い目をする」の場合は、同じ問題グループで一緒に使われたその他の動詞と比較してみると、トルコ語では「堂々としていたがもうそうではない」、「優れていたがもうそうではない」や「決まっていたがもうそうではない」というような一時的、いわゆる後戻りできる状態が解釈されうるが、「青い目をしていたがもうそうではない」と言えないため、タの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っている学習者はタを回避し、状態の意味としてテイルを使用していると考えられる。同様に、「似る」の場合は、調査の設問は「私の息子は私に___性格だ」であり、性格が変わるものとされていないため、その人の特徴・属性を表すとされているテイルを使用する傾向があり、動詞的解釈が優先されるタを回避している。更に、「冷え冷えとする」が使われた設問は「昨日の疲れが抜けていないのと、山の空気が冷え冷えと___からだよ」であり、「昨日」という副詞の付加が過去・完了のタが使用されることに影響を与えていると言え、タの動詞的解釈が優先的であると考えられる。

次に、構造的形状動詞を使用した問題グループⅣの回答結果に関して考察すると、1年生、2年生と3年生の場合は、タとテイルの使用の割合は構造的位置によって有意に異なっているという結果から、構造的位置の違いはタとテイルの使用に影響を及ぼしていると考えられる。そして、それらの学年の学習者は連体修飾節においてタを使用する者が多く、主節においてはテイルを使用する者が多いという傾向が見られ、それには学年の主効果が観察されなかった。言い換えると、構造的形状動詞の場合には、語彙的形狀動詞とは異なり、学習者が両方の構造的位置においてもテイルを使用するという傾向

は見られなかった。連体修飾節におけるタの使用の傾向は、ある動作が完了して、その結果が継続しているという結果の状態やその結果の存在による対象の状態・属性を表す構造的形状動詞というものが学習者の母語に存在しており⁵⁶、それらの動詞をタの動詞的解釈（過去・完了の用法）と結びつけることができることと関わっていると考えられる。構造的形状動詞の場合には両方の構造的な位置においてもテイルを使用する傾向がなかったが、テイルの用法の定着化による設問においても、タとテイルの選択と学年の間に有意な差がなかったという結果は、上記の構造的な位置の違いによる回答結果に関する考察を裏付けていると言える。

4.5.2.2. タ・テイルと -Ik と -mİş との対応関係

自由翻訳テストの結果によると、学年数を問わず、日本語からトルコ語への翻訳の場合とトルコ語から日本語への翻訳の場合のいずれにも両言語の形容詞的形式の選択は構造的な位置によって有意に異なっていることが分かった ($p<.01$)。日本語からトルコ語への翻訳の場合、述語のタと連体修飾のタを -mİş に、両方の構造的な位置におけるテイルを -Ik に対応づける傾向が見られた。それらの対応関係は、タと -mİş は動詞的解釈と形容詞的解釈の両方を持つという点で共通しているということ、テイルと -Ik は状態の意味を持つという点で共通しているということに起因していると考えられる。

それに対して、トルコ語から日本語への翻訳においては、学習期間が短い場合には -mİş は述語においても連体修飾節においてもタに対応づけられているものが多く、-Ik は両方の構造的な位置においてテイルに対応づけられていることが日本語からトルコ語への翻訳の場合と並行している。しかし、学習期間が長い場合には連体修飾の -Ik はタに対応づけられている傾向がある。それは構造的形状動詞の設問（問題グループIV）の結果と同様にテイルの定着化の影響がないことを表し、学習期間が長いほど、タの動詞的解釈と共に、形容詞的解釈も出現することを示している。

4.6. まとめ

本章では、トルコ人日本語学習者（在学生の1年生～4年生）を対象に実施した質問紙調査の結果を元に、学習者のタとテイルの形容詞的用法の使用状況を明らかにし、トルコ語の形容詞的分詞との対応関係を検討する上で、第3章で記述した言語間の類似点と相違点のうち、どのような要因が習得に影響をもたらすかについて考察を行った。

⁵⁶ 第3章の3.4.2節でも述べたように、トルコ語においては、日本語の語彙的形狀動詞に対応する動詞は形容詞的形式を取らず、英語の「with」‘～がある、～を持つ’に該当する -II から作られた語や単純な形容詞で現れるものが多いが、構造的形状動詞に対応する動詞は形容詞的形式の -Ik と -mİş で現れるものが多い。

連体修飾節における形容詞的用法のタとテイルの使用は結果の状態を焦点化するか（構造的形状動詞（壊れる、破れる等））、それを焦点化せず動詞自体がほぼ形容詞的用法専用のものであるか（語彙的形狀動詞（優れる、変な形をする等））によって分けられる（金水 1994）。それに対してトルコ語では、日本語の形容詞的なタとテイルに対応する形容詞的分詞の **-Ik** と **-mlş** の使用は動詞の自他と語彙的アスペクト、そして統語構造における **vP** や **VoiceP** の有無による動作性を持つかどうかによって分けられ、構造的な位置による制限が見られない。また、連体修飾のタは動詞的解釈と形容詞的解釈の二つを持ちうるが（ゆでた卵）、テイルは「単なる状態」や「結果の状態」という形容詞的解釈のみを持つ（割れている窓）。この観点からタと **-mlş**、テイルと **-Ik** は同様の振る舞いをしている。更に、形容詞的なタと **-mlş** は平生の恒常的な状態を表すのに対し、テイルと **-Ik** は一時的な状態を表すとされている（森田 1988, Güreş 2014）が、トルコ語においても日本語においてもそのような意味的な区別は形容詞的形式の意味や性質のみによって左右されるわけではなく、動詞・形容詞的形式・名詞の意味と性質とも関連している。このような両言語間の相違点と類似点はトルコ語を母語とする日本語学習者のタとテイルの習得を困難にしていると考えられる。

更に、調査を実施したチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科において学習の早期段階では日本語の初級の教材である『みんなの日本語初級 I - II』が使用され、連体修飾のテイルの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 I』の第 22 課で初めて、そして主節のテイルの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 II』の第 29 課で導入されるのに対し、タの形容詞的用法は『みんなの日本語初級 I』においても『みんなの日本語初級 II』においても取り扱われていない。また、これらの動詞は金水 (1994) の分類によると、構造的形状動詞であり、語彙的形狀動詞は取り扱われていない。このような教育上の導入の問題も学習者のタとテイルの形容詞的用法の習得に影響をもたらすと考えられる。

そこで、本調査の目的を以下の 3 点にまとめた。

- 1) 学習者の母語に存在しない構造的な位置による形容詞的形式の交替現象の要因がタとテイルの習得に影響をもたらすかどうかを探る。
- 2) タとテイルの使用状況を究明し、正答数の多い形式と少ない形式を明らかにした上で、早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化が形容詞的形式の使用に影響を及ぼすかどうかを探る。
- 3) 日本語の形容詞的形式とトルコ語の形容詞的分詞接辞がどのように対応づけられているかを明らかにし、両言語の形式の類似点と相違点がある対応に影響するかどうかを究明する。

本調査から得られた結果とそれらの結果に関する考察は以下のようにまとめられる。

- 語彙的形狀動詞の場合、調査対象者の1年生、2年生と4年生においては正答を得られるかどうかは構造的位置による形式の交替と関係があることが分かった。言い換えると、学習者の正答は構造的位置によって有意に異なっていた ($p<.01$)。このようなことから、母語に存在しない構造的位置による形式の交替が形容詞的用法のタとテイルの使用に影響をもたらしていると考えられる。
- 語彙的形狀動詞を使用した「主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う」問題グループⅠにおいても、「連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う」問題グループⅡにおいてもテイルを選ぶ者が多いという結果は学習者のタとテイルの使用に形式の類推の影響がなく、テイルを使用する傾向、或はタの回避があることを表している。そして、全学年の正答結果を比べると、構造的位置による正答は学年間で有意に異なっていたが、有意差が見られたのは2年生 ($p<.10$) と3年生 ($p<.01$) であり、4年生の回答からは1年生の場合とほぼ同様な結果が得られたため ($n.s.$)、構造的位置の違いの影響は学習期間の長さとの関係があるとは考えにくい。
- 語彙的形狀動詞の設問におけるテイルを使用する傾向が早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化と関わっているかどうかを検討するために、問題グループⅢの回答結果を見ると、正答を得られるかどうかは学年間で有意に異なっており、1年生と2年生は誤答のテイルを選んだ者が多く、逆に3年生は正答のタを選んだ者が有意に多い傾向が見られた。4年生の場合は有意な差がないが、正答のタを使用する傾向が見られたため、学習期間が長いほど、正答のタを得られる割合が高くなっており、グループⅠとⅡでは学習者のテイルを使用する傾向がテイルの用法の定着化と関わっていないことが分かった。これは、テイルを使用する傾向が学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっていると考えられる。
- 語彙的形狀動詞の設問における動詞の種類によるタとテイルの回答数の分布を見ると、学習期間を問わず、「青い目をする」、「冷え冷えとする」、そして「似る」という動詞の場合に正答数が最も少なく、誤答数が最も多い傾向が見られた。「青い目をする」と「似る」の場合、正答がタであり、「冷え冷えとする」の場合は正答がテイルであるが、学習者は前者の場合にテイルを、後者の場合にはタを使用している。それは一時的（後戻りできる）状態・恒常的（後戻りできない）状態というタが付いた動詞と名詞が表す意味により、学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっていると考えられる。

- 構造的形状動詞の設問では、1年生、2年生と3年生の場合は、タとテイルの使用の割合は構造的位置によって有意に異なっていたという結果から、構造的位置の違いはタとテイルの使用に影響を及ぼしていると考えられる。
- 構造的形状動詞の場合は、1年生、2年生と3年生は連体修飾節においてタを使用する者が多く、主節においてはテイルを使用する者が多い傾向が見られ、それには学年の主効果が観察されなかった。連体修飾節におけるタの使用の傾向は、ある動作が完了して、その結果が継続しているという結果の状態やその結果の存在による対象の状態・属性を表す構造的形状動詞というものが学習者の母語に存在しており、それらの動詞をタの動詞的解釈（過去・完了の用法）と結びつけることができることと関わっていると考えられる。
- 構造的形状動詞の場合には両方の構造的位置においてもテイルを使用する傾向がなかったが、テイルの用法の定着化による設問においても、タとテイルの選択と学年の間に有意な差がないという結果は、結果の状態を表す動詞の種類が学習者の母語に存在し、それらの動詞をタの動詞的解釈（過去・完了の用法）と結びつけることができることと関わっているということを裏付けていると考えられる。
- 自由翻訳テストの結果によると、学年数を問わず、日本語からトルコ語への翻訳の場合とトルコ語から日本語への翻訳の場合のいずれにも両言語の形容詞的形式の選択は構造的位置によって有意に異なっている傾向が見られた ($p < .01$)。日本語からトルコ語への翻訳の場合、述語のタと連体修飾のタを **-mlş** に、両方の構造的位置におけるテイルを **-lk** に対応づける傾向が見られた。それらの対応関係は、タと **-mlş** は動詞的解釈と形容詞的解釈の両方を持つという点で共通しているということ、テイルと **-lk** は状態の意味を持つという点で共通しているということに起因していると考えられる。
- トルコ語から日本語への翻訳においては、学習期間が短い場合には **-mlş** は述語においても連体修飾節においてもタに対応づけられているものが多く、**-lk** は両方の構造的位置においてテイルに対応づけられていることが日本語からトルコ語への翻訳の場合と並行している。しかし、学習期間が長い場合には連体修飾の **-lk** はタに対応づけられている傾向がある。それは構造的形状動詞の設問（問題グループIV）の結果と同様にテイルの定着化の影響がないことを表し、学習期間が長いほど、タの動詞的解釈と共に、形容詞的解釈も出現することを示している。

第5章 結論

5.1. 序

本論文では、日本語とトルコ語の形容詞的形式について、対照的及び応用的な観点から取り扱い、類似点と相違点を明確にしたのちに、質問紙調査を通してそれらの形式の使用状況を明らかにし、対応関係を明示した。本論文は対照的な観点から、1) トルコ語と日本語の形容詞的形式の究明と、2) トルコ語と日本語の形容詞的形式の対照研究を目的とし、応用的な観点からは、3) 形態的・統語的な影響の有無、4) 教育の導入手法の影響の有無、そして5) 両言語の形式の対応関係を明確にすることを目的とする。目的1と2を達成するために、それらの形式に関する先行研究の指摘を見たうえで言語テストを用いた。それらの言語テストには、①出来事中心の様態副詞や期間を表す副詞との両立の可否という補足語／付加語との関係を探る形態的な観点からのテストと、②状態性／動作性と後戻り（一時的か恒常的か）の可能性の有無をはかるという意味的な観点からのテストがある。また、先行研究の指摘に従い、形容詞的形式の動詞の種類との関係と構造的位置による形式の交替に関する種々の観点から考察を行った。これらを通して、日本語の形容詞的な用法のタとテイルがトルコ語の形容詞的分詞と同様の振る舞いをしているかどうか、どのような点が類似し、相違しているかを明らかにした。更に、本論文の目的3、4と5の応用的な検討のために、トルコ語を母語とする日本語学習者（117名）を対象に、質問紙調査（アンケート調査）を実施した。各目的を達成するために調査を5つの問題グループに分けた。まず、目的3を達成するために、問題グループⅠでは主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う設問を設けた。そして、問題グループⅡでは連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う設問を設けた。また、目的4を達成するために、問題グループⅢでは構造的位置による要因を除き、主節の形を挙げず、連体形のタを問う設問を設けた。問題グループⅠ～Ⅲは語彙的（典型的）形状動詞を含み、目的3と4を連体修飾節においてタもテイルも可能な動詞である構造的形状動詞の側面から達成するために、問題グループⅣを設け、そのグループの設問を上記述べた問題グループⅠ～Ⅲと同様の形式で設けた。最後に、目的5を達成するために、問題グループⅤでは日本語からトルコ語、そしてトルコ語から日本語への自由翻訳テストを設けた。

本章の5.2節で本論文の基礎研究である対照研究を通して得られた研究成果をまとめ、5.3節では、応用研究を通して得られた研究成果について述べる。

5.2. 対照研究的側面について

第3章において、トルコ語の形容詞的分詞と日本語の対応形式であるタとテイルについて詳細な説明を行い、両言語の形容詞的分詞形式の対照を行った。それぞれのトルコ語の形容詞的分詞の形態的・統語的特徴や連体修飾節を形成する際に見られる制限について概観したのちに、それらの分詞接辞が接続する動詞と被修飾名詞による意味的特徴について考察を行い、それぞれの分詞接辞の対応関係を明示した。また、トルコ語の形容詞的分詞に対応する日本語のタとテイルの形容詞的用法の形態的・意味的な特徴と動詞を形容詞化する際の成立条件について概観し、両形式の動詞との関係と構造的位置による対応関係について記述した。最後に、それらの形式の特徴に基づき、両言語の形式の対照を行い、類似点と相違点を明確にした。

両言語の形式を対照言語学的な観点から考察すると、以下の結果が得られた。

- 両言語の形式は全て非対格動詞に接続する特徴を共有しているが、**-Ik**、タとテイルは他動詞にも接続しうるのに対し、**-mİş**のみが他動詞と共起できない。
- (1) a. **yirt-ık/ yirt-ıl-mış/ *yirt-mış kazak**
破る-PRT 破る-PASS-PRT 破る-PRT セーター
‘破れた／破れているセーター’
- b. 破れた／破れているセーター (自動詞)
- c. 眼鏡をかけた／かけている男の人 (他動詞)
- それらの形式が付加できる動詞の種類に関しては、トルコ語の形容詞的分詞は達成動詞と共起でき⁵⁷、日本語に見られる典型的な形容詞的動詞とそうでない形容詞的動詞（構造的形状動詞）といった分類に基づいては区別されない。

- (2) a. ***koş-muş atlet** (活動動詞)
走る-PRT アスリート
‘走ったアスリート’
- b. ***bil-miş öğrenci** (状態動詞)
知る-PRT 学生

⁵⁷ 限界性を表す表現の付加によって **-mİş** と共起できない活動動詞と状態動詞は **-mİş** と共起できるようになる。到達動詞は限界的であるが、非持続的／瞬間的であるため、**-mİş** とは共起できないが、その瞬間的な含意が限界性のあるプロセスに移行するような表現を付加すると、**-mİş** と共起できるようになり、文法的になる (cf. 第3章の例 14') (Slobin and Aksu 1982, Nakipoğlu 2000, Gürer 2014)。

‘知った学生’

- c. *var-miş yolcu (到達動詞)

到着する-PRT 旅客

‘到着した旅客’

- d. inşa ed-il-miş ev (達成動詞)

建てる-PASS-PRT 家

‘建てられた家’

(再掲、第3章の例14)

- (3) a. 語彙的形狀動詞：

この事件は馬鹿げている → 馬鹿げた/*馬鹿げている事件⁵⁸

- b. 構造的形狀動詞：

このおもちゃは壊れている → 壊れた/壊れているおもちゃ

(再掲、第3章の例67)

- それらの形式の補足語/付加語との関係に関しては、-miş とタは出来事中心の様態副詞と両立できる点で同様の振る舞いをしており、-Ik とテイルはそれらの様態副詞とは両立できない点で共通している。

- (4) a. *özensizce kes-ik kağıt-lar (再掲、第3章の例3)

雑に 切る-PRT 紙-PL

‘雑に切れている/切れた紙’

- b. özensizce kes-il-miş kağıt-lar (再掲、第3章の例10)

雑に 切る-PASS-PRT 紙-PL

‘雑に切っている紙’

- c. 大急ぎで眼鏡をかけた男の人 (作例)

- d. *大急ぎで眼鏡をかけている男の人 (作例)

- 期間を表す表現との両立についても -miş とタ、-Ik とテイルは共通しており、-miş とタはそれらのような表現と共起できないのに対し、-Ik とテイルは共起できる。

- (5) a. Hala uyuş-uk olan el (再掲、第3章の例76)

まだ 痺れる-PRT である 手

‘まだ痺れている手’

⁵⁸ 語彙的形狀動詞は連体修飾節においていつもタを取るわけではなく、タよりもテイルの方が自然に思われる場合がある (cf. 第3章の例68)。

- b. *Hala uyuş-muş olan el (再掲、第3章の例76)
 まだ痺れる-PRT である 手
- c. *まだ濡れたタオル (再掲、第3章の例43)
- d. まだ濡れているタオル (作例)

- 構造的な位置による形容詞的な形式の使用については、日本語では語彙的形容動詞の場合、主節においてテイルのみが使われ、それを連体修飾化すると、タのみが使用されるが、構造的形容動詞の場合は、主節のテイルは連体修飾節においてタにもテイルにも成りうる。一方、トルコ語には典型的な形容詞的動詞とも呼ばれる語彙的形容動詞が存在せず、構造的形容動詞と同じ振る舞いをすると考えられる **-Ik** と **-miş** は主節においても連体修飾節においても自由に使われる。

(6) a. 語彙的形容動詞：

この事件は馬鹿げている → 馬鹿げた/*馬鹿げている事件

b. 構造的形容動詞：

このおもちゃは壊れている → 壊れた/壊れているおもちゃ

(再掲、第3章の例67)

(7) a. Cam kır-ık → Kır-ık/ kır-ıl-mış cam

ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス

‘ガラスが割れている → 割れている/割れたガラス’

b. Cam kır-ıl-mış → Kır-ık/ kır-ıl-mış cam

ガラス 割る-PRT 割る-PRT 割る-PASS-PRT ガラス

‘ガラスが割れている → 割れている/割れたガラス’ (再掲、第1章の例1)

- トルコ語と日本語の形容詞的な形式は全て「結果の状態」の意味を共有している。
- **-Ik**、**タ**とテイルは「単なる状態」を表す特徴を持っているが、**-miş** のみが「単なる状態」の意味を持たない。
- 後戻りの可能性については、**-Ik** とテイルは一時的な状態を表し、**-miş** と**タ**は恒常的な状態を表すとされている（森田 1988, Gürer 2014）が、両言語においてもそのような区別は形容詞的形式の意味や性質によって左右されるわけではなく、動詞・形容詞的形式・名詞の意味と性質とも大きく関連している。
- 形容詞的な形式は全て形容詞的な解釈を持っているが、動詞的解釈を持っている場合もあり、それは **-miş** と**タ**による分詞のみ可能である。

5.3. 応用研究的側面について

上に述べた目的 3) 形態的・統語的な影響の有無、4) 教育の導入手法の影響の有無、そして 5) 両言語の形式の対応関係を明確にするために、トルコ人日本語学習者（在学生の 1 年生～4 年生）を対象に質問紙調査を実施した。第 4 章においては、その調査の結果を元に、学習者のタとテイルの形容詞的用法の使用状況を明らかにし、トルコ語の形容詞的分詞との対応関係を検討する上で、第 3 章で記述した言語間の類似点と相違点のうち、どのような要因が習得に影響をもたらすかについて考察を行った。

本調査から得られた研究成果は次のようである。

- 語彙的形狀動詞の場合、調査対象者の 1 年生、2 年生と 4 年生においては正答を得られるかどうかは構造的位置による形式の交替と関係があることが分かった。言い換えると、学習者の正答は構造的位置によって有意に異なっていた ($p<.01$)。このようなことから、母語に存在しない構造的位置による形式の交替が形容詞的用法のタとテイルの使用に影響をもたらしていると考えられる。
- 語彙的形狀動詞を使用した「主節のテイルを会話文に挿入し、連体形のタを問う」問題グループ I においても、「連体形のタを文中に入れ、主節のテイルを問う」問題グループ II においてもテイルを選ぶ者が多いという結果は学習者のタとテイルの使用に形式の類推の影響がなく、テイルを使用する傾向、或はタの回避があることを表している。そして、全学年の正答結果を比べると、構造的位置による正答は学年間で有意に異なっていたが、有意差が見られたのは 2 年生 ($p<.10$) と 3 年生 ($p<.01$) であり、4 年生の回答からは 1 年生の場合とほぼ同様な結果が得られたため (n.s.)、構造的位置の違いの影響は学習期間の長さとの関係があるとは考えにくい。
- 語彙的形狀動詞の設問におけるテイルを使用する傾向が早期段階で学習項目として導入されたテイルの用法の定着化と関わっているかどうかを検討するために、問題グループ III の回答結果を見ると、正答を得られるかどうかは学年間で有意に異なっており、1 年生と 2 年生は誤答のテイルを選んだ者が多く、逆に 3 年生は正答のタを選んだ者が有意に多い傾向が見られた。4 年生の場合は有意な差がないが、正答のタを使用する傾向が見られたため、学習期間が長いほど、正答のタを得られる割合が高くなっており、グループ I と II では学習者のテイルを使用する傾向がテイルの用法の定着化と関わっていないことが分かった。これは、テイルを使用する傾向が学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっていると考えられる。
- 語彙的形狀動詞の設問における動詞の種類によるタとテイルの回答数の分布を見ると、学習期間を問わず、「青い目をする」、「冷え冷えとする」、そして「似る」という動詞の場合に正答数が最も少なく、誤答数が最も多い傾向が見られた。「青

い目をする」と「似る」の場合、正答がタであり、「冷え冷えとする」の場合は正答がテイルであるが、学習者は前者の場合にテイルを、後者の場合にはタを使用している。それは一時的（後戻りできる）状態・恒常的（後戻りできない）状態というタが付いた動詞と名詞が表す意味により、学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることと関わっていると考えられる。

- 構造的形状動詞の設問では、1年生、2年生と3年生の場合は、タとテイルの使用の割合は構造的位置によって有意に異なっていたという結果から、構造的位置の違いはタとテイルの使用に影響を及ぼしていると考えられる。
- 構造的形状動詞の場合は、1年生、2年生と3年生は連体修飾節においてタを使用する者が多く、主節においてはテイルを使用する者が多い傾向が見られ、それには学年の主効果が観察されなかった。連体修飾節におけるタの使用の傾向は、ある動作が完了して、その結果が継続しているという結果の状態やその結果の存在による対象の状態・属性を表す構造的形状動詞というものが学習者の母語に存在しており、それらの動詞をタの動詞的解釈（過去・完了の用法）と結びつけることができることと関わっていると考えられる。
- 構造的形状動詞の場合には両方の構造的位置においてもテイルを使用する傾向がなかったが、テイルの用法の定着化による設問においても、タとテイルの選択と学年の間に有意な差がないという結果は、結果の状態を表す動詞の種類が学習者の母語に存在し、それらの動詞をタの動詞的解釈（過去・完了の用法）と結びつけることができることと関わっているということを裏付けていると考えられる。
- 自由翻訳テストの結果によると、学年数を問わず、日本語からトルコ語への翻訳の場合とトルコ語から日本語への翻訳の場合のいずれにも両言語の形容詞的形式の選択は構造的位置によって有意に異なっている傾向が見られた ($p<.01$)。日本語からトルコ語への翻訳の場合、述語のタと連体修飾のタを **-mİş** に、両方の構造的位置におけるテイルを **-İk** に対応づける傾向が見られた。それらの対応関係は、タと **-mİş** は動詞的解釈と形容詞的解釈の両方を持つという点で共通しているということ、テイルと **-İk** は状態の意味を持つという点で共通しているということに起因していると考えられる。
- トルコ語から日本語への翻訳においては、学習期間が短い場合には **-mİş** は述語においても連体修飾節においてもタに対応づけられているものが多く、**-İk** は両方の構造的位置においてテイルに対応づけられていることが日本語からトルコ語への翻訳の場合と並行している。しかし、学習期間が長い場合には連体修飾の **-İk** はタに対応づけられている傾向がある。それは構造的形状動詞の設問（問題グループIV）

の結果と同様にテイルの定着化の影響がないことを表し、学習期間が長いほど、タの動詞的解釈と共に、形容詞的解釈も出現することを示している。

5.4. 本研究の言語教育への貢献

構造的・形態的に数多くの類似点を持っている日本語とトルコ語を学習するそれぞれの言語の学習者がお互いの言語を習得するのは容易であると考えられる。しかし、レベルが上がるにつれて、両言語間の相違点が習得を困難にしているとともに、それらの類似点も混同の原因になってしまう。本研究では、学習者にとって混同されやすい項目の一つであると考えられる形容詞的な形式を研究の対象とした。以下は本研究で明らかになり、言語教育に貢献できると考えられる点である。

① 教材における項目の総括的な取り扱い

学習者がタの形容詞的用法が習得できないことの問題点は、教材ではテイルの形容詞的用法は導入されるのに対し、タの形容詞的用法は取り扱われていないということであると考えられる。それは、本研究において、学習者の日本語のレベルが高い（3年生と4年生）ものの、語彙的形狀動詞の場合に主節と連体修飾節の両位置においてもタの使用の回避、或はテイルを使用する傾向があるという結果から明らかになった。タの形容詞的用法が導入されず、それ以外の用法（過去・完了の用法）のみが導入されることは、学習者がタの用法の混同、またはタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱うという事態を引き起こす。それは更に、学習期間を問わず、「青い目をする」、「冷え冷えとする」、そして「似る」という動詞の場合に正答数が最も少なく、誤答数が最も多いという結果からも分かる。「青い目をする」と「似る」の場合、正答がタであり、「冷え冷えとする」の場合は正答がテイルであるが、学習者は前者の場合にテイルを、後者の場合にはタを使用している。それは一時的（後戻りできる）状態・恒常的（後戻りできない）状態というタが付いた動詞と名詞が表す意味により、学習者がタの動詞的解釈（過去・完了の用法）を優先的に取り扱っていることを証すと考えられる。同様に、学習者が語彙的形狀動詞の場合に連体修飾節においてタを回避するにもかかわらず、構造的形狀動詞の場合には学年を問わず、連体修飾節においてタを使用する傾向が見られたことには、構造的形狀動詞は結果の状態を焦点化するものであるため、タの過去・完了の用法との結び付きの影響があると考えられる。学習者の言語のレベルが上がっても、ある項目が習得できないことは、早期段階で導入される項目が教材において総括的に扱われないことに起因しているため、本研究で得られたこのような成果は導入手法を改善すべきであると認識させることにつながり、効果的な教育を行うことに貢献すると考えられる。

② 動詞の分類と構造的位置による形式の交替に関する意識

早期段階で使われる教材においてテイルの形容詞的用法が扱われているが、常にテイルで使用され、それ自体が形容詞的な意味を表すとされる動詞（金田一 1950 の第四種の動詞、寺村 1984 の分類の C グループの動詞、金水 1994 の語彙的形狀動詞）は使われず、結果の状態を焦点化する、連体修飾節においてタもテイルも可能な動詞（金水 1994 の構造的形狀動詞）のみ使用されている。このような導入手法はタとテイルの形容詞的用法を学習する際に、動詞の種類によって使用を区別すべきであるということ意識させていないと考えられる。それは、本研究において、語彙的形狀動詞の場合、学習者の正答は構造的位置によって有意に異なっていた ($p < .01$) という結果、また上に述べたように、「青い目をする」、「冷え冷えとする」、そして「似る」という動詞の場合に正答数が最も少なく、誤答数が最も多いという結果から明らかになった。

連体修飾節における形容詞的なタとテイルは結果の状態を焦点化するか（構造的形狀動詞（壊れる、破れる等））、それを焦点化せず動詞自体がほぼ形容詞的用法専用のものであるか（語彙的形狀動詞（優れる、変な形をする等））によって見分けられる。語彙的形狀動詞の場合には、主節のテイルは連体修飾化すると、タに交替され、構造的形狀動詞の場合には連体修飾節においてタもテイルも可能である（金水 1994）（本章の例 6）。それに対してトルコ語では、日本語の形容詞的なタとテイルに対応する形容詞的分詞の *-lk* と *-mlş* の使用は動詞の自他と語彙的アスペクト、そして統語構造における *vP* や *VoiceP* の有無による動作性を持つかどうかによって分けられ、構造的位置による制限が見られない（本章の例 7）。従って、日本語に見られる形容詞的形式の動詞の種類による交替現象を導入しなければ、トルコ人日本語学習者がどのような動詞の場合に、どの位置においてタやテイルを使用すべきかについての意識を持つことができず、タやテイルを自由に使用してしまい、誤用しやすい。そのため、本研究で得られたこのような成果は動詞の種類と構造的位置による制限に関する導入手法を改善すべきであるという認識を持たせ、効果的な教育を行うことに貢献すると考えられる。

③ 中間言語の観点からの成果

中間言語とは、Selinker (1972) が提唱した概念であり、第二言語学習者が母語の転移、導入手法からの影響や目標言語における文法規則などの過剰般化などの要因の影響で母語とも目標言語とも異なる独自の言語体系を作るものを指す。本研究で得られた成果を中間言語的な観点から考察すると、以下のようにまとめられる。

- 語彙的形狀動詞の場合、連体修飾節において正答のタではなく、テイルが使用されるのに対し、構造的形狀動詞の場合には、連体修飾節においてタが選択されること

が多いという結果から、単なる状態を表す動詞であればテイルを、ある動作が完了してその結果の状態が焦点化される動詞であればタを使用するという、つまり状態の意味（形容詞的解釈）とテイル、そして過去・完了の意味（動詞的解釈）とタを結び付けるという過剰般化の要因の影響があると考えられる。

- 上記では、単なる状態を表す動詞であればテイルを、ある動作が完了してその結果の状態が焦点化される動詞であればタを使用するということを記述し、語彙的形狀動詞・構造的形狀動詞といった動詞の種類による意味的な特徴と関連していると述べたが、なぜ単なる状態の意味とテイルが結び付けられ、結果の状態の意味とタが結び付けられるかという形式の意味的な特徴について言及すると、トルコ語の **-Ik** は日本語の形容詞的なタとテイルと同様に「単なる状態」と「結果の状態」を表すが、**-mİş** は「結果の状態」のみを表すという点で、学習者は **-Ik** と **-mİş** の間に見られる意味的な違いを日本語のタとテイルに適用し、母語からの転移の要因による中間言語を作っている。
- タの過去・完了の用法が優先的に取り扱われるということは、①でも記述したタの形容詞的用法が導入されていないという導入手法からの影響の要因とも関わっていると考えられる。言い換えると、早期段階において主節と連体修飾節の両位置におけるテイルの形容詞的用法が導入され、単なる状態を表すことが意識させられるため、学習者はテイルを状態の意味と結び付けている。逆に、タの形容詞的用法が取り扱われておらず、その導入は過去・完了の用法に止まっているため、タを動詞的用法と結び付けており、独自の言語体系を作っていると言える。
- **-mİş** は動詞的解釈（過去・完了の用法）と形容詞的用法の両方とも持っており、**-Ik** は形容詞的解釈のみを持っている。日本語からトルコ語への翻訳の場合、学習者が両位置におけるタを **-mİş** に、テイルを **-Ik** に対応づけていることは上記のことを証しており、母語からの転移の要因も中間言語が作られる原因の一つであると考えられる。
- 言語項目の習得がある段階で止まり、固まってしまうという「化石化」と呼ばれる現象が中間言語の特徴として現れるが (Selinker 1972)、トルコ語から日本語への翻訳の場合は、有意な差がないが、学習期間が長い場合に連体修飾節においてのみ **-Ik** がタに対応づけられていることから、中間言語の化石化はないと言える。

④ 従来の研究との比較による成果

これまでの習得研究では、テイルの用法別の習得難易度、特定の用法におけるテイルの使用状況やタとテイルの活動動詞、到達動詞や達成動詞などの動詞の種類別による使用状況を論じるものが多い (Shirai 1995, Shirai&Kurono 1998, 三村 1999, 菅谷 2002, 菅谷

2003, 塩川 2007, Sugaya & Shirai 2007, 陳 2009, 簡・中村 2010, 阿部・李 2015)。それらの研究のうち、タとテイルのいずれも取り扱うものは Shirai (1995)、Shirai&Kuroko (1998)、三村 (1999)、菅谷 (2002)、塩川 (2007)、簡・中村 (2010) であるが、それらの研究はタとテイルの主節における使用のみを考察するものであり、主節と連体修飾節の両位置における使用を論じたのは、塩川 (2007) しか見当たらない。塩川 (2007) は、主節においてテイル、連体修飾節においてタとテイルのいずれも容認できるもの（本論文で述べている金水 (1994) の構造的形状動詞に相当する）を用い、連体修飾節におけるタとテイルの交替現象について学習者の選択傾向を分析していることで本研究に類似した分析を行っているが、動詞の種類との結び付きの観点から論じており、形容詞的なタとテイルの構造的位置の違いによる影響や両位置における正答・誤答、そして語彙的形狀動詞における形容詞的形式の使用との比較に関する考察は行っていない。

形容詞的形式のタとテイルの習得状況は用法別の習得難易度を検討する研究においてしか論じられておらず、少数に止まっている（許 1997-2000, 菅谷 2004）。更に、従来の先行研究には、テルグ語、ベンガル語、ロシア語、ドイツ語、ブルガリア語、中国語、英語、フランス語などのような様々な言語を母語とする日本語学習者を対象としているものが多い。しかし、日本語と数多くの類似点と相違点が見られるトルコ語を母語とする学習者を対象とした研究はなされていないのが現状である。そのため、本研究はこれまで不十分であったタとテイルのいずれの形式の形容詞的用法の主節と連体修飾節の両位置における使用状況を明らかにし、これまでに研究対象とされなかったトルコ語との対照を行っている点で日本語教育の現場に有意義な知見を得られる新たな貢献をすると考えられる。

5.5. 本研究の言語の普遍性・多様性への貢献

形容詞的形式に関する従来の研究は日本語とトルコ語のそれぞれの言語の特性について考える成果を収めている。これまで行われなかった両言語の形容詞的形式に関するこの対照研究は言語の普遍性・多様性について考える観点を豊富にする。具体的には、本研究を通して、下記の点が言語の普遍性・多様性について考える観点到貢献すると考えられる。

- 1) 形容詞的形式は非対格動詞に接続しやすいが、非能格動詞には接続しにくい。従って、形容詞的形式と動詞との両立には語彙的アスペクトが影響する可能性が高い。
- 2) -Ik、タとテイルは他動詞にも接続しうるのに対し、-mİş のみは他動詞と共起できない。このようなことから、形容詞的形式は自動詞に付加できるが、統語構造におい

て VoiceP を持つ形容詞的形式は単純に (VoiceP のないまま) 他動詞とは両立できない傾向がある。

- 3) 動詞的 (時制的) 解釈を持つ形容詞的形式は出来事中心の様態副詞と共起できるが、形容詞的解釈しか持たない形容詞的形式はそのような副詞と生起できない可能性が高い。
- 4) 形容詞的形式が表す一時的 (後戻りできる) 状態や恒常的 (後戻りできない) 状態の意味はその形式のみでは解釈されず、動詞・形容詞的形式・名詞の意味と性質とも大きく関連している可能性が高い。
- 5) 形容詞的用法は主体の状態・属性を表し、その状態という意味は「単なる状態」と「結果の状態」という 2 つの意味に分けられる。形容詞的形式はある動作が完了して、その結果の存在による対象の状態・属性といった「結果の状態」を表す傾向がある。

5.6. 今後の課題

本研究では、日本語のタとテイルの形容詞的用法とそれらの形式に対応するトルコ語の形容詞的分詞の形態的及び意味的な特徴について考察を行い、両言語の形容詞的形式の対照を行った。また、タとテイルの形容詞的用法の使用状況を明らかにし、対照的な観点から明らかになった類似点と相違点のうち、どのような要因が習得に影響を及ぼすかを検討した。更に、早期段階でのテイルの形容詞的用法の導入や構造的形状動詞のみが取り扱われていること、そしてタの形容詞的用法が取り扱われていないといった導入手法の問題が形容詞的なタとテイルの習得に影響をもたらすかどうかについて検討した。本研究で行った質問紙調査の多肢選択テスト以外の問題グループでは、学習者が日本語の場合にテアル、ル、テイタ、テオイタの形式を使用し、トルコ語の場合には分詞接辞の -(y)En と進行形の -(I)yor を使用する傾向が見られた。従って、学習者によって形容詞的な用法のタとテイルの使用だけではなく、連体修飾節において使われる形式の使用や区別も困難であることがわかった。そのため、トルコ語と日本語の他の動詞形式を対照し、使用状況と対応関係を検討しつつ、混同の要因を探る必要がある。

略号一覧

ABL:	奪格	ABLATIVE
ACC:	対格	ACCUSATIVE
AOR:	アオリスト	AORIST
COP:	コピュラ	COPULA
DAT:	与格	DATIVE
EV:	証拠性	EVIDENTIALITY
FUT:	未来形	FUTURE
GEN:	属格	GENITIVE
GER:	動名詞	GERUND
GM:	モーダル標示	GENERALIZING MODALITY
LOC:	位置格	LOCATIVE
NEG:	否定	NEGATIVE
NMZ:	名詞化	NOMINALIZATION
PASS:	受身	PASSIVE
PFT:	完了	PERFECTIVE
PL:	複数	PLURAL
POSS:	所有形	POSSESSIVE
PROG:	進行形	PROGRESSIVE
PROP:	所有	PROPRIETIVE
PRT:	分詞	PARTICIPLE
PST:	過去形	PAST
Q:	疑問	QUESTION PARTICLE/MARKER
SG:	単数	SINGULAR
VRBL:	動詞化派生接辞	VERBALIZATION
1:	一人称	FIRST PERSON
2:	二人称	SECOND PERSON
3:	三人称	THIRD PERSON

参考文献

- 阿部二郎・李洪旭 (2015)「中国人日本語学習者に対する「テイル」の指導法の提案」
『北海道教育大学紀要』66-(1), pp. 31-46.
- 加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 金春女 (2007)「連体修飾節における「～タ」形と「～テイル」形について—述定性
という観点から—」『言葉と文化』8, pp. 157-171.
- 金水敏 (1994)「連体修飾の「～タ」について」田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』pp.
29-65. くろしお出版.
- 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」金田一春彦編 (1976)『日本語動詞のAspect』
pp. 5-26. むぎ書房.
- (1955)「日本語動詞のテンスとAspect」金田一春彦編 (1976)『日本語動詞の
Aspect』pp. 27-61. むぎ書房.
- 簡卉雯・中村渉(2010)「「テイル」の習得過程に関する事例研究—難易度を左右する要
因を中心に—」『国際文化研究』16, pp. 45-56.
- 許夏珮 (1997)「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」
『日本語教育』95, pp. 37-48.
- (2000)「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究—OPI デー
タの分析結果から—」『日本語教育』104, pp. 20-29.
- 工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・Aspect論』ひつじ書房.
- 国立国語研究所 (1985)『現代日本語動詞のAspectとテンス』国立国語研究所報告 82.
秀英出版.
- 蔡梅花 (2013)「連体修飾節の形容詞的用法と他動性」『日本アジア研究』第 10 号,
pp. 23-49.
- 塩川絵里子 (2007)「日本語学習者によるAspect形式「テイル」の習得—文末と連体
修飾節との関係を中心に—」『日本語教育』134, pp. 100-109.
- 菅谷奈津恵 (2002)「日本語のテンス・Aspect習得に関する事例研究—自然習得をし
てきた露・英・仏語母語話者を対象に—」『第二言語としての日本語の自然習得
の可能性と限界』平成 12-13 年度科学研究費研究成果報告書, pp. 102-114.
- (2003)「日本語学習者のAspect習得に関する縦断研究—「動作の継続」と
「結果の状態」のテイルを中心に—」『日本語教育』119, pp. 65-74.
- (2004)「初級日本語学習者のテイルの習得に関する横断研究—マラティ語、テル
グ語母語話者の場合—」『言語文化と日本語教育』27, pp. 170-181.

- 砂川友里子 (1986) 『日本語文法セルフマスターシリーズ 2 する・した・している』くろしお出版.
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス」 『言語の研究』 むぎ書房.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房.
- (2005) 『日本語の文法』 ひつじ書房.
- 田川拓海 (2010) 「連体節における状態のタの統語的分析と否定辞の統語的位置」 『KLS 30: Proceedings of the Thirty-Fourth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society』 pp. 192-202.
- 陳昭心 (2009) 「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」—日本語母語話者と中国語を母語とする学習者の使用傾向を見て—」 『世界の日本語教育』 19, pp. 1-15.
- 辻新六・有馬昌宏 (1987) 『アンケート調査の方法—実践ノウハウとパソコン支援—』朝倉書店.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.
- 林徹 (2013) 『Türkçe Dilbilgisi Elkitabı トルコ語文法ハンドブック』 白水社.
- ヒューマンアカデミー (2014) 『日本語教育能力検定試験完全攻略ガイド第3版』 翔泳社.
- 三村由美 (1999) 「第2言語としての日本語の aspekto の習得—Vendler のヒエラルキーによる分析—」 『ことばと人間』 2, pp. 29-40.
- 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』 創拓社.
- Abe, Yasuaki (1993) Dethematized Subjects and Property Ascription in Japanese. *Proceedings of the 1992 Asian Conference on Language, Information and Computation*, pp. 132-144. Thaeaksa, Seoul.
- Acartürk, Cengiz and Zeyrek, Deniz (2010) Unaccusative/unergative distinction in Turkish: A connectionist approach. *Proceedings of the 8th Workshop on Asian Language Resources*, pp. 111-119. Beijing, China.
- Anagnostopoulou, Elena (2003) Participles and voice. In Alexiadou, A., Rathert, M. & von Stechow, A. (Eds.), *Perfect Explorations*, pp. 1-36. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Banguoğlu, Tahsin (2011) *Türkçenin Grameri [Grammar of Turkish]*. TDK Yayınları, Ankara.
- Bayraktar, Nesrin (2004) *Türkçede Fiilimsiler [Verbal Nouns in Turkish]*. TDK Yayınları, Ankara.
- Benzer, Ahmet (2008) Fiilde Zaman, Görünüş, Kip ve Kiplik [Tense, Aspect, Mood and Modality in Verb]. Marmara Üniversitesi Eğitim Bilimleri Enstitüsü Türkçe Eğitimi ABD, Türkçe Öğretmenliği Bilim Dalı Doktora Tezi, İstanbul.
- Chomsky, Noam (1955) *The Logical Structure of Linguistic Theory*. Published in 1975, Plenum Press, New York.
- (1957) *Syntactic Structures*. The Hague, Mouton.

- Embick, David (2004) On the structure of resultative participles in English. *Linguistic Inquiry* 35 (3), pp. 355-392.
- Ergin, Muharrem (2013) *Türk Dil Bilgisi [Turkish Grammar]*. 4. Baskı, Bayrak Basım Yayın Tanıtım, İstanbul.
- Freidin, Robert (1975) The Analysis of Passives. In *Language* 51:2, pp. 384-405.
- Gencan, Tahir Nejat (1979) *Dilbilgisi [Grammar]*. IV. Baskı, TDK Yayınları: 418, Ankara.
- Göksel, Aslı and Kerslake, Celia (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. Routledge, New York.
- Gürer, Aslı, Gencer, Adem Efe, Güngör, Tunga & Özsoy, A. Sumru (2012) Dil cambazı ve Türkçede geçişsiz eylemler [Language acrobat and intransitive verbs in Turkish]. *26. Ulusal Dilbilim Kurultayı (26th National Linguistics Conference)*, Süleyman Demirel Üniversitesi, Isparta.
- Gürer, Aslı (2014) Adjectival participles in Turkish. *Lingua* 149, pp. 166-187.
- Hirik, Erkan (2016) -(X)k Ekinin Kılını, Kiplik ve Çatı Kategorisindeki İşlevleri [Functions of -(X)k on Aktionsart, Mood and Voice]. *Türkbilig* (32), pp. 97-114.
- Jacobsen, Wesley M. (1982) Vendler's Verb Classes and the Aspectual Character of Japanese. In *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 373-383.
- Karaağaç, Günay (2012) *Türkçenin Dil Bilgisi [Grammar of Turkish]*. Akçağ Yayınları, 1. Basım, Ankara.
- Korkmaz, Zeynep (2014) *Türkiye Türkçesi Grameri: Şekil bilgisi [Turkish Grammar: Morphology]*. 4. Baskı, Türk Dil Kurumu, Ankara.
- Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish: Descriptive Grammars*. Routledge, London.
- Kratzer, Angelika (1994) *The Event Argument and the Semantics of Voice*. University of Massachusetts at Amherst, MS.
- _____ (2000) Building statives. *Proceedings of the Twenty-Sixth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society: General Session and Parasession on Aspect*, pp. 385-399. Berkeley Linguistics Society, CA.
- Kurtoğlu, Özlem (2006) A study on the passivisation errors of Turkish learners of English as a foreign language. Çukurova University, Mersin, MS.
- Levin, Beth and Rappaport, Malka (1986) The Formation of Adjectival Passives. In *Linguistic Inquiry* 17:4, pp. 623-661.
- Lewis, Geoffrey (1967) *Turkish Grammar*. Clarendon Press, Oxford.
- _____ (2000) On the aspectual properties of unaccusatives. *Studies on Turkish and Turkic Languages: Proceedings of the Ninth International Conference on Turkish Linguistics*, pp. 67-74. Harrassowitz Graphics.
- Ogihara, Toshiyuki (2004) Adjectival Relatives. In *Linguistics and Philosophy* 27:5, pp. 557-608.

- Parsons, Terence (1990) *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Salman, Ramazan (2003) Türkçede Sıfat-Fiil (Partisip) Eklerinin Kalıcı İsim Oluşturma İşlevleri [Noun Derivation Functions of Participles in Turkish]. *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1999/I-II, pp.189-223. TDK Yayınları, Ankara.
- Selinker, Larry (1972) Interlanguage. In *IRAL; International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 10:3, pp. 209-231.
- Shirai, Yasuhiro (1995) Tense-aspect marking by L2 learners of Japanese. *D. MacLaughlin&S. McEwen (Eds.): Proceedings of the 19th Annual Boston University Conference on Language Development*, Volume 2, pp. 575-586. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Shirai, Yasuhiro and Kurono, Atsuko (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48, pp. 245-279.
- Slobin, Dan I. and Aksu, Ayhan A. (1982) Tense, Aspect, and Modality in the use of the Turkish Evidential. In Hopper, P.J. (Ed.), *Tense-Aspect: Between Syntax and Pragmatics*. John Benjamins, Amsterdam.
- Smith, Carlota S. (1991) *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, Boston.
- Sugaya, Natsue and Shirai, Yasuhiro (2007) The Acquisition of Progressive and Resultative Meanings of the Imperfective Aspect Marker by L2 Learners of Japanese: Transfer, Universals, or Multiple Factors. In *Studies in Second Language Acquisition* 29, pp. 1-39.
- Van Valin, Robert D. Jr. (1990) Semantic Parameters of Split Intransitivity. In *Language* 66:2, pp. 221-260.
- Vendler, Zeno (1957) Verbs and Times. In *The Philosophical Review* 66:2, pp. 143-160.
- Wasow, Thomas (1977) Transformations and the Lexicon. In Culicover, P., Wasow, T., Akmajian, A. (Eds.), *Formal Syntax*. Academic Press, New York, pp. 327-360.

参考教科書

- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級 I 本冊』 スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (2006) 『みんなの日本語初級 II 本冊』 スリーエーネットワーク.

謝辞

本論文を書き上げるにあたり、多くの方々からご指導とご協力をいただきました。

指導教員である栗林裕教授には、来日した頃から現在に至るまで、終始熱心なご指導をいただき、留学生活の面でも大変お世話になりました。言語学や研究の方法に関して貴重な知識を教えていただき、本論文を完成させるまで煩をいとわずに何度も相談させていただきました。終始ご指導とご助言をいただきまして心より深く感謝を申し上げます。

博士後期課程の2年次まで副指導教員として大変お世話になった金子真准教授に本研究の進み方に関して細部にわたるご指導をいただきました。特に、アカデミックな世界への最初の歩みである学会発表と学術雑誌への論文を作成する際に貴重な知識と親身のご指導、ご助言をいただきまして、心より感謝を申し上げます。

副指導教員である片桐真澄准教授には、言語学研究のあり方や考察の方法など、細部にわたるご指導をいただきました。特に、報告会での親身のご指導とご助言をいただいたことに心より感謝を申し上げます。

博士後期課程の3年次から副指導教員として大変お世話になった宮崎和人教授には、日本語の研究及び先行研究に関して貴重な知識を教えていただきました。特に来日してから現在に至るまでテンス・アスペクト・モダリティーに深い関心を持つことができ、心より感謝を申し上げます。

チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学教育学部日本語教育学科学科長のアイドゥン・オズベッキ准教授に言語学のあり方や言語研究の方法に関して貴重な知識を教えていただきました。特に、博士後期課程で学会発表と学術雑誌への論文を投稿すること、またこれからの進路指導に関して優しい言葉で私を励ましていただきました。更に、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学で授業の時間をに使わせていただき、本論文の調査を実施する機会を与えていただいたアイドゥン・オズベッキ准教授をはじめ、トルガ・オズシェン准教授とヌーリ・ビルギン・イリム先生に心より感謝を申し上げます。

本論文の日本語母語チェックをしていただいた新田志保先生に、丁寧な添削と例文の妥当性と研究の進行に関する多くのアドバイスをいただきまして、心より感謝を申し上げます。日本語や研究だけではなく、精神上的の支えとご助言をいただき、優しい言葉で私を励ましてください、感謝の気持ちでいっぱいです。

学部生の頃、卒業論文のご指導をいただいたダリヤ・アックシュ・坂上先生に日本での留学に関していつも暖かく応援していただき、博士後期課程への進学と博士論文の終了について優しい言葉で私を励ましていただきました。心より感謝を申し上げます。

来日した頃から現在に至るまで、日本での留學生活、勉強や研究に関して困った時に手を貸してくれた社会文化科学研究科博士後期課程卒業生のセバル・ディリック氏と日本語教師の宇野寛子氏、また日本での留學生活で悩みがあった時に精神上的の支えになってくれた社会文化科学研究科の研究生のギョクハン・オズカン氏に心よりお礼を申し上げます。

最後に、本論文を完成させるにあたり、私の生活面や健康面に気をかけ、日本での留學生活をいつも暖かく応援してくれた両親と、留學生活を援助して下さった日本政府文部科学省に心より感謝を申し上げます。

付属资料 1

本研究のために実施した質問紙調査の用紙

Bu anket araştırması Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi Japon Dili Eğitimi Anabilim Dalı'nda öğrenim görmüş olan mezunlara ve hala öğrenim görmekte olan öğrencilere yönelik bir çalışmadır. Bu araştırmadan elde edilecek veriler tümüyle bilimsel amaçlarla kullanılacak olup, bunun dışında başka bir amaç için kullanılmayacaktır.

Katılımınız için çok teşekkür ederim.

Okayama Üniversitesi
Sosyal ve Beşeri Bilimler Enstitüsü
Dilbilim Bölümü Doktora Öğrencisi
Esra KIRA
esrakira@gmail.com

Öncelikle aşağıda istenen bilgileri yazınız/işaretleyiniz.

1) Öğrenim durumunuz:

<input type="checkbox"/> Üniversite öğrencisiyim. (_____ sınıf)
<input type="checkbox"/> Üniversite mezunuyum ve çalışmıyorum. (_____ yılında mezun oldum.) Mezun olduktan sonra hiç Japonca'yı kullandığınız bir işte çalıştınız mı? Evet (Süre: _____) Hayır
<input type="checkbox"/> Üniversite mezunuyum ve çalışıyorum. (_____ yılında mezun oldum.) Japonca'yı kullandığınız bir işte mi çalışıyorsunuz? Evet Hayır (Hayır cevabını verenler yanıtlayacaktır) Mezun olduktan sonra Japonca'yı kullandığınız bir işte çalıştınız mı? Evet (Süre: _____) Hayır
<input type="checkbox"/> Araştırma öğrencisiyim. (Süre: _____) (Ülke: _____) Japonca'yı kullandığınız bir alanda mı okuyorsunuz? Evet Hayır
<input type="checkbox"/> Yüksek lisans öğrencisiyim/mezunuyum. (Öğrenci iseniz) _____ sınıf öğrencisiyim. (Ülke: _____) Japonca'yı kullandığınız bir alanda mı okuyorsunuz? Evet Hayır (Mezun iseniz) Yüksek lisansınızı hangi ülkede tamamladınız? _____ Japonca'yı kullandığınız bir alandan mı mezunsunuz? Evet Hayır
<input type="checkbox"/> Doktora öğrencisiyim/mezunuyum. (Öğrenci iseniz) _____ sınıf öğrencisiyim. (Ülke: _____) Japonca'yı kullandığınız bir alanda mı okuyorsunuz? Evet Hayır (Mezun iseniz) Doktoranızı hangi ülkede tamamladınız? _____ Japonca'yı kullandığınız bir alandan mı mezunsunuz? Evet Hayır

- 2) Toplamda ne kadar süre Japonca eğitimi aldınız? _____
- 3) Hiç Japonya'da bulundunuz mu? Evet (Süre: _____) Hayır
(Evet cevabını verenler yanıtlayacaktır) Hangi amaçla Japonya'da bulundunuz? _____ (Japonca karşılığını yazabilirsiniz)
- 4) Japonca yeterlilik sınavında başarılı oldunuz mu? Evet Hayır
(Evet cevabını verenler yanıtlayacaktır) Sınavın kaçınıcı seviyesinde başarılı oldunuz?
(Başarılı olduğunuz en üst seviyeyi işaretleyiniz)
- 2009'a kadar olan sınavda başarılı olanlar için: N1 N2 N3 N4
2010'dan itibaren olan sınavda başarılı olanlar için: N1 N2 N3 N4 N5

I. 正しいと思ったものを一つ選びなさい。 全ての質問に答えなさい。

Doğru olduğunu düşündüğünüz tek şıkkı işaretleyiniz. Lütfen cevaplanmayan bir soru bırakmayınız.

1. A: スミスさんは背が^{せ たか}高く^{どうどう}て、堂々として^{どうどう}いるね。
B: そうだね! 彼の息子も^{かれ むすこ} _____ ^{ひと}人だそうだ。
a) 堂々として^{どうどう}ある b) 堂々として^{どうどう}いる c) 堂々とし^{どうどう}た d) 堂々とし^{どうどう}する
*堂々とする : heybetli olmak
2. A: 教育^{きょういく}の面^{めん}でも、この作品^{さくひん}は優^{すぐ}れているよね。
B: そうだね! これは日本^{にほん}で一番^{いちばん} _____ ^{さくひん}作品^しのひとつとして知^しられている。
a) 優^{すぐ}れてある b) 優^{すぐ}れた c) 優^{すぐ}れる d) 優^{すぐ}れている
*面でも : açısından da 優れる : üstün olmak, gölgede bırakmak
3. A: 日曜日^{にちようび}だから休^{やす}みかもしれないわね。
B: そうだね。(店^{みせ}の前^{まえ}まで来^きて) あ、やっぱり _____。
a) 休^{やす}んでいる b) 休^{やす}みだそうだ c) 休^{やす}んだ d) 休^{やす}みだった
4. A: その女^{おんな}の子^こは背^せが^{たか}高く^{あおめ}て、青^{あお}い目^めをして^{あおめ}いる。
B: そうなの? 日本^{にほんじん}人で、青^{あお}い目^めを _____ ^{ひと}人^{めづら}は珍^{めづら}しいね。
a) する b) した c) してある d) している

5. A: (昼ご飯を食べに行く前に) トムさんも一緒に食べるかな?

B: 彼が行く店は決まっているけど...

A: あ、いつも_____店に行くんだ。美味しかったら、私たちも行こうよ。

a) 決まってある b) 決まっている c) 決まった d) 決まる

*決まる : belirlenmek, belirli olmak

II. 以下の下線部の連体修飾節を平叙文に変えると、正しいと思ったものを一つ選びなさい。全ての質問に答えなさい。

Aşağıda altı çizili olan yan cümleler düz cümleye çevrilmiştir. Doğru olduğunu düşündüğünüz **tek şikkı** işaretleyiniz. Lütfen cevaplanmayan bir soru bırakmayınız.

1. 高い山に咲く花のことを高山植物といいます。

→ 高山植物は高い山に_____。

a) 咲いてある b) 咲いた c) 咲く d) 咲いていた

*咲く : (çiçek) açmak

2. その日、人間の顔をした犬を見て、びっくりしました。

→ その犬は人間の顔を_____。

a) している b) する c) してある d) した

3. 食料が豊富で、安いので、ずいぶん太った人が多い。

→ その人はずいぶん_____ね。

a) 太らしてある b) 太っている c) 太る d) 太った

*豊富 : çok, bol ずいぶん : oldukça, baya, çok

4. 冷え冷えとした空気が頬をなでた。

→ 昨日の疲れが抜けていないのと、山の空気が冷え冷えと_____からだよ。

a) する b) している c) してある d) した

*冷え冷えとする : soğuk olmak 頬 : yanak なでる : okşamak 疲れが抜ける : yorgunluğun geçmesi

5. あの二人はまずしいけれど満ち足りた生活をおくっているようだね。

→ あの二人の生活は、まずしいけれど_____ようだね。

- a) 満ち足りてある b) 満ち足りている c) 満ち足りた d) 満ち足りる

*まずしい : fakir 満ち足りる : tatmin edici olmak, yeterli olmak

III. 正しいと思ったものを一つ選びなさい。全ての質問に答えなさい。

Doğru olduğunu düşündüğünüz tek şıkı işaretleyiniz. Lütfen cevaplanmayan bir soru bırakmayınız.

1. この町は星の形を_____クッキーが有名です。

- a) してある b) している c) した d) する

2. その子は生き生きと_____表情をしていますね。

- a) した b) する c) してある d) している

*生き生きとする : canlı olmak 表情 : yüz ifadesi

3. ちょっと_____話がある。

- a) 込み入った b) 込み入っている c) 込み入ってある d) 込み入る

*込み入る : karmaşık olmak

4. 今晚パーティーに_____人は2300円を払ってください。

- a) 行ってある b) 行っている c) 行く d) 行った

5. 私の息子は私に_____性格だ。

- a) 似る b) 似ている c) 似てある d) 似た

*性格 : kişilik, karakter

6. あの_____男をどうかしてくれよ。

- a) 困った b) 困ってある c) 困る d) 困っている

*どうかしてくれ : öyle ya da böyle/ne yapıp edip bir şeyler yap

7. プレイガイドの前はチケットを_____人たちの列ができていた。

- a) 買う b) 買ってある c) 買った d) 買っている

*プレイガイド : bilet gişesi 列 : sıra

8. 彼はその仕事に_____男だ。

- a) 適した b) 適している c) 適してある d) 適する

*適する : uygun olmak

IV. 例のように、() 中の動詞を適当な形に変えて、_____に書きなさい。
答えが一つ以上の場合、答えの間に「/」を入れて書きなさい。全ての質問に答え
なさい。(漢字を書かなくても構いません)

**Örnekteki gibi, parantez içinde verilen fiili uygun şekliyle boş bırakılan yere yazınız.
1'den fazla fiil şeklinin uygun olduğunu düşünüyorsanız, aralarına / koyarak hepsini
yazınız. Lütfen cevaplanmayan bir soru bırakmayınız. (Kanji yazmanıza gerek yoktur)**

例 : 日本人の夏のファッションに_____外国人が少な
くない。(驚く : şaşırmak)

1. スカーフを首に_____女が座っていた。
(巻く : dolamak)

2. A: お母さん! このおもちゃも壊れているよ。

B: ここに持ってきて! _____おもちゃは
全部捨てましょう。(壊れる : bozulmak)

3. 彼のお母さんは年をとった女の人です。

→彼のお母さんは年を_____。(とる)

4. あのスーパーで_____チーズを使えば、
このケーキは簡単にできます。(売る)
5. A: (電話で) 薬がびんに入っているので、ご飯を食べてから飲んでね。
B: わかった。
(1時間後、電話をかけて)
薬が_____びんはどこ?(入る)
A: テーブルの上にあるよ。
6. 大通りは、立派な着物を着た女の子でいっぱいです。
→ ほら! 女の子はみんな立派な着物を_____ね。(着る)
*大通り: ana cadde 立派な: şık, güzel, zarif
7. このシャンプーを使えば、_____人でもどんどん髪が生えてきます。(禿げる: kel olmak) *どンドン: gitgide (髪が) 生える: (saç) çıkmak
8. その眼鏡をかけた人は彼の父親です。
→ 彼の父親は眼鏡を_____。(かける)
9. A: 箱はいくつかあるけど、全部蓋が取れているよ。
B: じゃ、今回は袋を使って、蓋が_____箱は使わないようにしましょう。(取れる: çıkmak) *蓋: kapak
10. _____日にはここから富士山が見えます。
(晴れる: (hava) güneşli/açık olmak)

V.

A. Aşağıdaki Japonca cümleleri Türkçe'ye çeviriniz. Lütfen cevaplanmayan bir soru bırakmayınız.

* Her Japonca ifadeye karşılık 1 Türkçe ifade olacak şekilde çeviri yapıp, [,], [/], [ya da], [veya] gibi sembol ve ifadelerle birden fazla çeviri yapmayınız.

* Parantez içinde Türkçe karşılığı verilen fiiller geçişsiz fiil (自動詞) dir (örnek: kesilmek). Fakat çevirirken, fiili verilen şekliyle (geçişsiz fiil olarak) almayabilirsiniz. Kullanacağımız ek Türkçe'de o fiilin geçişsiz haliyle kullanılmıyorsa fiili geçişli

(他動詞) haline değiştiriniz (örnek: kesilmek (geçişsiz) > kesmek (geçişli)).

1. ^{あな} (穴があく : delinmek) ^{くつした} (靴下 : çorap)

a. いやだー！また^{くつした} ^{あな}靴下に穴があいた！

→ Olamaz! Yine çorabım _____.

b. ^む ^{すわ} ^{ひと} ^{くつした} ^{あな}向こうに座っている人の靴下に穴があいている。

→ Karşıda oturan kişinin çorabı _____.

c. ^{あな} ^{くつした} ^き ^は ^{ひと} ^{すく}穴のあいた靴下を気にせず履く人が少くない。

→ _____ çorapları umursamadan giyen insanlar az değil.

d. ^こ ^{あな} ^{くつした} ^はあの子は穴のあいている靴下を履いていた。

→ O çocuk _____.

2. ^{はず} (外れる : kopmak)

a. ^か ^{はず}買ったばかりのドレスのボタンが外れた。

→ Yeni aldığım elbisenin düğmesi _____.

b. ^{はず} ^{やす}このドレスはボタンが外れているよ。だから、安いんだ。

→ Bu elbisenin düğmesi _____ . O yüzden ucuz.

c. ^{はず} ^つ ^{かた}外れたボタンの付け方がわかりますか？

→ _____ nasıl dikileceğini biliyor musun?

d. ^{はず} ^{あたら} ^か外れているボタンを新しいボタンに変えた。

→ _____ yeni düğmeyle değiştirdim.

3. (焦げる : yanmak)

a. ^{なべ ひ け}鍋の火を消すのを忘れたので、^{にく こ}肉が焦げた。

→ Ocağı kapatmayı unuttuğum için _____.

b. ^{となり}隣のテーブルの^{にく こ}肉が焦げている。

→ Yan masadaki etler _____.

c. ^こ焦げた肉を^{にく た}食べないでね!

→ _____ yeme, tamam mı?

d. このスポンジで^こ焦げているフライパンを^{こす}擦ると、^{こ お}焦げを落とすことができる。

(スポンジ : sünger)

→ _____ ovunca, yanmış kısımlar temizlenebilir.

B. Aşağıdaki Türkçe cümleleri Japonca'ya çeviriniz. Lütfen cevaplanmayan bir soru bırakmayınız. (Kanji yazmanıza gerek yoktur)

* Her Türkçe ifadeye karşılık **1 Japonca ifade** olacak şekilde çeviri yapıp, [,], [/], [ya da], [veya] gibi sembol ve ifadelerle **birden fazla çeviri yapmayınız.**

* Lütfen çeviri yaparken parantez içinde verilen sözlük karşılıklarını kullanınız.

1. (pencere: ^{まど}窓, cam : ガラス, kırılmak : ^わ割れる)

a. Pencerenin camı kırıldı.

→ _____。

b. Pencerenin camı kırılmış.

→ _____。

c. Pencerenin camı kırık.

→ _____。

d. Kırılan camı gazete kağıdına sarıp çöpe attım.

→ _____ ^{しんぶんし つつ す}を新聞紙で包んで捨てた。

e. Kırılmış olan cam dokunmatığı etkiliyorsa, ekran değişimi yapılır.

→ _____ ^{がめん じゆう そうさ ぼあい がめん しんびん}画面で自由にタッチ操作ができない場合、画面を新品に

^{こうかん}交換させていただきます。

f. Kırık cam tamir edilemez.

→ _____ は修理しゅうりすることができません。

2. (kazak : セーター, yırtılmak : 破やぶれる)

a. Kazak yırtıldı.

→ _____。

b. Bu kazak yırtılmış.

→ _____。

c. O kazak yırtık.

→ _____。

d. Annem yırtılan kazağımı çöpe atmış.

→ 母ははは _____ をゴミ箱ぼこすに捨ててしまったそうだ。

e. Yırtılmış kazaklarını dikmeye çalışıyordu.

→ 彼女かのじよは _____ を編あみ直なおしていた。

f. Şurada yırtık bir kazak var. Senin mi?

→ そこに _____。あなたのですか？

3. (dal : 枝えだ, eğilmek : たわむ)

a. Şiddetli rüzgardan ağaçların dalları eğildi.

→ 強風きょうふうを受けて、木きの _____。

b. Kardan, ağacın dalları eğilmiş.

→ 雪ゆきで _____。

c. “Şu ağacın dalları neden eğik?” diye sordu.

→ 「 _____ 」と尋たずねた。

d. “Eğilen dal kırılmaz” derler.

→ 「 _____ 折おれない」と言いわれる。

e. Kar yüzünden eğilmiş olan dalları çitalarla sabitledi.

→ 雪ゆきで _____ 栈さんで安あん定ていさせた。

f. Ağacın eğik dallarına dokundu.

→ _____ 触さわった。

付属資料 2

表 1 1 年生 (30 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題 グループ	設問 番号	正答	タの 回答数	テイルの 回答数	ルの 回答数	テアルの 回答数	正答数 (率)
I (連体)	1	堂々とした	5	20	4	1	5 (16.7%)
	2	優れた	4	14	9	3	4 (13.3%)
	4	青い目をした	3	27	0	0	3 (10%)
	5	決まった	3	13	7	7	3 (10%)
II (主節)	2	人間の顔をしている	19	7	3	1	7 (23.3%)
	3	太っている	9	19	2	0	19 (63.3%)
	4	冷え冷えとしている	27	1	1	1	1 (3.3%)
	5	満ち足りている	5	17	7	1	17 (56.7%)

表 2 1 年生 (30 名) の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題 グループ	設問番号	正答	タを選択した 割合	テイルを選択した割 合
I (連体)	1	堂々とした	12.5%	61.7%
	2	優れた		
	4	青い目をした		
	5	決まった		
II (主節)	2	人間の顔をしている	50%	36.7%
	3	太っている		
	4	冷え冷えとしている		
	5	満ち足りている		

表 3 2 年生 (27 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タの回答数	テイルの回答数	ルの回答数	テアルの回答数	正答数 (率)
I (連体)	1	堂々とした	0	25	2	0	0 (0%)
	2	優れた	4	14	8	1	4 (14.8%)
	4	青い目をした	0	21	4	2	0 (0%)
	5	決まった	5	13	3	6	5 (18.5%)
II (主節)	2	人間の顔をしている	18	6	2	1	6 (22.2%)
	3	太っている	17	9	0	1	9 (33.3%)
	4	冷え冷えとしている	23	3	0	1	3 (11.1%)
	5	満ち足りている	5	15	7	0	15 (55.6%)

表 4 2 年生 (27 名) の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タを選択した割合	テイルを選択した割合
I (連体)	1	堂々とした	8.3%	67.6%
	2	優れた		
	4	青い目をした		
	5	決まった		
II (主節)	2	人間の顔をしている	58.3%	30.6%
	3	太っている		
	4	冷え冷えとしている		
	5	満ち足りている		

表 5 3 年生 (31 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タの回答数	テイルの回答数	ルの回答数	テアルの回答数	正答数 (率)
I (連体)	1	堂々とした	7	19	5	0	7 (22.6%)
	2	優れた	8	19	3	1	8 (25.8%)
	4	青い目をした	1	25	3	2	1 (3.2%)
	5	決まった	10	16	1	4	10 (32.3%)
II (主節)	2	人間の顔をしている	16	11	3	1	11 (35.5%)
	3	太っている	8	22	0	1	22 (71%)
	4	冷え冷えとしている	20	6	4	1	6 (19.4%)
	5	満ち足りている	6	17	7	1	17 (54.8%)

表 6 3 年生 (31 名) の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位
置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題 グループ	設問番号	正答	タを選択した 割合	テイルを選択した割 合
I (連体)	1	堂々とした	21%	63.7%
	2	優れた		
	4	青い目をした		
	5	決まった		
II (主節)	2	人間の顔をしている	40.3%	45.2%
	3	太っている		
	4	冷え冷えとしている		
	5	満ち足りている		

表 7 4 年生 (29 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (構造的位
置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題 グループ	設問 番号	正答	タの 回答数	テイルの 回答数	ルの 回答数	テアルの 回答数	正答数 (率)
I (連体)	1	堂々とした	5	17	7	0	5 (17.2%)
	2	優れた	7	17	3	2	7 (24.1%)
	4	青い目をした	1	19	6	3	1 (3.4%)
	5	決まった	11	11	3	4	11 (37.9%)
II (主節)	2	人間の顔をしている	10	16	3	0	16 (55.2%)
	3	太っている	4	24	1	0	24 (82.8%)
	4	冷え冷えとしている	23	5	1	0	5 (17.2%)
	5	満ち足りている	3	17	8	1	17 (58.6%)

表 8 4 年生 (29 名) の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位
置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題 グループ	設問番号	正答	タを選択した 割合	テイルを選択した割 合
I (連体)	1	堂々とした	20.7%	55.2%
	2	優れた		
	4	青い目をした		
	5	決まった		
II (主節)	2	人間の顔をしている	34.5%	53.4%
	3	太っている		
	4	冷え冷えとしている		
	5	満ち足りている		
	6	困った		
	8	適した		

表 9 語彙的形狀動詞における形式の学年別の回答率と正答率 (構造的位
置による形式の交替を要因として設定した場合)

問題 グループ	設問の形式	回答	学年別の回答率			
			1 年生 (30 名)	2 年生 (27 名)	3 年生 (31 名)	4 年生 (29 名)
I	述語のテイルを会話文に 挿入し、連体形のタを問 う	タ	12.5%	8.3%	21%	20.7%
		テイル	61.7%	67.6%	63.7%	55.2%
		ル	16.7%	15.8%	9.7%	16.4%
		テアル	9.1%	8.3%	5.6%	7.7%
II	連体形のタを文中に入 れ、述語のテイルを問う	タ	50%	58.3%	40.3%	34.5%
		テイル	36.7%	30.6%	45.2%	53.4%
		ル	10.8%	8.3%	11.3%	11.2%
		テアル	2.5%	2.8%	3.2%	0.9%
正答率			24.6%	19.5%	43.6%	37.1%

表 10 1 年生 (30 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タの回答数	テイルの回答数	ルの回答数	テアルの回答数	正答数 (率)
III	1	星の形をした	4	20	4	2	4 (13.3%)
	2	生き生きとした	5	13	10	2	5 (16.7%)
	3	込み入った	6	8	15	1	6 (20%)
	5	似た	1	29	0	0	1 (3.3%)
	6	困った	3	26	1	0	3 (10%)
	8	適した	3	19	6	2	3 (10%)

表 11 1 年生 (30 名) の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タを選択した割合	テイルを選択した割合
III	1	星の形をした	12.2%	63.9%
	2	生き生きとした		
	3	込み入った		
	5	似た		
	6	困った		
	8	適した		

表 12 2 年生 (27 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タの回答数	テイルの回答数	ルの回答数	テアルの回答数	正答数 (率)
III	1	星の形をした	1	17	7	2	1 (3.7%)
	2	生き生きとした	5	9	12	1	5 (18.5%)
	3	込み入った	5	5	15	2	5 (18.5%)
	5	似た	0	25	1	1	0 (0%)
	6	困った	6	21	0	0	6 (22.2%)
	8	適した	2	11	11	3	2 (7.4%)

表 13 2年生(27名)の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合(テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タを選択した割合	テイルを選択した割合
III	1	星の形をした	11.7%	54.3%
	2	生き生きとした		
	3	込み入った		
	5	似た		
	6	困った		
	8	適した		

表 14 3年生(31名)の語彙的形狀動詞における形式の使用状況(テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タの回答数	テイルの回答数	ルの回答数	テアルの回答数	正答数(率)
III	1	星の形をした	10	11	8	2	10(32.3%)
	2	生き生きとした	7	6	17	1	7(22.6%)
	3	込み入った	12	6	10	3	12(38.7%)
	5	似た	5	24	1	1	5(16.1%)
	6	困った	10	20	0	1	10(32.3%)
	8	適した	5	14	7	5	5(16.1%)

表 15 3年生(31名)の語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合(テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タを選択した割合	テイルを選択した割合
III	1	星の形をした	26.3%	43.6%
	2	生き生きとした		
	3	込み入った		
	5	似た		
	6	困った		
	8	適した		

表 16 4 年生 (29 名) の語彙的形狀動詞における形式の使用状況 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タの回答数	テイルの回答数	ルの回答数	テアルの回答数	正答数 (率)
III	1	星の形をした	7	9	8	5	7 (24.1%)
	2	生き生きとした	7	8	13	1	7 (24.1%)
	3	込み入った	11	7	9	2	11 (37.9%)
	5	似た	2	27	0	0	2 (6.9%)
	6	困った	9	19	1	0	9 (31%)
	8	適した	2	19	7	1	2 (6.9%)

表 17 4 年生 (29 名) 語彙的形狀動詞におけるタとテイルの使用の割合 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問番号	正答	タを選択した割合	テイルを選択した割合
III	1	星の形をした	21.8%	51.2%
	2	生き生きとした		
	3	込み入った		
	5	似た		
	6	困った		
	8	適した		

表 18 語彙的形狀動詞における形式の学年別の回答率と正答率 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

問題グループ	設問の形式	回答	学年別の回答率			
			1 年生 (30 名)	2 年生 (27 名)	3 年生 (31 名)	4 年生 (29 名)
III	述語の形を挙げず、連体形のタを問う	タ	12.2%	11.7%	26.3%	21.8%
		テイル	63.9%	54.3%	43.6%	51.2%
		ル	20%	28.4%	23.1%	21.8%
		テアル	3.9%	5.6%	7%	5.2%
正答率			12.2%	11.7%	26.3%	21.8%

表 19 1 年生 (30 名) の構造的形状動詞における各形式の使用状況 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式		述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		壊れた/壊れている (回答数)	入った/入っている・入っていた (回答数)	蓋が取れた/取れている (回答数)
回 答	タ/テイル	8	2	4
	タ	9	3	13
	テイル ⁵⁹	8	20	8
	ル	0	1	2
	ル/タ	0	1	1
	タ/テアル	1	1	1
	テイル/テアル	0	2	0
	テイタ	2	0	0
タ/テイタ	2	0	1	
正答数 (率)		8 (26.7%)	2 (6.7%)	4 (13.3%)
設問の形式		連体形のタを文中に入れ、述語のテイルを問う		
正答→		年をとっている・とって いた (回答数)	着ている ⁶⁰ (回答数)	眼鏡をかけている・かけ ていた (回答数)
回 答	タ/テイル	3	4	2
	タ	14	1	2
	テイル	12	23	24
	ル	1	1	0
	ル/テイル	0	0	2
正答数 (率)		12 (40%)	23 (79.3%)	24 (80%)

表 20 1 年生 (30 名) の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを 回答した割合	タを回答し た割合	テイルを回答し た割合
述語のテイルを会話文 に挿入し、連体形のタ /テイルを問う	壊れた/壊れている	15.6%	27.9%	40%
	入った/入っている・入っていた			
	蓋が取れた/取れている			
連体形のタを文中に入 れ、述語のテイルを問 う	年をとっている・とっていた	10.1%	19.1%	66.2%
	着ている			
	眼鏡をかけている・かけていた			

⁵⁹ テイルの回答数には「入っていた」のような正答である場合のみ、テイタの回答数を含んでいる。「壊れていた」や「取れていた」は正答ではないため、これらの動詞についてテイタで回答された場合は、別に設けたテイタの欄に入力する。次の学年別の結果の場合も同様である。

⁶⁰ 一人の学習者が答えていないため、回答数は合計 29 である。

表 21 2年生(27名)の構造的形状動詞における各形式の使用状況(構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式		述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		壊れた/壊れている (回答数)	入った/入っている・入っていた (回答数)	蓋が取れた/取れている (回答数)
回 答	タ/テイル	8	4	6
	タ	12	3	7
	テイル	3	18	9
	ル	0	0	2
	ル/テイル	0	0	1
	タ/テアル	1	0	0
	テイル/テアル	0	0	1
	テイタ	1	0	0
	タ/テイタ	2	0	1
	ル/タ/テイル	0	1	0
テアル	0	1	0	
正答数(率)		8(29.6%)	4(14.8%)	6(22.2%)
設問の形式		連体形のタを文中に入れ、述語のテイルを問う		
正答→		年をとっている・とって いた(回答数)	着ている (回答数)	眼鏡をかけている・かけ ていた(回答数)
回 答	タ/テイル	0	4	3
	タ	9	3	3
	テイル	13	18	17
	ル	3	1	1
	ル/テイル	0	0	3
	ル/タ/テイル	0	1	0
	テアル	1	0	0
	タ/テイタ	1	0	0
正答数(率)		13(48.1%)	18(66.7%)	17(63%)

表 22 2年生(27名)の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合(構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを 回答した割合	タを回答し た割合	テイルを回答し た割合
述語のテイルを会話文 に挿入し、連体形のタ /テイルを問う	壊れた/壊れている	22.2%	27.3%	37.1%
	入った/入っている・入っていた			
	蓋が取れた/取れている			
連体形のタを文中に入 れ、述語のテイルを問 う	年をとっている・とっていた	8.7%	18.5%	59.3%
	着ている			
	眼鏡をかけている・かけていた			

表 23 3 年生 (31 名) の構造的形状動詞における各形式の使用状況 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式		述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		壊れた/壊れている (回答数)	入った/入っている・入っていた (回答数)	蓋が取れた/取れている (回答数)
回 答	タ/テイル	8	2	4
	タ	12	7	10
	テイル	10	18	7
	ル	0	1	8
	テイタ	0	0	2
	タ/テイタ	1	0	0
	テアル	0	3	0
正答数 (率)		8 (25.8%)	2 (6.5%)	4 (12.9%)
設問の形式		連体形のタを文中に入れ、述語のテイルを問う		
正答→		年をとっている・とって いた (回答数)	着ている (回答数)	眼鏡をかけている・かけ ていた (回答数)
回 答	タ/テイル	0	3	2
	タ	12	3	1
	テイル	18	20	26
	ル	1	2	0
	ル/テイル	0	1	1
	テアル	0	0	1
	テイタ	0	2	0
正答数 (率)		18 (58.1%)	20 (64.5%)	26 (83.9%)

表 24 3 年生 (31 名) の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを 回答した割合	タを回答し た割合	テイルを回答し た割合
述語のテイルを会話文 に挿入し、連体形のタ /テイルを問う	壊れた/壊れている	15.1%	31.2%	37.6%
	入った/入っている・入っていた			
	蓋が取れた/取れている			
連体形のタを文中に入 れ、述語のテイルを問 う	年をとっている・とっていた	5.4%	17.2%	68.8%
	着ている			
	眼鏡をかけている・かけていた			

表 25 4 年生 (29 名) の構造的形状動詞における各形式の使用状況 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式		述語のテイルを会話文に挿入し、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		壊れた/壊れている (回答数)	入った/入っている・入っていた (回答数)	蓋が取れた/取れている (回答数)
回 答	タ/テイル	11	2	0
	タ	8	3	2
	テイル	7	19	24
	ル	0	1	1
	ル/テイル	0	0	1
	タ/テアル	1	0	0
	テイル/テアル	0	1	0
	テイタ	1	0	1
	タ/テイタ	1	0	0
	テアル	0	3	0
正答数 (率)		11 (37.9%)	2 (6.9%)	0 (0%)
設問の形式		連体形のタを文中に入れ、述語のテイルを問う		
正答→		年をとっている・とって いた (回答数)	着ている (回答数)	眼鏡をかけている・かけ ていた (回答数)
回 答	タ/テイル	1	1	5
	タ	12	1	4
	テイル	16	22	14
	ル	0	0	5
	ル/テイル	0	1	0
	ル/タ/テイル	0	0	1
	テアル	0	2	0
	テイタ	0	2	0
正答数 (率)		16 (55.2%)	22 (75.9%)	14 (48.3%)

表 26 4 年生 (29 名) の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合 (構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを 回答した割合	タを回答し た割合	テイルを回答し た割合
述語のテイルを会話文 に挿入し、連体形のタ /テイルを問う	壊れた/壊れている	14.9%	14.9%	57.4%
	入った/入っている・入っていた			
	蓋が取れた/取れている			
連体形のタを文中に入 れ、述語のテイルを問 う	年をとっている・とっていた	8%	19.5%	59.8%
	着ている			
	眼鏡をかけている・かけていた			

表 27 構造的形状動詞における形式の学年別の回答率と正答率（構造的位置による形式の交替を要因として設定した場合）

問題 グループ	設問の形式	回答	学年別の割合				
			1年生 (30名)	2年生 (27名)	3年生 (31名)	4年生 (29名)	
IV	① 述語のテイルを 会話文に挿入し、連 体形のタ/テイルを 問う（両形式も可能 な動詞を使用した： 壊れる、入る、取れ る）	タ/テイル	15.6%	22.2%	15.1%	14.9%	
		タ	27.9%	27.3%	31.2%	14.9%	
		テイル	40%	37.1%	37.6%	57.4%	
		ル	3.3%	2.5%	9.6%	2.3%	
		ル/タ	2.2%	-	-	-	
		タ/テアル	3.3%	1.2%	-	1.2%	
		テイル/テアル	2.2%	1.2%	-	1.2%	
		テイタ	2.2%	1.2%	2.2%	2.3%	
		タ/テイタ	3.3%	3.7%	1.1%	1.2%	
		ル/テイル	-	1.2%	-	1.2%	
		ル/タ/テイル	-	1.2%	-	-	
		テアル	-	1.2%	3.2%	3.4%	
		タ/テイル/テアル	-	-	-	-	
	② 連体形のタを文中 に入れ、述語のテイ ルを問う	タ/テイル	10.1%	8.7%	5.4%	8%	
		タ	19.1%	18.5%	17.2%	19.5%	
		テイル	66.2%	59.3%	68.8%	59.8%	
		ル	2.3%	6.2%	3.2%	5.7%	
		ル/テイル	2.3%	3.7%	2.2%	1.2%	
		ル/タ/テイル	-	1.2%	-	1.2%	
		テアル	-	1.2%	1.1%	2.3%	
		タ/テイタ	-	1.2%	-	-	
	正答率			40.9%	40.8%	42%	37.4%

表 28 1 年生 (30 名) の構造的形状動詞における形式の使用状況 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式		述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		巻いた/巻いている・ 巻いていた (回答数)	禿げた/禿げている ⁶¹ (回答数)	晴れた/晴れている ⁶² (回答数)
回答	タ/テイル	11	4	3
	タ	6	7	0
	テイル	11	12	12
	ル	1	3	11
	ル/タ/テアル	0	0	1
	ル/テイル	1	2	2
	ル/タ/テイル	0	1	0
正答数 (率)		11 (36.7%)	4 (13.8%)	3 (10.3%)

表 29 1 年生 (30 名) の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを回 答した割合	タを回答した割 合	テイルを回答し た割合
述語の形を挙げ ず、連体形のタ/ テイルを問う	巻いた/巻いている・巻いていた	20.4%	14.8%	39.8%
	禿げた/禿げている			
	晴れた/晴れている			

表 30 2 年生 (27 名) の構造的形状動詞における形式の使用状況 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式		述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		巻いた/巻いている・巻 いていた (回答数)	禿げた/禿げている (回答数)	晴れた/晴れている (回答数)
回答	タ/テイル	7	3	3
	タ	6	5	3
	テイル	9	8	8
	ル	0	5	6
	ル/テアル	0	1	0
	ル/テイル	1	3	6
	ル/タ/テイル	2	0	0
	ル/タ	1	1	1
	タ/テアル	1	0	0
	テアル	0	1	0
正答数 (率)		7 (25.9%)	3 (11.1%)	3 (11.1%)

⁶¹ 一人の学習者が答えていないため、回答数は合計 29 である。

⁶² 一人の学習者が答えていないため、回答数は合計 29 である。

表 31 2年生(27名)の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合(テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを回答した割合	タを回答した割合	テイルを回答した割合
述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う	巻いた/巻いている・巻いていた	16%	17.3%	30.9%
	禿げた/禿げている			
	晴れた/晴れている			

表 32 3年生(31名)の構造的形状動詞における形式の使用状況(テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式		述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		巻いた/巻いている・巻いていた(回答数)	禿げた/禿げている(回答数)	晴れた/晴れている(回答数)
回答	タ/テイル	8	4	3
	タ	8	5	5
	テイル	11	15	11
	ル	2	4	9
	ル/テイル	1	1	2
	ル/タ/テイル	1	0	1
	テイル/テイク	0	1	0
	タ/テイタ	0	1	0
正答数(率)		8(25.8%)	4(12.9%)	3(9.7%)

表 33 3年生(31名)の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合(テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを回答した割合	タを回答した割合	テイルを回答した割合
述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う	巻いた/巻いている・巻いていた	16.1%	19.3%	39.8%
	禿げた/禿げている			
	晴れた/晴れている			

表 34 4 年生 (29 名) の構造的形状動詞における形式の使用状況 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式		述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う		
正答→		巻いた/巻いている・巻いていた (回答数)	禿げた/禿げている (回答数)	晴れた/晴れている (回答数)
回答	タ/テイル	6	5	6
	タ	7	4	4
	テイル	11	13	9
	ル	1	5	5
	ル/テイル	1	0	1
	ル/タ/テイル	1	1	0
	ル/タ	1	0	0
	テアル	0	0	1
	テイル/テアル	1	0	0
	テイタ	0	1	3
正答数 (率)		6 (20.7%)	5 (17.2%)	6 (20.7%)

表 35 4 年生 (29 名) の構造的形状動詞におけるタとテイルの使用の割合 (テイルの用法の定着化を要因として設定した場合)

設問の形式	正答	タ/テイルを回答した割合	タを回答した割合	テイルを回答した割合
述語の形を挙げず、連体形のタ/テイルを問う	巻いた/巻いている・巻いていた	19.5%	17.2%	37.9%
	禿げた/禿げている			
	晴れた/晴れている			

表 36 構造的形状動詞における形式の学年別の回答率と正答率（テイルの用法の定着化を要因として設定した場合）

問題 グループ	設問の形式	回答	学年別の割合			
			1年生 (30名)	2年生 (27名)	3年生 (31名)	4年生 (29名)
IV	述語の形をあげず、連体形のタ/テイルを問う (両形式も可能な動詞を使用した：巻く、禿げる、晴れる)	タ/テイル	20.4%	16%	16.1%	19.5%
		タ	14.8%	17.3%	19.3%	17.2%
		テイル	39.8%	30.9%	39.8%	37.9%
		ル	17.1%	13.6%	16.1%	12.6%
		ル/タ/テアル	1.1%	-	-	-
		ル/テイル	5.7%	12.4%	4.3%	2.3%
		ル/タ/テイル	1.1%	2.5%	2.2%	2.3%
		ル/テアル	-	1.2%	-	-
		ル/タ	-	3.7%	-	1.2%
		タ/テアル	-	1.2%	-	-
		テアル	-	1.2%	-	1.2%
		テイル/テイク	-	-	1.1%	-
		タ/テイタ	-	-	1.1%	-
		テイル/テアル	-	-	-	1.2%
テイタ	-	-	-	4.6%		
正答率			20.4%	16%	16.1%	19.5%

表 37 1年生（30名）の自由翻訳テストによるトルコ語の形容詞的形式とタとテイルとの対応関係

部門	設問の形式	構造的位 置	形式	対応形式									
				-DI	-Ik	-mİş	-(y)En	-yor	タ	テイル	ル	テアル	テオ イタ
A	日 土	述語	タ	88.9%	0%	11.1%	0%	0%	-	-	-	-	-
			テイル	1.1%	80%	16.7%	0%	2.2%	-	-	-	-	-
	連体 修飾	タ	0%	42.7%	50.6%	6.7%	0%	-	-	-	-	-	
		テイル	0%	60.5%	31.4%	8.1%	0%	-	-	-	-	-	
B	土 日	述語	-DI	-	-	-	-	-	91.1%	6.7%	2.2%	0%	0%
			-Ik	-	-	-	-	-	6.7%	90%	0%	3.3%	0%
			-mİş	-	-	-	-	-	46.7%	41.1%	0%	8.9%	3.3%
		連体 修飾	-Ik	-	-	-	-	-	27.8%	67.8%	1.1%	3.3%	0%
			-mİş	-	-	-	-	-	52.2%	43.4%	0%	3.3%	1.1%
			-(y)En	-	-	-	-	-	60%	33.3%	5.6%	1.1%	0%

表 38 2年生(27名)の自由翻訳テストによるトルコ語の形容詞的形式とタとテイルとの対応関係

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式								
				-DI	-Ik	-mİş	-(y)En	-yor	タ	テイル	ル	テアル
A	目 - 土	述語	タ	85.2%	0%	14.8%	0%	0%	-	-	-	-
			テイル	1.2%	80.3%	11.1%	0%	7.4%	-	-	-	-
	連体 修飾	タ	0%	40.7%	49.4%	9.9%	0%	-	-	-	-	
		テイル	0%	67.1%	27.4%	5.5%	0%	-	-	-	-	
B	土 - 目	述語	-DI	-	-	-	-	-	96.3%	2.5%	1.2%	0%
			-Ik	-	-	-	-	-	3.7%	91.3%	2.5%	2.5%
			-mİş	-	-	-	-	-	51.9%	40.7%	0%	7.4%
		連体 修飾	-Ik	-	-	-	-	-	28.4%	65.4%	3.7%	2.5%
			-mİş	-	-	-	-	-	53.1%	44.4%	0%	2.5%
			-(y)En	-	-	-	-	-	64.2%	25.9%	9.9%	0%

表 39 3年生(31名)の自由翻訳テストによるトルコ語の形容詞的形式とタとテイルとの対応関係

部門	設問の形式	構造的位置	形式	対応形式								
				-DI	-Ik	-mİş	-(y)En	-yor	タ	テイル	ル	テアル
A	目 - 土	述語	タ	81.7%	1.1%	17.2%	0%	0%	-	-	-	-
			テイル	1.1%	67.7%	19.4%	0%	11.8%	-	-	-	-
	連体 修飾	タ	0%	41.9%	49.5%	8.6%	0%	-	-	-	-	
		テイル	0%	52.5%	33.7%	13.8%	0%	-	-	-	-	
B	土 - 目	述語	-DI	-	-	-	-	-	92.5%	6.4%	1.1%	0%
			-Ik	-	-	-	-	-	9.7%	79.6%	1.1%	9.7%
			-mİş	-	-	-	-	-	38.7%	59.1%	0%	2.2%
		連体 修飾	-Ik	-	-	-	-	-	35.5%	55.9%	3.2%	5.4%
			-mİş	-	-	-	-	-	40.9%	58%	0%	1.1%
			-(y)En	-	-	-	-	-	59.1%	33.4%	7.5%	0%

表 40 4年生(29名)の自由翻訳テストによるトルコ語の形容詞的形式とタとテイルとの対応関係

部門	設問の形式	構造的位 置	形式	対応形式								
				-DI	-Ik	-mİş	-(y)En	-yor	タ	テイル	ル	テアル
A	目	述語	タ	86.2%	0%	13.8%	0%	0%	-	-	-	-
			テイル	4.6%	48.3%	35.6%	0%	11.5%	-	-	-	-
	土	連体 修飾	タ	0%	43.7%	46%	10.3%	0%	-	-	-	-
			テイル	0%	57.6%	30.6%	11.8%	0%	-	-	-	-
B	土	述語	-DI	-	-	-	-	-	97.6%	1.2%	1.2%	0%
			-Ik	-	-	-	-	-	3.5%	87.2%	2.3%	7%
			-mİş	-	-	-	-	-	28.7%	60.9%	1.1%	9.3%
	目	連体 修飾	-Ik	-	-	-	-	-	30.2%	67.5%	0%	2.3%
			-mİş	-	-	-	-	-	34.5%	57.5%	1.1%	6.9%
			-(y)En	-	-	-	-	-	75.9%	23%	0%	1.1%